

年中行事

解説

関口正巳

北橋村の年中行事のめだつ点を拾いあげて、その特色に触れてみた。
い。

正月の行事のなかで、朝湯をたてることは広く行なわれるが、上箱田のようにムラ中の輪番制にして三日の間、十五軒が一戸一人ずつ寄ってはいったというのは古風をよく伝えている。年始の回礼も丁寧で、分郷八崎では村の家（六、七十戸）残らず回るので半日もかかったというし、元旦早々ワラジばきだったというから、村の義理固さや結合の強さが伺えよう。新年会（初会合）がここでは青年会の話し初めになっている。婚礼の席を青年が引き受けているため、その話し練習をするというのは興味深い。若衆連が村落生活の中で果たす役割りを物語っているものであろう。六日年が重視され、二年始に出た者も必ず帰って家で年取りをすることになっている例（上箱田）はこの日の隠れた意味を考えさせる。八日ダイといって、八日に仕事始めのダイ出しをするのは、いかにも農家らしい風習で、生産が生活に密着している姿を示している。小正月行事ではオンシラマチが盛んで、オンシラ神の神体は蜚神、桐笠様などの掛軸を対象としており、オンシラ神は養蚕の神として祭られてゐる。十四日の夜、オミタマ様を祭り、オタキアゲをしたご飯を鉢に盛り

ハラミ箸を十二本（小室）、または家族数（八崎、真壁）だけさして、オミタマ様にあげたり、年神様にあげたりしているのは極めて興味深いことで、かねて先字都丸九十九氏が発表されたように、年神とオミタマ様（祖先霊）とが同一性格をもつものとの信仰の現われと推測される。十五日ガユを煮る時にカユカキ棒でかき回すのは年占として広く行なわれているが、ここでは年男が田をならす動作に見たてて（八崎、真壁）タロマワシのまねをしているというのは、いかにも農村らしい風習である。十六日を「タワゴトの十六日」と呼んでいわゆる無礼講の日になっているのは、一般に「鬼の首も許される日」というのと同じく、全くの解放された一日をよく表わしている。

五月の行事で山開きが盛んなのは、ここが赤城山、榛名山、子持山、加業山などの山の霊地に比較的近くて恵まれていることも関係がある。特に赤城山とは関連が深く、昔は赤城山から盆様を迎えたらしいという伝承（小室）にも、霊山信仰のおもかげが伺われる。五日の節供のショウブ湯については、三輪伝説の原形がよく残っている。

七月の農休みごろ、「生き盆」という行事が行なわれ、新婚夫婦が親もとで近所にもふるまいをするのは、生きていく親への報恩とともに、麦作の収穫祝いも兼ねているように思われる。夏の祭りにカヤヤススキを盛んに供えるのはなぜであるか。「天王様にススキはつきもの」（小室）というし、諏訪様の祭りはカヤの箸で赤飯を食べ、「カヤの正月」（上箱田）ともいい、七夕には一升びんにカヤ、ススキをさして供えるし、盆棚にもススキの束を飾っている（小室）。花の少ない時期でもあろうが、十五夜、十三夜などのカヤ、ススキとの関連も想像される。盆を迎える

のに、家のカドで迎え火をたき、線香を道々置いて百八灯のかわりにする風習（小室）は、いかにも人情のこまやかなものである。新盆の百八灯もよく残っている（小室、下南室等）。寺へ新しいソウリを持って迎え盆に行く（真壁、上箱田）のは古風な人の心のやさしさをよく表現している。

八期の節供をタノモノ節供、ショウガの節供などと呼び、嫁がショウウガを持って実家へ客に行く風がよく残っていた。そのお返しにショウウギ、メケーなどを持たせることも県下に残存するが、その説明がここでは「手数でも置いてくれ」となっている（上箱田）のもおもしろい。旧十月一日の神送りは、上箱田では朝暗いうちに鎮守にお守りして良縁を折ったが、遅くなると「アーリヤ、コーリヤ」でさまり、その夫婦はこわれるといわれることなどは、境町や鬼石町下久保などでも出てきたことで、「アーリヤ、コーリヤ」でさまるといふことばまで同じなのは、この信仰を伝播させたものの存在を推測させる。エビス講は神を送り出した留守居を祭るといふ考え方までよく似ている。小室で畑の麦まきが終わった祝いの穴ツブサゲ餅と、田の麦まきが終えた時の田麦カユとを別々に重ねて祝うのは、土地がら畑作が重視されたものであろうか。十日夜に庭へ種わらの束を飾って、餅や大根芋などを供えることは、利根郡と関連をもつ風習で、この日が収穫祝いであったことを物語っている。屋敷稲荷の祭りを二十三日の新嘗祭の日に行っているのは、この祭本来の意義をよく現わしているものである。油餅を夫婦餅と呼んで、冬至前の初冬の日を夫婦仲よく祝うものとしているのは、何とほはえまじい行事である。

正月の用意でお松迎えに取ってきた松を屋敷稲荷の所に置いて、おサゴとタツクリを供える（分郷八崎）のは、松を飾り物としてでなく、年神の依りしろと考えている気持ち強く表われている。

以上ざっと見てきても、かなり古風を伝えていることが伺えるが、これも特別に老人がたの口から語られたものだからのことで、現在はずで

にかなり消えている風習が多いものと思われ、家によっても差が激しいであろう。

この項の記述に当っては、各項目別に一区（八崎、分郷八崎）、二区（小室）、三区（南室）、四区（上箱田）、五区（箱田、下箱田）、六区（真壁）の順に並べて、地域の変化を比べてみる便も考慮した。

一月

元日

年神様 お正月様は卯の日の卯の刻にかえる。早く帰るほどヨドシがよいと言った。（箱田）

正月さまは卯の日の卯の刻に来て、十二日目の卯の日の卯の刻にかえるという。（上小室）

年男 一日の早朝一家の主人が若水を汲んで、切火で火をつけ、茶を沸かし、朝食を作る。（分郷八崎）

年男が朝早く起きて若水を汲んだり、朝湯をたてたりする。（小室）元日から三日の間、お松に食べ物を供える。四つ組の小鉢を重ねて供えておき、四日の朝お餅がしに食べた。（小室）

若水 若水は一月一日の早朝、年男が昔は川で、後には井戸で汲んで神様へ上げるものを使用した。こゝでは天竜川の支流の川の水を使用した。（八崎、舟戸）

井戸へオサゴを進せてから、若水を汲んだ。年男の仕事になつていった。（上南室）

若水をくむ。若水は三元日・七日・十一日・十五日・十六日・二十日に汲む。若水は年男が汲む。それで鉄びんに入れ、御飯を煮、セイ風呂に入れ、ソバをこねる。その時、

「あら玉の年たちかえるこの朝

若やく水を汲みそめにけり」

と唱える。(箱田)

朝湯 三が日は朝湯にはいる。(分郷八崎)

朝湯を以前はたてたが今はしなくなつた。三日目に毎朝たてていた。

(上南室)

村中の輪番制になつていて、一日、二日、三日と日がきまつており、一戸一人ずつもらいに行くのだが十五軒あるのでまわるのに大変だつた。元日の番の家は、除夜の鐘のころセエフロに火を燃しはじめ二年がかりで風呂をたくというのでこの日の当番は来じやあなく、この風呂に入つてからめいめい家に帰つて若水をくむことになるので一番大変だつた。シヨテには「湯がたつたから来てくんなんしょ」とよぶと、暗いうちに来たものだ。

二日の朝は初買ひに出かけるのでこれも早くわかしておかねばならず、大変なことは元日のようだつた。

湯番の定では甘酒などをかいておいて、湯に来てくれた人に出した。

(上箱田)

初参り もとは村社三柱神社へ上下小室の衆が寄つて拝賀式をしてから、寺へも回つたので、ワラジばきだつた。(小室)

年始回り 六、七十軒の村の家全部を年始廻りする。家人で都合のつく者は皆——子供たちも——年始廻りをした。一軒から一人は必ず出た。村中廻ると半日はかかったものである。一家の主人は、雙文寺と神主のところへ年始に行った。神主のところでは、必ずお屠蘇が出た。

(分郷八崎)

ご年始は上小室・下小室を回るの、もとはわらじばきでした。

お年玉には小半紙を四、五枚ほど二つ折にしてくれた。ミカンをそえる家もあり、お金を子供にくれる家もある。(小室)

もとは一戸一名宛出て、村中をおしあるいた。夜の明けないうちに帰る人もあつた。

今では区長の合図で神社へ集會、寺への年始は、無任のため世話人がいてうける。(上南室)

朝飯を早くすませて年始まわりで、したくをしてわらじばきで村中をまわるのでまっくらなうちにまわり出した人もいる。この時のじんぎは早くすむもので、朝寝などはしてられない。

戦後になつてから村中をまわるのを略して村社に集まつてそこですませるようになったが毎年行く人はきまつたようだ。(上箱田)

神社に朝まわりしてその後村内のあいさつまわりをする。女はとくにしない。(箱田)

年神棚 年神様の棚は、毎年新しく作つた。神棚には、カチドリ、イカ、ホウズギ、シヨウビキなどを供えた。トウゲイにトウスミを入れて、火をつけ、御燈明とした。(分郷八崎)

もとはオツカドの木を一尺五寸ぐらゐに代りそろえ割つて並べて年神棚を別に作つた。今も作る家がある。(小室)

正月棚は松の板を毎年新調し、そのまわりに七五三の総じめをした。

(上南室)

正月棚を恵方棚、オタナと称した。棚の上には天照皇太神、年神様、鎮守様の神札を上げる。(箱田)

正月棚は山からナラの木を切つて来て約二尺ぐらゐの長さのものをなたて割つて、この八本の両端をなわで編んでアキの方に年神様を並べる。向い合いにオミタマサマの棚を作る。各棚の正面には一本のシメ縄を



年神棚と供え物 (八崎)
(撮影 今井善一郎)

二つに分けたオカオカタンというものが下がる。(真壁)
 供え物 正月棚の前に竹を横にして供え物をする。ミカン・コブ・ス
 ルメ・干シ柿・クリ・イワシ
 (年取イワシ)・塩ザケ・麻・
 ホオズキなど。(小室)



年神様の供え物
 (撮影 今井善一郎)



正月飾り 総注連 (八崎 田中磯五郎氏宅)
 (撮影 今井善一郎)

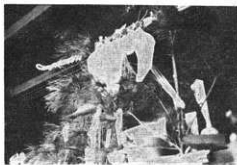
お正月の供え物は、十二かさ
 ねつくるのがふつうだろ。大
 正月のは小正月にオカザリケエ
 をして、下げたものはコオリモ
 チとか水餅にするといいのだな
 わでしばってかめに下げたとい
 こともある。(上箱田)

ふつうには三十日にやる。オ
 カザリは、ます、ふき、ふな、
 麻、ごまめ、かちぐり、ほしが
 きなどである。いわれは次
 のようなものという。
 ます ますますはんじょ
 う
 ふき 竹の芯の方につけ
 て
 ふな 二匹つるして夫婦
 仲好く
 麻 友白髪

ごまめ たづくりといい
 百姓としてもっとも大切だ
 から
 かちぐり くりまわしよ

く (上箱田)

門松 ナラの木の杭を立てて、まわりに松三本と竹を付ける。ナラは
 ウメの代りか。(小室)
 門松は二〜三本を組んだもの一對たて、ナラのくいに結びつけた。松
 は技松を用いる。



大正月の注連の中、年神の前に
 お顔かくし つける注連
 (撮影 今井善一郎)



道具へのシメ飾り (真壁)
 (撮影 部九十九一)

月の餅がつかない。勿論、神棚にも供えないが、理由は不明。そのかわ
 り、よそから買って食べられるので、二月一日には餅をついてお返しす
 る。(小室)

かざる願は、稲荷様が一番先
 にし、ついで井戸、馬小屋、物
 置の順にし、外飾りを先にし
 た。カザリコミといって外を先
 にし、内飾りを先にするもので
 ないという。
 内飾りは、七五三などもつく
 った。(上箱田)

門松はカド口、それにはカ
 ドナラといって楯を調える。兩
 端にそれを立てて上方に竹をお
 たして、それにシメ、またオカ
 オカタンをつけた。

松はツボ山、井戸、稲荷、妙
 見様、川棚、馬屋、庫、コヤシ
 バなどに立てた。またセイフ
 ロ、手桶、水がめその他の道具
 類にもシメをつけた。(箱田)

家例 小室の星野家は二十

二、三戸あるが、冬至以降は正

月

二

月一日には餅をついてお返しす



道具への供え物入れ（真壁）
（撮影 都九十九一）

若い者が年男で、朝風呂をあびてから井戸水をくんで若水とし、これを用いて料理をする。女衆は早く起きてソバをつくる。三ヶ日はソバの事例で、煮干しのダシに大根のセンギリかマツバにしてコとする。カツツシのダシをつくることも多い。
（上箱田）

正月三日の食事（事例）

一日	朝食	きりそば	朝食
二日	きりそば	ぞうに	ぞうに
三日	そば	そば	そば

（上南室）

今井イッケは三元日ぞうに。大正月に使う小豆は暮に煮ておいて使う。

松井イッケ そば、夜は飯。

狩野イッケ 右に同じ。

富岡イッケ 右に同じ。

これ等の家では、来客があれば雑煮や汁粉を出す場合もあるが、家では家例通りに食べる。なお赤飯等には、小豆は腹を切るからとて、ササギを使う。（箱田）

初絵売り 切りモチを二二三枚くれてやった。（上南室）

二 日

仕事始め 二日にタメかつぎをする。仕事始めという。これはほんの

まねだけ。

（八崎、舟戸）

仕事始めは、むかしは山へタズかき（落葉かき）に半日でかけた。このときは、十二様に幣束と切モチ、ゴマメ（中にはお供餅をあげる人もあった）などあげてから仕事にかかった。

十二様を動かして病気になった人もいたが、十二様をもとのようにしたらなかつたこともあり、山仕事でケガのないようにお供えするのである。（上南室）

初買い 二日は初買いで前橋や渡川に出かけた。村の小売店から頼まれて、馬を引いて、前橋などの問屋に初荷をつけに行った人も多い。店と問屋の両方から祝儀が出た。（分郷八崎）

もとはセッコウのいい人が渡川や前橋へ初買いに行ったが、今は近所の店で買いいものをするていど。（上箱田）

二日は初買い。（箱田）

新年会・謡い初め 青年の謡い初め。先輩の若い衆が「高砂や」を教えた。（分郷八崎）

三反田では、元日に部落十四人が集まって新年会をやる。夜は輪制になつていて、会費は出し合いで、定量は三升にきまつているが、進ぜる人が多いので一人五合から一升ぐらいになり、飲み放だいという会になる。若宮八幡をまつてやる。（上箱田）

この日が青年会の新年会で、酒は出す、謡い初めをする。御祝儀のときは青年会がうたいをするので、その練習をやるわけだが、門うたい、エンツケ、トリムスビ、千秋楽などのときにうたうたりものや、高砂などをやった。うたいはかたいのでおすわりでやった。

大正ころまでやったが、それからやらなくなって久しくなる。

（上箱田）

二日は青年会の者がうたい初めをする。その年の祝儀の準備のためで現在も続けている。

この日新入会者は酒一升を持って行く。昔は十五才で入会。婿と養子

の場合も同じ。(真壁)

三 日

大師様 三日は若い衆が竜蔵寺の大師に御参りに行った。(分郷八崎)
大師様の日で、青柳の竜蔵寺(注)へ厄落としに出かけた。(上南室、箱田)

(注) 前橋市竜蔵寺町の青柳山竜蔵寺のこと

三日は朝、ソバ、昼はごはん、しょうびきの切身を食う。夜ごはん。今はしょうびきでなく他の魚を食う。(上箱田)

四 日

オタナサガシ 三ヶ日の間、お正月さまなどに供えたものを集めてあっためて食べる。お正月さまには、おぞうにを進ぜる。(上箱田)
坊さんの年始日 四日は神主と坊主が氏子と檀家を年始廻りする。(分郷八崎)

お寺さんの御年始は五日で「桂昌寺御年頭」といって近所の子がふれど、お札とハシをもつてくばって歩くと、その後から坊さんが「おめでと」といってまわってゆく。かたんにあいさつをしてゆくのだが、お寺さんは村の世話人の家でお茶をのんでゆく。

檀家からは元旦にお寺さんにも御年始に行ってくる。(上箱田)

四日は坊主の年始があるが、正月のお供へ物は坊主に見せてはいけないと早くに下げる。坊主は著、お札などを持って来た。(真壁)

線の年始日 初縁は里帰りをする。このとき四角の大きな餅(一尺×一、二尺程度)を三枚持参した。三枚の中に栗餅を一枚入れた。帰るのは六日前とされ、二ヶ所て年をとるのはよくないという。

一般はこの日から仕事を始める。(上南室)

四日は嫁とか、婿がお客に行く日になっている。(上箱田)

四日は嫁、むこの年始で、一尺五寸×一尺ぐらいに切った餅を三枚、

まん中一枚が栗、他は米の餅を持って、嫁の生家にお客に行く。餅の上
にシオガマ(菓子)などを載せていった。仲人の家にも。(箱田)

嫁、婿は実家にヒラモチ三枚(約一分)を持って年始に行く。六日

にはよそで年取りをしないように必ず帰る。(真壁)

初ため出し 初タメ出しを四日にした。(八崎、舟戸)

四日は畑にタメを出す日。(小室)

五 日

新年会 新年会でもと在郷軍人がした。(上南室)
セリつみ 七草がゆのセリを取る。一夜ゼリはきらう。(真壁)

六 日

六日年 「ふた所年を取るものではない」といって、お客など泊らず
に帰る。別に行事はない。夕食はごはん。(小室)

六日爪で、六日は爪をはぎる日とされていた。また、客に行った嫁も

六日には帰る日とされていた。(八崎、舟戸)

若い者が御年始に外へ出ていても、六日には必ず帰って来て一緒に
年とりをする。めしでシヤケの切身で食う。今はイワシかサンマぐらいがふ

つうになった。(上箱田)

四日に行った嫁・むこ等のお客はこの日までに帰って来ねばならない。二

トコドンはとるものではないといわれる。(箱田)

山始め 一月六日は山仕事始めの日とする。山へ行き正月の材料の木を少し伐って来る。(八崎、舟戸)

六日に恵方の方の山へ行き、松の芯



ナズナをハネ、今井善一郎の撮影。六日正月、爪につけ、その水にどぎる。

を立て、紙で簡単な幣の形を作り、餅をもって行って上げて少し許り焚木などとして来る。(八崎、舟戸)

六日は山初め、小正月のボク(藪玉をさす木)を切りに行く。膳をみて、アキの方(その年の干支によって吉と定められた方角)に切りに行った。最初の蛇はやはり吉方から入れた。

その折、十五日の小豆粥をかき廻すオツカドの木も切ってくる。その木の先端を十文字に割り、小さな餅をはさんで、粥をかきまわす。その木は田植えの時まで神棚に供えておく。田植えをして田の水口にさす。

また、オツカドの木で、内人数だけのハラミ箸を作る。その箸で十五日の粥をたべる。(分郷八崎)

六日は六日年、山始めと称し、この日は山へ小正月のボクきりに出かけた。山タワ、ミズブサなどをきってくる。夕飯は白飯。(上南室)

山初めで、山へ行って、木の枝に紙をさいて下げ、おサゴとゴマメを十二様に進めてから、ボクを伐ってくる。(小室)

六日にお十二さまをまつる。山へ行ってきとうに木の一本も切つてそこにゴヘイをたて、もちを二きれもつて行って供える。(上箱田)



山始め(新山の伐採)
オンベロとエボツキ籠
(下箱田)
(撮影 今井善一郎)

六日は、小正月のボクを伐りに山に入る。山の方向についてはとくに言わないが、恵方を選ぶ人もいる。お松の下枝を伐つて、これを紙を切つてオンベロ(御幣)とし、山の適当なところで、この松をさし、その前に半紙の上にオサゴ、ゴマメ、米、栗餅をそれぞれ六つに切つたもの計十二切れ等を載せて供える。その後ボクを切つて来る。ボクはミズ

ブサ、ヤマタワ。ヤマタワには十二・十六の餅をさす。(箱田)

六日は山始め、山にオシメと餅を持って行き、三ガイマツを取り、これに神を祭り「一年中けがないように」とお祈りをして、山桑、ナラ竹、ニワドコの木(花の木)を切る。(真壁)

七日

七草がゆ、七日の朝、セリ、ナズナ、芋、大根、人参、昆布、イカなど七種類のものを入れて粥を作つてたべる。(八崎、舟戸)

七日は七種(イカ、コンブ、ナズナ、大根、人参、牛蒡など)の粥をたべる。七種は三日に年神様に供えておく。(分郷八崎)

七草、少林山の日、朝早く七通りの草を入れたオシヤをつくる。このときナズナ、セリは必ず入れる。これを切るとき、「七草ナズナ、日本の国に庚土の島の渡らぬさきにセリたたけ」などと唱えながらきつた。

高崎の少林山へは夜寝ずに出かけた人もある。(上南室)



「七草ナズナ」をたたく
(撮影 今井善一郎)

七草がゆをつくる材料は、この日に間に合うようにして家の中に入れておく。とめとくものじゃあないといわれる。五日にとって年神さまに進せておいて使う家もある。セリ、ナズナ、芋、人参、ゴボウなど七種に数なるように入れる。「七草、ナズナ、唐土の鳥が、渡らぬう

ちに、朝祝いすませ」という歌があるが、「毒をもって来てまき散らすから早くする」という意味だという。(上箱田)

七日は七草がゆ、かゆの中に入れるものは、セリ、ナズナ、ニンジン、ゴンボ、ナ、ダイコン、大豆である。大豆はマメ(じょうぶに働ける)に暮せるようにと縁起をかつく。(真壁)

松下げ 正月の松は、七草後に棚おろしで下げて、道祖神の小屋ごしらえにかかった。(小室)

松飾りとり、ドンドン焼の小屋を作り始める。小学校三年から新制中学三年位の子供が中心になって十四日まで仕上げる。(分郷八崎)

八 日

八日だめ 一月八日は溜め出しの始まり。(八崎、舟戸)

「八日ダメ」といって、タメを出す。(箱田)

八日だめは出さなかつた。米野の市に出かけた。主に糸売りに出て、古着市で買ひものしたりした。(上南室)

なわなひ 夏の朝早く赤城山に草刈りに行くためのなわを八日になつておく。馬をひいて行き、一駄の草をまるく数だけという十八本のなわが必要、この数はなつた。多い人は五駄ぐらいなつた。(上箱田)

九 日

初市 前橋の初市で糸商の家は年始めにかけた。糸をもっていった。この糸は主に買挽きで、繭を細ヶ沢で買ったものを糸にし、五布の風呂敷でつんでいき、帰りにほんじゅうを買つてきた。(上南室)

十 日

琴平祭 下南室の十二山の琴平様へいった。小さい旗をくれ、福引を

十一 日

サク立て・飯立て 作立て、飯始めとも云う。松をもって行って畑に立て、白紙で幣の形をして下げ、ゴマメ、オサゴ、餅など上げて、三サク程さく切りして来る。(八崎、舟戸)

作立ては畑仕事始め。畑へ行き、松を立て、オサゴ、カッブシなどを供え、拍餅の四角を切つて、二つずつ重ねて進めて、畑のさくを七、五、三に切つて来る。(八崎、舟戸)

田作り、田畑に立ててある御松に尾頭付きを供え、さくたてをした。(たとえ、二、三さくでもきつてくる。)(分郷八崎)

田や畑へ行つてお松を立て、紙のペロをつけ、三サクほど掘る。この日は赤飯。(小室)

飯立ては、松とオサゴ、モチ、削り花を持参し、畑で三さく作をきりその中央に松を立ててお供えした。(上南室)

十一日は畑の方の百姓始で、もちをやき、松をたててそこに進めて、畑を二さく、三さくのさく立てをする。(上箱田)

作立ては田か畑の麦の作を三作きつて、そこに門松のシンを立て、半紙でオンベロをつくり、餅やゴマメを供える。(箱田)

正月飾りの時、俵に差しておいた松を畑に持って行き、枝を折つて苗のように土にさし、三さく作り、サツキをした。(真壁)

十一日には、前にサツハナ売りが、かやの先に赤い紙を張つた。長さ二十センチぐらいのものを持って物もらいに来た。これをこの日に畑に立てた。(真壁)

お松を休める。十一日前後に松飾りを取りかたづけたものを子どもがドンドン小屋の材料とする。(真壁)

倉開き 十一日は蔵開き。お雑煮をして、主人が倉に供える。(分郷八崎)

土蔵の口をあけて、供え物を供える。(小室)

地蔵様の日、飯立ての日で、倉開きは、倉の戸を開き、お膳を二つつく



サク立て (1月6日)
(撮影 今井善一郎)

る。(箱田)

ヤキモチ地蔵 地蔵様は、ヤキモチ地蔵と呼んでいて、最初は正善寺の前にあったが、今はアイの田に移した。この地蔵様にヤキモチを出し子供にはセツタイ(タジのこと)を出した。その景品は、二十人程の信者があり、小麦を二貫目ほど出し合って品物を買ってやった。(上南室)

十一日

小正月の餅つき 十二日に小正月の餅をつき、マヌ玉をつくる。餅のつけない星野家でもマヌ玉は作っている。(小室)
十二講はしなかった。(上南室)

十三日

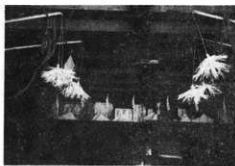
飾りかえ 正月の飾り代えは七日にする家と十四日にする家とがある。小正月の飾りには十四日にするが、お松を倒すのが区々なのである。舟戸の田中一家では十四日に杭木の心を割って倒したお松の芯を押して立てる。(八崎、舟戸)

アーボ、ヒーボは小正月(十三日―十五日)に推肥の上に竹の先を

り、便所と倉の前に供えた。倉のない家では、俵の前に膳を供えた。膳には雑煮を入れ、すぐの下げて子供に食べさせた。(上南室)

おぞうにつくって倉を開けて進ぜる。倉のない家は年神さまに進ぜる。(上箱田)

お膳を作って倉に供え



小正月飾り 向って左がオミタマサマ、右が年神様 (真壁) (撮影 都丸十九一)



小正月棚 (下箱田) エノミの枝にマヌ玉と餅をさす。「ムカデの足」という。(撮影 今井善一郎)

割ったものへ、粟穂、稗穂といってニワトコかオツカドの幹を筒切りにしたものを皮をむいたものと、つけたものとき、つけたものを祈る。外にニワトコで花をかい

てさす。(八崎、舟戸)

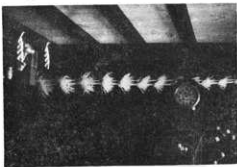
ボクたて 花かきは十四日にするが、昔は手製であったが、今は花は大体沢川の初市などで買って来る。(八崎、舟戸)

モノ作りは十一日、オツカドの木でハラミバシ・カキバナ、アーボヒーボなどを作る。(小室)

お飾りかえは十四日だが、もとは十三日であったらしいという。マヌ玉を山タワの大きな木にさして座敷へかざり小ボクは家の神々にお供えした。アワボ・ヒーボは堆肥小屋に立てた。十六段菊、ホバラミバシ、カヌカキ棒などもつくった。(上南室)

アーボ、ヒーボは堆肥のところ、竹の細いのを使得てうらの方(先端)にはニワトコでかいてハナをつけ、細く割ったのをさげてハナとし、棒の方にはオカドの皮をむい

ボ、ヒーボをハラミバシ、カユカキボウなどは作った。オツカドとニワトコをきってこれを

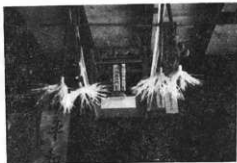


小正月 十六のカキバナ (真壁)
(撮影 都九十九)

神だなに上げるのは、細い木を使つて十二ふしつくだきれいなハナを二本つくり、水引きでゆわえてオタナにかざる。元の方の太いニワトコは、ハナにけずつてオハナの両わき一門松にさして、シンをたてた。

(上箱田)

カザリカエは十三日、ニワトコで花をかき、オツカドでアー



年神棚 (小正月棚) のハナ (真壁)
(撮影 都九十九)

たアーボ (粟穂)、皮をむかないヒーボ (稗穂) を下げて堆肥のところなたてる。(上箱田) ハラミバシは、十四日の夜使うのでつくる。

カユカキ棒はオカドでつくりケツを割つてもちをさしておき十五日に使う。(上箱田)

小正月のもちつきをしているあい間にハナつくりをする。二、三日前にニワトコの木をとつて皮をむき、かわかしておき、この日にハナケズリのなたでけずつてハナをつくとよくできる。これでカザリケエとする。

竹にさし、コヤシバに立てた。(箱田)



小正月のボタ飾り 白木の鉢に箸の立っているのはオタキあげという (みたまのめし)
(撮影 今井善一郎)

十四日がお飾り替え、ニワトコの木で花を作り、大神宮の棚の前に供える。又山桑の木の枝にお供え餅三十二重をさしつるす。山桑、ミズブサナラの各木にメーダマをさし各神様に供える。(真壁) 十六日にアーボ・ヒーボを作る。オツカドでアーボ(あわのは)二つを作り二本の竹のしんにさしたものと、ヒーボ(ひえのは)十二を作り、竹の上部を十二に割つてその先にさしたものとをたい肥の上にかざる。

(真壁)

ハラミバシ、イネの穂になぞらえてハラミバシを作る。使つた後は苗マの水口にさす。(真壁)

小正月の飾り物 マユ玉とオタキアゲ
(撮影 今井善一郎)



の株つを伐つてさし、天井から下げたりした。小さいマユ玉はたくさん作り、木の枝にぎやかにさして座敷に飾つたり、勝手・台所・井戸・畑など、お松を供えたところ供えた。(小室)

餅とマユ玉

もちつきは十三日にする。ソナエモチもつくって大正月のようにあげるが、これは二十日正月までかざっておく。ふつうのもちはこのまかに



小正月の棚飾り (下箱田)
(撮影 今井善一郎)



小正月の飾り物 マユ玉 (小室)
(撮影 都丸十九一)

切って、用意しておいた山桑の木にこれをさして家中の神さまに進げる。十二とか十六という数があり、このマイダマは十二の方で、十六の方はアンビンのようにして同じ木にさして上げる。カケジがあれば常陸の綱笠さまのカケジをかけて上げる。お初ものを上げ、大正月と同じように料理を進める。(上箱田)

十三日に餅をついてボクにさす。ボクはミズブサ、ヤマタワ等のし餅をこまきれにしてボクにさ



小正月の既神のかざり
(撮影 今井善一郎)

すが、十二といって丸い餅、十六といって蔦玉形のものも同じくボクにさす。(箱田)

道祖神の用意

十三日の夜、「ホウガンについでくれ。」といって、根面を出し、ドンドン

焼の金を集めた。初孫や御祝儀のあった家などでは、「もう十銭ふんばつしてくれ。」などといって買った。その金で、甘酒を飲んだり、コンニャクを煮てくったりした。(分郷八崎)

十三日にドンドン小屋を子どもが作る。小正月の餅つきをする。(真壁)

十四日

オシラマチ

オシラマチで、十四日は蔦玉マルメをし、お蚕の神様は上る。(八崎、舟戸)

蚕をする人が祝う日で、綱笠様の掛軸をかけたたり、小室の白山様のお祭りをする。オタキアゲをした御飯を重箱にもって、ハラミパンを十二本立てて神棚に供える。このころまでにダルマを買ってきて飾った。(小室)

夜はオタキアゲと称し、オシラ様の掛軸を出してウドンのマップシを重箱であげ、下にはマユ玉を入れておいた。(上南室)

オシラ様の大きな供え餅を氷らせて乾燥し(氷餅)、六月一月に食べると腹痛にならないという。(小室)

要が登作になるようにというので、うどん（またはそば）をうでて重箱一杯進せてその上にまいだまをのっけておく。（町田良作）

やまくわの枝にさしたまいだまを網笠さまに進せるのがオシラマチという。（上箱田）

オシラ様で、マブシと称して、ぜんの上にもうどんを置き、その上にメー玉を供える。（真壁）

オタキアゲ



オタキアゲ ご飯を鉢にもりハラミバシをさす（撮影今井善一郎）

オタキ上げは、一月十四日に年男が御飯をたき、小鉢に入れたハラム箸を家の人数だけさして年神様に上げる。翌朝小豆粥をその箸でたべる。（八崎、舟戸）

夕食の後、オタキ

アゲをする。主人が飯を炊き、オハチにもって進せる。その折、内人数だけの箸をそのオハチにさす。これは二十日正月のオタナサガシまでさげない。（分郷八崎）

十四日の晩はうどんをぶち、これを進せるが、この外にメシを煮て、年男がこれをオハチに盛り、この上にハラミバシをたて（森田半三郎、町田良作方では十二木、森田彦太郎方では二本という）をたてて進せている。オミタマサマに進ぜるといふ。（上箱田）

正月前に八合バチを買い、これで水かげんをして、オタキアゲをし全部もりつけて、十二膳のハラミバシをさして年神様に上げ米がとれるようにお祈りする。（真壁）

道祖神祭り



オタキアゲ（真壁）
（撮影 都九十九一）



道祖神小屋 八崎角谷戸（昭和26年）（撮影 都九十九一）

道祖神祭りは今はないが、昔は子供がドンドン小屋を田圃に作り、十四日の朝焼いた。（八崎、舟戸）

十四日の早朝、金棒を引きながら、「ドンドン小屋を焼きますすよ。」と触れ廻る。最後には、「これきり今晚きませんよ。」といつて小屋に火をつけた。都合三回触れ廻った。

ドンドン焼の火で、書き初めを燃し、それが舞い上がる文字が上手になるといわれている。（分郷八崎）

ドンドン焼を十年ほど前までしていた。子供が中心になって正月の松飾りを集めて上屋を作り、中でこんやくなど煮て食べた。上小屋に三か所、下小屋に一か所あった。子供が奉賀帳をもつて家々を廻ったり、通行人から寄付を集めて、オミゴトやお菓子などを買った。

ドンドン焼の火が燃えている時に、尻をたたきながら火の回りを回って「ネブツ、デキモン、デケンナ」「ネブツ、ハレモン、デケンナ」など唱えた。（小室）

ドンドン焼きは小学生だけでやり、四年生の子が先頭になった。若い衆も手伝った。十年ほど前から廃止した。(小室)

ドンドン松の松のもえくじを持ち帰って家の屋根の上に上げておくと火事にならないという。もえくじとオミゴクを付けて、各戸へ寄付のお返しをした。(小室)

ドンドン焼きは道祖神子が小屋をつくり、正月飾りをもした。これは十五才が頭で、別に名称はないが、各戸を巡って奉賀帳を持ってまわり、集ったお金でオミゴクをやったり、子供に菓子や学用品など買ってわけやった。(上南室)

正月も八日すぎになると子どもたちがお松もらいに来る。いろいろの材料を使って小屋をつくり、わらでふき、お松では足らないので杉の枝などの青物をもらって小屋をつつみ、十三日までに仕上げられる。小屋ができる頃になると、人通りのはげしい道などでなわをはり、人を通さないようにして「奉賀についとくれ」といって小づかいをもらい(沼田通りは悪かった)なわを汚物でよごして奉賀を強要することもあつたりして、小づかいの用意をする。その金で十三日の晩に茶菓を買ったり、コンヤクを買ったりして煮て食い、十四日の早朝に小屋に火をつけて厄病払いに焼く。

ドンドンヤキは子どもだけのことで大人は出ない。(上箱田)
ドンドン小屋をつくり、中でこんやくのヒツパタキをつくって食べたこともあつた。ご奉賀についてももらった家には花カケという菓子を配った。大分前からしなくなった。(箱田)

ドンドン焼、道祖神マチで夜ドンドン小屋に火つけて、火に温まりながら「ねぶつ、はれももでん」と唱えながら尻をたたく。この夜はうどんを食べるが、腕から落とす田の苗取りをするとき、めめずが東の中にはいると言うので注意して食べた。(真壁)

十五日

アズキガユ

十五日の朝アズキガユを作り、前日予め伐つておいたカヌカキ棒に餅の切れをはさんだものでかきまわす。カヌカキ棒はオツカドの二尺位のもので一方の木口を十文字に割目を入れ、そこに餅をはさんでカユをかきまわす。その時、田植のまねをする。つまりかきまわしながら「ハイシドウウ〜」とかけ声かける。代かきの鼻どりのところである。カヌカキ棒の餅はおとさないで棒と共に神棚へ上ておき、春苗代を作る時、水口に立てる。この棒は二本揃えて作る。(八崎、舟戸)

千匹がゆで一月十五日に牛馬に大麦を煮てやつた。またそれをツッコに入れて三本辻へおいた。十七日に大豆を煮て、キョウバシに入れて三本辻においたこともある。(八崎、舟戸)

十五日は主人が早朝若水を汲む。

アズキガユを食べる。その折、吹いてたべると、田植えの時に大風が吹くからいけないといわれている。(分郷八崎)

十五日ガユはアズキガユをオタキアゲにして、煮ながら田んぼになぞらえて田をならすように、カヌカキ棒でかき回す。ハラミバシで食べるが、吹いて食べると田植えに風が吹くといわれる。(小室)

小正月の朝小豆がゆをつくり、ハラミバシで食べた。成り木責めもした。(上南室)

十五日の朝、あずきがゆをつくる。昔は塩味で塩を入れたが、今はさとうを入れる。しょっぱえオケユよりもあめえオケユの方が良い。かゆの中には木にさしたもちをぬいていくらか入れる。

十四日にオカドをけずつてケツを割って餅をはさみこんで用意しておいたカヌカキ棒は、十五日がゆの中をかいて虫封じのマジンナイをしてタナに上げると、五月に苗間をつつたときに水口に一本ずつ立てる。

(上箱田)

十五日は田のお祭り、朝アズキガユを作り、ニワトコの本で作った大きなはしで「ハイハイ今年は豊作」とくり返しながら年男がマンガ（農具）のようにかきまわす。最後に念入りで端を通しながら、クローマツンということをする。すんだ後は、半紙二重ねに包んでミズヒキで結んで神棚に置き苗代の水口にさす。

このカユをふいて食べると「田植えに風が吹」といわれた。この日までに使うアズキは暮の中に煮ておく。アズキはよく煮ると皮が開き腹が切れると言うことをきらった。（真壁）

十 六 日

千匹ガユ

馬を飼っている人は、ワラヅトに豆とオサゴを入れて、三本辻に進ぜてきた。（分郷八崎）

馬にカユを作ってくれる。そのカユは辻へ出して通る馬にも食わせて。十王祭りで、豆と麦を煮たカユを食わせる。八月十六日にもやった。

（小室）

ワラヅトに麦と稗を入れて三本辻に出した。（上南宮）

わらをすくったものを真中をしばって曲げたものを三つ寄せてしばり、大麦を煮たものを馬にくれ、このわらの中にも入れて三本辻に持って行って進げる。本当は馬頭観音さんに進げるのだが、そこまで行かないで間に合せる。（上箱田）

マユ玉かき

十六日は十四日のボクかざりにさしたマユ玉をとる。マユかきといろ。（八崎、舟戸）

タワゴトの十六日

「タワゴト（戯事。皆で冗談をいう）の十六日」といい、「タワゴトの十六日でもすべえや」などといった。（分郷八崎）



八崎観音の録日（分郷八崎）
（撮影 郡九十九一）



八崎観音のダルマ売り（分郷八崎）
（撮影 郡九十九一）

十六日は「タワゴトの十六日」といい、それだけでゆっくり休み日、無礼講の日だ。（上箱田）

十七日

観音様

十七日は観音様の祭礼。馬の神様で、馬がものすこく集まった。裸馬に乗ってきて馬にお参りをさせた。お参りした馬には、さい銭を上げて

八崎）

小室の厄除け観音には隣保班長や青年会員が十六日に寄って（今は手伝わな）観音様のお札刷りをした。十八日が録日で、厄年（男二十五・四十二才、女十九・三十三才）の人が厄落として観音様のお参りに来た。大麻を受けて祈願する。利

根郡からもさかんに来て二、三百人も出たが、今も百人以上は来る。この観音堂は別所堂ともいい、長野県小話の別所の観音堂と関係がある。縁日の祝いは義太夫をしたり、草駝馬をしたりした。(小宮)

十七日は八崎の観音様の日。(上南室)

観音さんを十七、八日に祭る。

十日をすぎると早いのかおそいのまでいくつかの観音さんがあって、近在の人がお参りに出かけ、馬にかざりをつけてお参りに行った。

下小室のコヤスの観音、別所、八崎などは、ちょうど手ごろの運動の場所ぐらいで、若えもんがそろってかざりたてた馬に乗り、かけ出して行った。(上箱田)

上小室の別所の観音が厄おとしの観音で、お参りして頼んで来る。オサン銭を投げて来ると、その世話人がセツタイで、くじで頭にかけるザンザとか、タコなどをくれた。

子安の観音(下小室)もやっだが女衆もきれいになって行った。

ちようど正月の若え人の年始日ともいえる日で、観音さん参りをおこなった御年始だったともいえる。(上箱田)

十八日

十八日がゆ

十八日げえといつて、十五日のおかゆを少しとっておいて、これをゆるくして家のまわりにまいた。へびやムカゼの家の中に入らないようにという。(上南室)

十五日ガユが残っているとこれをあつためて食べる。(上箱田)

十八日は、十五日のアズキがゆを残しておいたものを朝暖めて食べ、残りほうすめて家のまわりにまいて、火事にならないようにとお祈りする。(真壁)

成り木寅め

一月十八日に十五日のアズキがゆをうすめて家の周囲にまき「蛇とム

カゼはどけく」といふながらまいてまわり、その後、柿、栗などの木にその汁をかけて。なたと鎌で木をたふいて「なるかならぬか、ならぬとぶつた切るだ」という。(八崎、舟戸)

かゆをあつためて食べた残りをもつて、家のまわりの果樹で、余りならない木のまわりにまいた。

なたなどで木の皮をはいで、むかでなどがつかねえようにして「オゴツツオするからなつとくれよう」ということでおかゆをまくもので、木に傷をつけておどすことはしない。(上箱田)

二十一日

二十日正月

縄のない初め。桑の縄三本だった。昔は十八本なつてお正月様にあげた。この場合上げるのはお勝手にある水大黒とか、下大黒とかいう大い柱で、そこへ結えておくのである。(八崎、舟戸)

二十日は二十日正月。オタナサガシ(オタナヤスメ)。若水を汲む。朝は雑煮。夜は御飯。

この日はワラゼエタ(藁細工)を始める。草刈り縄とか、ヨツラ(稲や麦の刈り入れの時結わえるもの)をこしらえて、下大黒(柱)に結わえた。(分郷八崎)

わら仕事初めで、縄ないをしり道具作りなどして、仕事を休んだ。以前は初会合をして区長の選挙をした。(今は三月が交替期なので三月にする。)(小室)

二十日は縄をなつた。草刈り縄三十六本、三駄分をない、これを小黒柱に祝いつけて、金銀をお供えした。(上南室)

わら細工の手はじめて、暮の二十七日から禁じられて来たワラゼエタ(わら細工)も、この日からやれることになる。(上箱田)

エビス講

座敷にエビス様を祭る。箕の中へ一升ますに米を山盛りにして、エビ

ス・大黒様を乗せて出す。頭付きのイワシかサンマ、トウフ・イモの煮つけなどを膳にのせて供える。(小室)

エビス講は、朝祭った。昼はボタモチで、これは他人にされるとられるとって自分の家だけで食べた。その中には、米にキビを混ぜたもので、キビを金とし、金銀で祝うといった。(上南室)

エビス講まつりは、めでしで、オタナヘユズ、コブを進ぜる。前橋で初



エビス講(下箱田)
(撮影 今井善一郎)

市のときにフナを買って来て進せてからとっておいて、これをエビスサマに進げた。こぶまきにして使うのが多い。タイの形をしているのでタイの代りに進げたのだろう。(上箱田)

一月二十日と十一月二十日はオイベス講で一升ますに米をいっぱい入れて、その上にエビス、大黒を載せる。正月の方の供えものは軽く。秋の方はいっぱい入れて供える。

エビス様は縁切り神といって、供えものは子どもには食べさせない。

(箱田)

二十日はオイベス講。商いをする家では朝、農家では夜、エビス、大黒を飾りいろいろの供え。二十一日の朝しよう。

供えたものは縁遠くなると言い、子どもに出来ない。おとなが食べた

あとならよいとされている。(真壁)

二十三日

石田の地蔵さま

石田にお堂がある地蔵さんは正月と六月の二十三日がお祭りで、昔は天台宗の末寺のようなものだったので坊さんが来て拜んでゴマをたいたが、今は坊さんは来ない。

地蔵さんは財産があるのでお祭りの日には、お札を出し、甘酒をふるまってくれた。(上箱田)

二十八日

しまい正月

一月二十八日を「しまい正月」という。赤い御飯など炊いた。宮田の不動様へよく行った。(八崎、舟戸)

二十八日は「シメエ正月」。御雑煮を神棚に供える。(分郷八崎)

二十八日を「しまい正月」といい、正月行事は全部すんだとする。(真壁)

二十八日は「シメエ正月」といって、もちをついて食う人もいる。これまで親せきの年始のすまないところには、この日に行った。

この日は不動さまのお祭りなので、不動さまとかねてやる事が多かった。

神社の合併前は、諏訪さまがあったので、この日に諏訪さまのお祭りもした。これは今はやらない。(上箱田)

不動さま

個人の家で不動様のあるものは二十八日にお飯屋を作って祭る。三夜沢の不動様に参詣してお札やだるまを買ってくる。火伏せの神。(小室)

二十八日はしまい正月、不動様の日。近所中で不動様をおまいりし、赤飯をあげる。(上南室)

三本荒神

正月中にたくさんの札を受けてきて、各戸へ配る。(小室)

二 月

次郎の一日(一日)

二郎の一日は、二月一日のことをいう。赤飯をたく。汁粉などする家もある。(八崎、舟戸)

一日はシユロウの一日。たとえ一つかみでも粟を入れて赤飯(粟強飯)を炊き、神棚に供える。(分郷八崎)

「二郎の一日、コガネの祝い」といって、キビ餅をついたり、赤飯をふかしたりした。星野イツケは正月中餅がつけなかつたので、この日に餅をつく。(小室)

次郎の一日は赤飯をたいた。この日は「奉公人の出替りの日」といともはやすんだ。(上南室)

正月づかれの若えものにひまがでて、奉公人にもひまが出る日だった。この日にお客にやってもらえるので「出がわり正月」ともいう。

この日は特別のこともなく、麦めしを「いくらか食いよくしたていど」のことだった。(上箱田)

「次郎のツイタチ」は名称だけで、何もしない。(真壁)

節 分(三日)

豆まき 節分には豆まきをする。座敷、表、庭、土蔵、裏の神様の前等でまく。年男が先頭で子供等がついて大声で叫ぶ「福は内、鬼は外、福は内」。(八崎、舟戸)

節分には各家で、「福は内、鬼は外」をやる。「福は内」は家の中に、「鬼は外」は家の外に豆を投げる。(分郷八崎)

夕食前、豆をまく。この時「福は内、鬼は外、福は内、カカアが欲しい」などと唱える人もいる。夕食は米の飯にケンチョン汁、年取り魚として頭付のイワシを食べる。(小室)

豆をいる時はサカキの葉をいれている家もある。昔、豆まきの豆が生えたら、えらい飢饉があったので、豆はよくいる方がよいという。この豆は取っておいて、初雷がなる時に食べるとこわくないし、ケガをしないというので、ホドのカギ竹に袋に入れて下げておく。
豆茶は夕食後飲む。豆は年の数だけ拾って食べると長生きする。(小室)

豆まきは、神棚からまく。戸を空けてまき、すぐ戸をしめる。外の建物にもまいて、近くの神社へ行って豆まきをしてくる家もある。(小室)
豆いりは、豆の木を燃してほうろくでいるが、豆まきはアキノ方からザシキの四隅にまき、それから家の中や外、おいなりさんにまいて鬼を追い出し、福を入れる。
これがすむと大福茶といつて豆のお茶をのむ。

熱心な人は遠くまで旅費をかけて行くこともあるが、数は少ない。
年の数だけ豆を食うというが、これも子どものもので、大人はそれほど食わない。

厄おとしもした。(上箱田)

豆は、生のものがあると、鬼の世になるといって、ていねいにいる。豆は神棚に上げてから、神棚、へやいなり、倉、便所その他にまく。(箱田)

節分の豆は雷の初鳴りの時に食べると、鬼が逃げるという。(真壁)
ヤカガシ・虫封じ 節分の晩に觸の頭を木の枝にさしてあぶりながらやく、そして虫の口やきというのをする「四十七いろいろの虫の口をやく」などと唱える。(八崎、舟戸)

大豆の枝にイワシの頭と尾をさして、ツバキをかけながら焼く。焼きながら、作物に虫がつかないように祈る。「ナス・ユウガオニタカル虫ノロフヤキ申ス」などと唱える。(小室)

年とりのときの虫封じは、イワシのあたまを、ふたまたの豆の木にさして、「四十二色の耕作の虫の口を焼く」といいながら、イワシのあた



豆まきの前に鯛の頭を豆木にさし、いろりの火にあぶって、つばきをかけながら呪文を唱える。(撮影 今井善一郎)

まにつばをはきつけないが、黒くなるまで焼く。(これをヤキガンラという)それをとぶ口のところにさしておく。(下小室)

もとは豆まきに水沢観音や淡川の真光寺へ出かけた。

この晩は、ヤカガシといつて、ヒイラギの枝にイワシの頭と尾をさして、それをつばをかけながらあぶり「四十二色の虫の口をやくなり」と唱えながらし

た。おわると戸口にさして魔除けにした。(上南室)

ヒイラギ、桃、豆などの枝の二またを使い、イワシの頭だけ二つ切つてさしこみ、いろりやへついで、つばきをかけながら作物につく虫、百姓のじやまをする虫の名を上げながら「油虫の口をじりじり」とか、「稲の穂の虫の口を焼きます」とか、「〇〇の虫、四十二いろの虫の口を焼く」といって、つばきをかけかけ焼き上げる。これはトボロや、猫の食わない屋根裏にさしておく。(上箱田)

夕食後、豆を豆がらをもしている。またイワシの頭をヒイラギの木や豆木にさして焼く。その時「四十八色の虫の口を焼き申す」と唱えながら、つばきをかけ、はきかけながら焼く。この焼けたものをヤカガシといい、トボー口のところにさしておくとい厄病神が入らないとい



日 八 九 十 都 影 撮
コ ト 八 九 十 都 影 撮

シヤカサマの何とかいういわれがあるというがよく知らない。
メケエを竹ざおの上にかぶして家の庭にたてた。
メケエのメが大変あるので、鬼が来られねえという。
オコト八日は、春はこれから日が長くなるというので夜はめん類に限って、十二月は赤飯。この日朝メカイを竿の先にしばって立てた。春は上向きに

ヤツカガシは、二またのクワの木の先に、正月様に供えたイワシの頭をさし、焼きながら「大根の虫を焼きます」「菜の虫を焼きます」と一つ一つ唱え最後に「四十二色の虫の口を焼きます」と唱える。(真壁)

コト初め・オコト八日(八日)

オコト八日。早起きして、メケエ(籠)を竹竿のうらにつけて庭先にたてる。ダイマ様が悪いことをしようとしても、目(籠の穴)が一杯あり、八方を覗んでいるのでできないといわれる。子供の前、朝早く立てると親にこかされた(しかされた)ものである。(分郷八崎)

メカゴをさかさにして竹ざおの先に付けて立てた。悪魔が来る日なので悪魔除けにする。赤飯をたく。(今でもすることがある。(小室)娘たちは針供養をする。(小室)

二月八日はオコトハジメの日、メカイを下向きにした。小豆飯。

(上南室)

下南室の「オコト八日」には、春は上向き、秋は下向きに、メカイを吊らした。(下南室)

してヒイラギの葉を入れ、十二月は下向きにつるした。(下南室)

オコト八日は、二月八日と十二月八日。二月が事始め、十二月が事ジマイ。メカイを竿の先にさして立てる。魔物が出ないように。目がたくさんあるので魔物が降りて来られないのだ。小豆飯またはニゴロメシ。(箱田)

竹のさおにメケイ(ざる)をかぶせて庭に立てる。目が多いため鬼が近づけない。

ねぎの根を焼く。くさくて鬼が近づかないという。(真壁)

初午(午の日、十一日)

初午は節分後、最初の午の日、まゆ玉を作る。(八崎、舟戸)

二月初めの午の日にマユ玉を作る。綱笠様の掛軸を座敷に出して、重箱か小鉢にマユ玉をもって供える。マユ玉は米の粉を上白にひいてこね、マユの形にクビリコをつけたものを十六個、丸い形のを十二個作った。一個が粉約一合位の大きさであるから、メシツツギ(飯びつ)などに入れて供えたりした。(小室)

米の粉で馬の形をつくり、俵をしゃわせたりして神棚(オシラ様)にあげた。蛋がとれるようにという。

オシラ様は、タワの葉をもっている女の神様という。(上南室)

日が悪ければ二のウマにする。悪い日というのは「ヒ」のつく日のこととよくない。

マイ玉をこしらえて進せる。ケニコ(蛋)神で、ケテコがとれるようにというのだろう。(上箱田)

初午は二月十一日、メダマをつくる。オトウカ(狐)の形をしたメダマもつくる。

今井イッテでは稲荷様の祭りをする。(箱田)

初午、馬屋のこい(堆肥)を出して、豆いりを与へ、「まめにじょうぶに働くように」と祈る。

馬は家族同様に扱い、餅をつくるとすぐ与えた。

カンゲイリ(寒中の飼料)にはひえをくれた。(真壁)

稲荷様は字狐石にあり、初午の日に村中の祭りで「ノミホーデー、クイホーデー」といい酒さかなが出され自由に飲んだり、食べたりできた。費用は村で出した。その金は、共有金貸附制度があり年一割五分の利子で終った。この制度は昭和十二年まででありこの年共同農具を二〇〇円で買い終りになった。

この祭りには売り屋も出てサンボンで作った。コンコンサマ、ニワトリの型をした菓子やニマメ、ニシメを売った。

次の日に勘定があり、ドウギョウウバイがあった。これにも一軒一人はかならず出た。(真壁)

針供養 初午の日は、おさいはうの神さままで針供養という。

この日にマイ玉をもってさいはうの先生のところへお客にいく。特別に白いものをもってゆく。(上箱田)

十二マチ(十一日)

十一日は十二マチ(十二様一山の神一の祭)。青年(十七才)三十三才(達が会長の家を借りて、十一日から二泊三日間、飲んだり食ったりした。米一升ずつ持ち寄りだった。神主のところへ、一番竹の先に、ボンデンをつけてもらい、三日日にはそれを神社の森におさめた。(分郷八崎)

三月

節 供(三日)

餅 一日は節句の餅つき。ヒン餅は栗の餅をついたので、紅(栗餅の色)白となった。(分郷八崎)

二日に餅をつく。初節供の家は一日について、贈り物を買った家へお返しする。お供え餅を乗せて、桃の花をさして飾る。(小室)

この日にすしをつくるようになったのはおぼえてのこと。子供の時分には、すしをつくることはなく、餅をついていた。(明治二十七年生ま



ヒナ人形
(撮影 今井善一郎)

れ。(上小室)

お節句のもちつきは一日か二日にやりイロモチをつく。おそなえの大きいものをつくり、その上にひしもちを重ねる。餅の上にさんまのひらきをあげる。

(上箱田)

新暦になってから

四月三日、四日であつ

たが、七、八年前から

三月になった。

嫁は菱餅をもって生

家に帰った。菱形の板

ができていて、餅はそ

れをあてて切った。長

さは四〇センチ巾が二

五センチ位であった。

(箱田)



高いヒナ様やお札を納める小屋
(小室)三柱神社の境内にある
(撮影 関口正己)

ヒナ飾り 二月二十八日頃からおヒナ様を出して飾り、八日のしまい節供に一日飾ってから次ぐ日に片づける。古いヒナ様は鎮守様の納める所へ出したり、川へ流したりする。(小室)

ひなまつりは、もとは四月にやったが、お客に行く都合や、いろいろのやりとりの都合で困ったので、五年くらい前から三月に変わった。

(小室・上箱田)

初節供

初子が生まれた家へは、初節供の祝いにヒナ様を親戚から贈る。長男・長女の二人位までは贈る。そのお返しに餅を届ける。今は買った餅を返す様になった。(小室)

初子、初孫が生まれると、二親等ぐらいがオジゴカブで、お節句前に初節句のおひなさまを買って届ける。もらった方では何かお返しをするが、昔はもてすませた。

花嫁ゴには、座りびなをくれた。嫁に行つた先によく座って出て来ねえようにというお願いがこめられている。(上箱田)

ハツコン(初婚)の節句のお客に行く人たちは、四角に切つたもちの上にひしもちをのけてもっていった。(上箱田)

三日はヒナマツリ、嫁はシシもちを三枚持って里へ行く。(真壁)

ひな祭りは四月三日、すしを作り、餅をつく。草餅もつくる。嫁は里へ客にゆく。(八崎、舟戸)

彼岸

三月の彼岸の中日に公会堂で、お念仏をする。太陽の出るから入るまで、終日する。いわゆる天道念仏である。(八崎、舟戸)

十九日ごろ彼岸の入り。中日には、朝ボタモチやウドンを供える。また嫁に行つた娘などが帰ってくる。(分郷八崎)

入り口 あずき飯・うどん

中日 おはぎ、菓参りをしてダンゴ・花・水・線香・おさこを供える。

走り口 ボタ餅。祝って送る。

春の彼岸は「春なが」といって日が長くなるので、よそへ出かけた。天気がよくすれ易く、雨が降れば「くされ彼岸」「彼岸降り」、日でありなら、「照り彼岸」という。

「彼岸から彼岸まで」夜なべを十時まですることになっていた。馬のくつを、わらで作って、台所の柱に下げた。

「暑さ寒さも彼岸まで」とか「春の彼岸までにこたつをしまえ」とかいう。蚊屋は彼岸までは吊っていない。(小室)

彼岸になる前に墓そうじをしておき、入り口に墓参りにゆくが、一週間のお彼岸に行けばよいという。

中日にボタ餅をつくる。

彼岸中には、入り口、中日、ハシリ口、に、ちよつとしたカワリモンをする。

お客には中日にかけて行ったり、来たりする。親のお墓参りに行けばよいので、お客に行くのもそのていどの範囲になる。(上箱田)

彼岸の中日にはボタ餅を作る。墓そうじや墓参りをする。(箱田)

社 日

商人などでは「社日ザル」といってザルを買いに来るといのがあったが、百姓には特別のことはない。社日だと承知していても行事はない。(上箱田)

彼岸前後になる。この日社日参りをする。漆原の観音様にも行く。また「七社まいり」と称して、近くの七社にお詣りして、鳥居に石を上げてくる。こうすると蚤が当るといふ。(箱田)

社日の日に、社日まいりをした。神社を十二ぐらいまわった。これはどの神社でもよかつた。この日、社日ざるを売りに来たのもあった。(下小室)

地神さまの留守に土いじりをすればいいという。(下小室)

天神待ち(二十五日)

二月二十五日が本当の日だが、子どもの都合でやるからいろいろだ。子どもが友だちも同志で集まり、相談の上でコンニャクを食ったり、マゼメシを食ったいのだ。やるときには「奉納天満宮、〇〇氏」というように書いてからやる。(上箱田)

二十四日は天神マチ。子どもが一軒を宿とし、米を持ち寄り、ごち走して食べる。次の朝「奉納天神宮」とめいめい書いて供える。(真壁)

天神待 下曲輪の友だちが集って、善兵衛さんの二階を借りて習字をした。

「奉納天満宮」

「奉納大自在偉徳天満宮」

などと書いて天神様に奉納した。(下箱田)

四 月

四月八日(八日)

お寺に行き、お釈迦さまに甘茶をかけ、甘茶を買ってくる。(八崎、舟戸、分郷八崎)

お寺で甘茶をするので、子どもたちがお寺に行つて甘茶をもらったぐらいで、特に何もしない。(上箱田)

四月八日は藤の節供。(真壁)

春 祭

八幡宮(十日) 十日は花見かたがた神社(八幡様であるが、現在では諏訪神社、神前神社(山霊社)、稲荷社が合祀されている。)に集まり、各戸一人は必ず一杯飲んでお祭りをした。(分郷八崎)

三柱神社(十二日) 三柱神社の春祭りは氏子総代四人、区長、区長代理、隣保班長十九人に常使い三人が社務所に寄つて式をする。花見を兼ねてやり、以前は芝居を余興にした。一週間も続けてしたことがあった。(小室)

神明さま(十五日) もとは十六日だったというが、こわめしをふかして神明さまに進げた。お初をとっておいて、おばあさんなどが孫をつれてお参りにゆき、進せて来た。昔は親せきを呼んだりしたが今はしない。舞台で芝居をしたこともある。舞台と神明さまで灯ろうをかざったこともある。(上箱田)

四月十五日 愛宕様の祭り。(真壁)

せき普請 せき普請はたいがい四月半ば頃の一定した日に灌漑用水の

水路の修理をする。分郷八崎では貯水池が二ヶ所あり、八幡様の池も見
る。(八崎、舟戸)

五 月

山開き

子持神社参り(一日) 一日は子持山の山開きで、若い嫁が子宝を授
かるようによくお参りする。お客に行つて、一日がかりで登つてきた。
渋川回りで約四里程の道のりがある。(小室)

加葉山参り(初め) 五月初めに、蚤の折願で加葉山へお参りに行
く。天狗の面を借りてきて、翌年二個にして返して、また借りてくる。
もとはわらじばきで歩いたが、七、八割の人が出かけた。(小室)

棒名山開き(五日) 若い衆が棒名山に登つた。上でおしんこをみや
げに買った。ここからは四、五時間で登れる。(小室)

八十八夜

「別れ霜」という。農家ではモミ種を出して田作りの用意をする。村
ではセキ普請をする。セキをさらつて水の流れをよくする。食物は決ま
つていない。また、中後の稲荷様のお祭りや、稲荷講にはいつている人
が主になって蚤祈禱をする。参詣者にお札を配り、一日中さかつてい
る。(こは初午には祭らない)。(小室)

「八十八夜のおかれ霜」といい、シモワカレモチをつく。(上箱田)

八十八夜には「シモヨケモチ」を作る。(真壁)

節 供(四、五日)

ヨイ節句(四日)は宵節句。屋根葺きといつて、ヨモギとシヨウブ
を組みにしたもの三つを、物置き、便所の屋根までも供える。ヨモギと
シヨウブがかわくと陽気がよく作物がとれるという。(分郷八崎)

宵節供は四日の晩で、シヨウブとモチ草を軒に下げ、シヨウブ湯をた
てる。ヨモギ・シヨウブをまとめて風呂に入れてはいると皮膚病にきく
という。シヨウブ湯は、男が戦争に行つてるので、女衆が先にはいるも

のだという。シヨウブ酒は別に飲まなくてもよい。(小室)

川原からシヨウブをとつて来てオユ(風呂)をたて、ヌギバ(軒先)
にシヨウブモチ草の茎をさした。魔除けだという。(上箱田)

シヨウブの昔話 宵節供にシヨウブとモチ草(ヨモギ)をとつて来て
これを軒ば、稲荷、神棚等に三か所ずつさして供えた。

むかし、娘が倉の中に住んでいた。夜な夜ない男が入つて来る。戸
がよく締つているのに、「どうして入つて来るのだらうと怪んで、針を
男の髪にさしておいた。翌朝針についた糸をたどつて行つてみると、糸
は蛇の巣で終つていた。中に蛇が死んでたが、それは針の毒だつたら
う。娘の胎内に宿つた子をくらすために、シヨウブの風呂に入るのだと
いう。(箱田)

五日の節供 お節句の料理は、こわめしで、家のおかずとしてニシメ
をずいぶんたくさんつくつた。さといも、にんじん、ごぼう、シモコン
(こんにやくのこおらせたもの)の四角のを煮て上にかぶしたり、イカ
の足などを煮てつくつた。きんぴらはこういう祭りにつきもんだつた。
(上箱田)

初 節 供

四日の宵にシヨウブとヨモギを軒にさす。五日は赤飯。新嫁が客に行
く時は赤飯に鯛の干物をつけてゆく。初の男子の時は柏餅に鯛の干物を
くばる。(八崎、舟戸)

五日は端午の節句。初節供に鯉轡をもらうと、柏餅でかえた。(分郷八崎)

初節供には鯉のぼりや人形を贈る。(小室)

二、三年目ぐらまでの花嫁では、こわしめの重箱の上に、タラの太
きくないのをせて重ねてもつて親のところへお客に行つた。(上箱田)
男の子の初節供は、もとはのぼりで、こいのぼりは少なかった。家に
よつては二十本ももつてたてるのに大変なさわぎだつた。竹をそろ
え、のぼりをそろえるとききれいなものだつた。(上箱田)

五日は端午の節句、赤飯の上にたらの干物を上げて里へ行く。(真壁)
卯月八日・赤城登山(八日)



五日の節供(下南室)
(撮影 都丸十九一)



五月ノボリ(下箱田)
(撮影 今井善一郎)

卯月八日は、今は五月八日。昔は藤の枝を軒にさした。病氣の人にこれをとっておいてのませるといふという。

(八崎、舟戸)

八日に村人は赤城大洞に登った。十六才の娘は登ってはいけぬ。昔、赤堀様の大ゲン(大尺のことという)の娘(十六才)がお参りに行った。

ところが、沼に引きこまれてしまった。そしてしばらくすると、蛇になって浮いてきた。それから十六才の娘は登ってはいけぬという。

(分郷八崎)

八日はシマイ節供でフジの節供ともいい、ショウブのかわりにフジの花を供える。

(小室)

また、八日は赤城山の山開きで、大洞へよ

く登った。約十二、三キロの道のりで、上で干し柿やぶっかきあめをみやげに買ってきた。昔赤城山と榛名山と争って、赤城山はバラを投げ、榛名山は石を投げたので、赤城山にはバラがないという。(小室)
むかしは卯月八日だったと思われるが、今は五月八日に、十九の娘は赤城山へのぼるなというが、そのほかの年齢の人は大勢のぼった。十九の娘がのぼると沼にひきこまれるからだという。(下南室)

村の青年がよく赤城に登った。大洞で干柿や串柿、ブツカキ餠などを買って土産にした。

シマイ節供といい、藤の葉をとって来て、軒ば、稲荷、神棚に供え、またさした。(箱田)

八日はシマイ節供、赤城神社にお参りする。これから忙しくなるのでこの日の赤飯のことを「コワメシに骨がある」とよく言った。(真壁)

六月 月

六月は特別にない(分郷八崎、上箱田)

農耕行事

田麦かゆ 麦の刈上祝、麦の刈上は夏であるが、田麦かゆというのを作った。(八崎、舟戸)

お麦餅 春麦が二眠のときにオコモチ(麦もち)をつくる。山ごぼりの葉をとって来てうでで、もちの中に入れてつきこみ、あんびんにして食べる。(上箱田)

稲作儀式

種蒔 稲種をまく日は一定しないが辰の日を忌む。(葬式の辰頭の朝になるという)。(八崎、舟戸)

苗代祝 五月の半頃する。小豆がゆを作る。苗代ガユという。水口には正月十五日の小豆粥をかいた粥かき棒を立てる。(八崎、舟戸)

苗取り これは田植の前日にする。一枚の田に二三束ずつ余分の苗をとっておく。伏せ苗という。自分の稗などをぬいた跡へさしたり、他の

人へやったりする。(八崎、舟戸)

田植 辰の日と半夏の日をきらう。田植の朝めしは小正月のはらみ箸を用いる。(八崎、舟戸)

ハゲン(半夏生)、ハゲン田植え(ハゲンの日に田植えをすること)をする。と、三年間続けてハゲンの日に田植えをしなければいけないといわれ、「しめえの年(三年目)には、もつきをしなければいけねえ」といった。一番いそがしいので、まわりあわせて困るから、カタイ人はこの日の田植えをさけたからこういわれた。

しかしその通りにやった人も村の中にはいた。(上箱田)

オサナブリ 田植の終わった祝、箕の中に苗を七、五、三にならべて酒を進げる。マンガにも酒を進せる。マンガ洗いともいう。オサナブリの箕にならべた苗をお産の時産婦に煎じてのませると産が軽いという。

(八崎、舟戸)

田植えが終るとマンガを洗い、台所に入れて酒をふいてやって、大ごとをしたからお祝いをしてやる。

この日には田植えに手伝ってくれた人たちを招んで酒を出す。このときにはいちばんしまいに植えたところを十二テ(十二株)だったと思うが、こいで来て(ひきぬいて)別の苗に植えかえ、こいだのももって来てカマガミサマに供えた。うたをうたって進げる家もあるというが、うたは知らない。(上箱田)

害虫駆除 苗間の時は、苗間で手とったが、田植の後は誘蛾燈を村中一緒につけて(昔は半鐘ならして同時に)点火してとった。

(八崎、舟戸)

七月 月

農休み(十五、十六日)

田植を終わす目標にして、両日は村中が仕事を休む。農休み買い物に渋川や前橋へ出かけ、手伝ってくれた人や女衆に晴着などを買ってや

る。新しい嫁は一晩泊りで実家へお客に行ける。フカシマンジユウを作る。(分郷八崎、小室)

もとは十四、五日の二日間だったが、天王さんのお祭りとも関係するので、現在は十五、六日になっている。農休みに田植えが間に合わないときには、お互いに水をひき合せて夜中でも寝ずに田植えをして間に合せたこともある。そんなときは世話人がついていて、田に水を入れて水がいっぱいになると水を切って(水口をせきとめて)次の田に水を入れて植えた。

この日は全部しごとを休み、遊んだ。もしはたらいていると「モノグサモンノ節句バタラキ」といって笑われた。しかし朝草刈りだけはした。(上箱田)

十五・十六日は農休み、農休みのふかしまんじゅうを作る。遊びは力試し(棒おし、石かつぎ)、すもう(各神社に土俵があった)。

(真壁)

生き盆

盆前の農休みに親のもとへ酒を持って行く。「親ご参りする」といい昔はうどん粉の新粉を持って行った。とくに世帯を持って最初の盆の時には、親もとへ行つて、近所の人を呼んでふるまいをする。これを「生き盆」という。(小室)

農休み近くのころ(七月中ならばよいというが)その年に嫁にいった人が夫婦して嫁の実家に来て「生き盆ぶるめえ」というのをやる。これは行った年のうちにやるものである。

新夫婦は、酒、うどん粉、ソバ粉、汁のダシ等、一切をサゲに入れて持つて来て、サト方の道具を借りて料理をして近所のつきあいの範囲の人を招んでごちそうする。カタイ家では今もやっている。親が生きているうちにやるという。地主は親に損をかけない。(上箱田)

農休み(七月十五、六日)に新婚夫婦がそろって嫁の生家に帰る。うどん一箱、酒一升ぐらい持つて行く。親元から出さないわけだという

が、その他の品物や不足分ぐらいは結局出すことになる。隣保班、叔父母、兄弟、仲人などを招いて御馳走する。たいていは始めの一年ぐらいでやめてしまいが、最近はそのれも簡単になってしまった。(箱田)

天王祭り

祇園に七月二十一日、もとは天王様を青年がかついだ。天王様は赤城神社にある。(八崎、舟戸)

二十一日が祇園祭で御輿が出た。昔は屋台を組んで引いたといわれている。(分野八崎)

小室の天王様の石宮ができる前までは、わざわざ世良田の天王様まで二十五日にお参りに行った。麦断ちをして、米だけ食べ、ススキを供えた。天王様にススキはつきもんである。(小室)

天王様は八月一日で、八坂神社の石宮が以前は赤城神社と一緒にあったが、今は庵室(子安観音堂)にある。もとは八月二日に祭った。

明治三十年ごろ、八崎の御輿をまねて子供の御輿を作った。小学生が村中を担ぎ回り、子供が一軒ごとに回ってさい銭や果物などをもらい、

お菓子を買って食べた。

家では縁側に机を出し、盆にキョウリなど取れた物を盛って供え、ススキをとっくりにさして飾った。(小室)

八月七日は天王様まわしの日神社の前に色紙をきつてそなえた。天王様のみこしをかついだ。(上南室)

七月二十五日が同行払いであるが、二十四日に花まんどうをつくり、部落の三本辻にたてた。これは「旗組毎」と称し四



祇園 (八崎)
(撮影 都九十九一)

組あった。

二十四日の晩は、ネジッコを食べて、御輿が村中区別に回りあるいた。荒れ御輿で、八崎であまり荒れたので警察さわじまになり、戦後北橋村中み興さ出すのをやめた。しかし、子供は今でも村中まわり。中学三年生が親方で、家々をまわり、賽銭をもらったりした。(下南室)

農休みの十五日は天王さんのお祭り、シシマワシがあった。組ごとに万灯をつくり、シシを出して村中を毎戸まわって舞った。モノオッコワシをするほどよいといわれ、土足で家の中をふりまわった。

シシのカシラは「トウサン」という名の人が桐でつくったとい。その人もシシのようなツラ(顔)をしていたという。ホラの貝を吹いて歩いた。(上箱田)

天王まわしは今はいないが、七月十五日だった。天王様は神社を出て大石田、石尊からカサの池に行き、そこで大いにもんで暴れて正源名に行き休む。山口商店で砂糖湯を出してくれる。その後前原・伊出浦・西曲輪・下箱田・一の島居と行く。途中神主の家で拝んでもらう。かくて神社に帰ってくる。とくに気に食わない家があると、よく暴れたし、稲なんかもふみつぶされることがあったが、そんなに問題にはならなかった。めい／＼の家で砂糖湯ぐらいは出してくれた。とくにキョウリをというような俗信はなかった。(箱田)

ひでりの年は雨ごいのために天王まわしをした。戦後は三十五年ごろがしまいだたろう。ふつうの天王まわしの順であったが、暴れようはひどかった。(箱田)

十四日は天王祭り。昔、豪傑がありみこしが村中を回らない中に、こわれてしまい、みこしを方便に、酒を飲まさない蔵の中、家の中へ入れるので「人気がおかしになる」ということで赤城神社に納めて今はしない。

(真壁)

天気祭り(十六日) 小室の厄除観音堂に棚を作って、ムラから一戸一名ずつ出て天道念仏をした。直径二尺程の鐘が二個あって午前中は堂

でたたいて念仏を唱え、午後はムラ内を回った。おもに青年たちが中心となった。
(小室)

観音様

十日が観音様の縁日で、十七日が観音様の大祭り。露店が出て、また盆踊りがあった、大賑わいであった。(分郷八崎)

十八日の観音様の日に盆踊りをする。天道念仏は盆の行事だった。
(小室)

カヤの正月(二十七日)

諏訪さまのお祭り、おこわをふかし、カヤのはしで食べる。だからカヤの正月という。(上箱田)

十二マチ

毎日のしごととして朝草刈りをしたが、十二駄刈ると十二マチをした。十二駄刈ったときに十二マチをするからといって親から費用を出してもらってやる。サトウゲエ(あずきがゆにさとうで味つけをするもの)、サトメネジ(さとうを入れたあんこの中へうどん粉をこねてねじって入れてつくったもの)を食べる。(上箱田)

五合餅

二日に青年が会長のところへ米五合ずつ持ち寄り、餅をついた。(一合ぞうせい(雑炊)、二合げえ(粥)、三合飯に、四合強飯、五合餅)と昔からいわれている。(分郷八崎)

八丁ジメ

大祓は七月二十五日。神社で氏子總代がやる。八崎村内八ヶ所位に(村の出入口)八丁じめを立てる。舟戸では大正橋と天竜橋に立てる。十二月二十五日にも暮の大祓をする。(八崎、舟戸)

八月二十六日に八丁じめをその日のジョウツカイが村の四方へ立てる。(真壁)

丑の日

土用の丑の日には餅をつき、丑湯にはいる。(小室)

八月

カマの口あき(一日)

釜の口あきは八月一日で元はヤキモチを作った。今はふかしまんじゅうを作る。(八崎、舟戸)

釜の口あきはフカシマンジュウをして、それを焼いて仏に供えた。
(分郷八崎)

もとはジリ焼きを作った。その後、生粉(キゴナ)のころはうでまんじゅうだったが、炭酸を入れてつくるようになり、今ではふかしまんじゅうが多くなった。この日に草刈りをする。(小室)

やきもち(あんが入ったもの)を神棚と仏様にあげた。家の人はふかしまんじゅう。この日は地獄の釜の蓋があいて、仏様がお客に出かける日だという。(下南室)

地獄のカマのふたが開いて、仏たちが出発する日といい、ヤキモチのホド焼きをする。この日はカマ(釜)を使わないようにしてホド焼きをするので、うどん粉をこねてあずきのアンを入れてつくる。「吹いて、叩いて大かぐら」といつてつくる。

今はいくつかつくって、あとはまんじゅうをつくる家が多い。

この日にお墓のそうじをする。七日にする

人も多い。(上箱田)

釜の口あきは八月一日で、盆のはじまりという。もとはヤキモチをした。釜を休める日という。ウデマンジュウをしてもやいて食べたいものである。(箱田)

ゆでまんじゅうを作り仏様に供えた。神棚に上げるものは、ホロクで焼いた。

地獄のカマの口アキで盆のはじまりで、仏



釜の口あきのジリヤキ(下箱田)こ
の日は釜を使わない。
(撮影 今井善一郎)

の来る口が開いたといつていった。遊ぶ日。(真壁)

七 夕 (七日)

八月六日に竹に色紙を短冊形に切つてかざる。お墓掃除をする。利根川で女の髪を洗う。今でも洗っている。頭の痛いのがなおるといわれている。花嫁が洗濯をする日。(八崎 舟戸)

七夕には七夕飾りをする。色紙に「天の川」など思い思いのことを書いた。(分郷八崎)

シンゴの竹を伐つて、色紙を短冊にして、川の名を書いて下げたものを、トボロの柱にくくりつけた。天道柱に立てる家もある。七夕様には赤飯を供える。キユウリ・ナスを二、三本盆にのせて供える。一升びんにカヤ・ススキをさして立てて供える。いずれも机にのせて緑側に出す。

墓掃除をする日で、竹を伐つて墓の前に花立てにしてくる。

四つ(十時)前に川へ行って髪を洗うと、何もつげなくもきれいに落ちるという。

雨が三粒でも降ると、七夕様は行き逢えないから、降らない方がよい。七夕には赤飯を作る。

七夕飾りは夕方川へ流す。(小室)

笹竹に子供の新しい着物を掛ける。緑側に赤飯やトウモロコシなどを供える。(小室)

六日の午后新竹に短冊をかざる。七日の朝そのところへ女衆の着物をかざる。「この日はメズラ畑に入るな。メズラ畑に入ると雨が降る。この日は年一回天の神様が合ふ約束の日だが、雨がふると天の川が、いっぱいになって合えないからという。(下南室)

女衆はこの日に髪を洗うことになっていた。(下南室)

むかしは七夕の日には女は髪を洗って化粧をしたものである。釜の口あけから盆の終るまでは生きものを捕えてはならないとされた。ことにトンボなどは特にいけないとされた。(下南室)



七夕の供え物(下箱田)うどんを供える (撮影 今井善一郎)

五色のタンザクの竹かざりをつくり、新しい手ぬぐいや、着物(親のでも子どもでもいい)を進めた。アゲワタなどを使ってあげたが、たなばたさまがぬれて来るから着物などをあげるのだらう。

おこをふかして表の方へ進める。ナス、キユウリ、ススキをとって来て机を出してその上に進せてやる。この日に墓そうじをする家が多い。

この日には、あずき畑や、ささぎ畑へ入ってはならない。

七夕の日は七回水をあびて、七回橋の下をくぐるとよい。

この日に頭を洗うと頭の毛がよくなる。

竹かざりは夕方になって川へ捨てるが、芯竹を少しとっておいて、大根まきをしたときに大根畑にたると虫除けになる。(上箱田)

七日は赤飯。六日の夕方、新竹に短冊の色紙に川の名や和歌などを書いて下げる。



七夕送り 七日の夕方、七夕様を川へ流す (撮影 今井善一郎)

朝芋の葉の露で字を書く。

十時前はセンゼイ畑に入るなという。雨が降った方がよい。川へ水が出て、男女がいきあえちやあ悪い。墓そうじをする。

夕方は早く七夕竹を川に洗す。(箱田)

七夕には朝食まえに墓場の掃除に行く。遊ぶ日。(真壁)

盆 (十三日・十六日)

盆棚 盆花とりの日は定まっていない。盆前ならいい。キキョウ、アワバナ、ミソハギ、カルカヤなどをとる。(八崎、舟戸)

盆棚作りは迎え盆の十三日の午前中にする。盆棚の下に無縁仏の来る所を作る。そこへも供え物をするが、そこへ上げた物は犬などにやる。(八崎、舟戸)

十三日に盆棚作りをする。二、三日前に取ったチガヤで、コデナワをない、シンコ竹を四隅に立てていらい付ける。ナワにヒバ、スギの葉やホウヅキなどを下げる。神葬祭の家は紙を下げる。花立ては竹の切りこみで作る、キキョウ・オミナエシなどの盆花をさす。盆提灯(新盆の家だけ買う)を盆棚に下げる。新しいゴザを盆ゴザに敷いて、位はいを飾り線香立てを供え、果物などを供える。

ナス・キユウリの馬を作り、トウモロコシの毛を尾に付ける。これをヤセ馬という。ナスを細かく切って里イモの葉にのせて、馬の脚として供える。ミソハギの花に水をつけて馬をなせてやったりする。(小室)

盆棚の前の竹柱に、ススキを束にして竹をくるむようにいらいつける。ハギ・キキョウ・オミナエシなどは花立てにたてる。(小室)

新粉でうどんを作り、生のまま盆棚の縄に掛ける。これを盆様の苜蓿とか、しよい帯という。(小室)

盆花 アワ花(オミナエシ)のことを盆花と称し、十一日か十二日に赤城山へ草刈りにいったときとってくる。(下南室)



ミソハギ (八崎) 盆花の一つに、ぜひ必要なもの (撮影 今井善一郎)



盆棚 (撮影 今井善一郎)

迎え盆(十三日)迎え盆は寺まで行く。提灯を持って行き、寺で火をつけてくる。家のカドで表わらを立てて迎え火をたく。線香に火をつけて墓に供え、線香をタイムツ代りに墓から家のカドまでの道中に一本ずつ立ててくる。これが百八灯である。盆棚にあかりをあげて食物を供えてから夕食になる。寺から墓地へ来て、家のカドで火をたき、線香に火をつけて

られている。盆花は赤城山へ行ってキキョウ、アオバナなどを採ってきて進めた。無縁仏は盆棚の一段低いところに置く。(下南室)

盆花はききょう、アワバナ(おみなえし)を盆棚にとりに行く。盆棚は特製のもののある家は少ないくらいで、多くは、蚤のクワクレデイを出して、その上に板をわたし、新しいござを買って来てすき、その上に位牌を並べる。(箱田)



迎え盆（小室） 墓から家までの道に線香を置
きなから盆様を遊べてくる（撮影 関口正己）



盆の迎え火（八崎）
（撮影 都九十九一）

カドから家まで線香を配り、
棚まで盆様を迎える家もある。
夕食は御飯、おつけの実にナ
スとフを入れる。（小室）

昔は盆様を赤城山から迎え
た。地獄谷から姥子坂を通り六
道へ抜けて来た。家の玄関には
仏様の愛がんとした植木などを置
いた。（小室）

下南室の下田一族は、一場所
に集り、山の上り口で小麦わら
をたき（もとは山の中までいっ
た）、その火で弓張り提灯に火
をつけてくる。家では、縁側に
水を鉢に汲んでおき、仏様に

水を洗うといつて、家の
人があがりきると外へ水を
すてる。

また、長男が、ハスの代
りに芋葉にナスを切つてミ
ソハギを二本しばり、それ
で芋の葉に水をかけ、それ
を送り盆の日まで毎晩かけ
る。無像仏の供養だとい
う。

寺へは朝迎えに行く、天
台宗興禪寺へ盆扶持をもつ
ていく、寺では茶菓子を出

す。

高橋氏は、曹洞宗双玄寺で、寺世話人二人が新盆の人をさそって、盆
扶持をもつていく、この世話人が寺から茶をあずかってきて組下にくば
る。

家々では、夕方個人々々の墓地へいき火をたき、線香をあげ火をつけ
てくる。家の門に入るとき又火をたいて、線香を二本たてる（この線香
は墓からつけてきたもの）。そのあと家へ迎え入れる。

諸田氏は曹洞宗桂昌寺で、十三日の朝迎えに行く、寺へいけない人は
世話人にたのみ、新盆の人はソウリをもつていく（下田氏も同様）。夕
方お墓で火をたいて、途中線香を所々に点々とおいてくる。新盆の人は
小さいローソクを点々と百八灯つけてくる。家にくるとお寺からもらっ
てきたお茶をあげる。（下南室）

迎え盆に行つて、お寺から帰つてから家で盆だなをつくる。盆だなのは
二段につくり、無縁仏は下の段にかざる。先祖さまと仏とは区別しない
で、位はいのあるものはすべて先祖さまとみる。

盆だなの下へは子どもを入れない。（上箱田）

迎え盆には、お墓に近い家では、お墓まで行くが、遠い家ではカドだ
けで火をもつて、この火で線香に火をつけ、てきとうな間をおいて一本
ずつたてて庭に入り、その残り、家の中の香炉にたてる。何軒かはそう
しない家もあるが、ふつうにはこうしている。（上箱田）

迎え盆の晩は米の飯で「こりやあめの飯だ」とよるんだ。カタイ家
ではシソクニソク（四足二足）は食わないが、今は盆ざかなといつて魚
や肉を直接食うことがふつうになっている。（上箱田）

十三日が迎え盆で、墓参りして、そこで小麦わらの迎え火を燃す家
があり、その場合は、その火を提燈の蠟燭の火に移して盆棚まで運んでお
燈明の火に点する。そうでない場合は、墓で線香をつけて来て、門で迎
え火をたいてその火を盆棚の火とする。（箱田）

十三日が迎え盆、盆棚は、ちがや（いね科の多年草）のなわを使つて

作る。家のカイドに線香を立て、麦わらをもすと、その煙に乗ってお盆さまが来る。(真壁)

お籠参り。お盆には親戚が集まる。(分郷八崎)

子どもが親もとの盆へ来る。(小室)

お盆には死んだ人がお客に来ているのでその人にお線香を上げにゆくというので、近所や、親せきの盆だなをお参りにゆく。これをオタナメエリという。(上箱田)

新盆・アラ盆見舞い。親が亡くなった時の盆には、新しい提灯を送る。新盆の家にはたくさんの提灯が下がっている。

新盆の家では百八灯をする。家のカドから家まで、ろうそくを十八本ぐらい竹の先に立てて並べて迎え盆の時に火をとます。送り盆にもやる。

墓地には白提灯を立てておき、盆の間中、夕方火をとます。

新盆見舞いには、近い親戚や近所がうどん、粉、金などを贈る。

(小室)

アラ盆の者は、墓地への往きかえりに百八燈をやる。これは墓地から家まで小ローソクを立てて火をとます。古いお盆さんのためには、途中とところどころに線香を立ててお参りする。

(下南室)

朝などに金巻封を包んでお寺へお参りに行って来る。アラ盆の家では新しいジョウリを買って持って行き、お寺へ納める。「仏さんはこの麻裏のジョウリをはいて盆に米とくれ」ということでもってゆくもので、今でも持ってゆく人が多い。

このときお寺からは、日輪寺では盆うち(盆の間)上げるお茶を、桂昌寺では線香などをくれる。

(上箱田)

アラ盆の家では、お墓までちようちんをもって行って墓参りをし、ちようちんに火を入れて、一つはお墓におき、他は火をつけたのをもち

て来て盆だなへかざり、盆むかえをする。(上箱田)



棚屋 盆の間にお寺様が盆棚へ来てお話をよむ (撮影 今井善一郎)



百八灯 (八崎)
(撮影 都九十九一)

て来て盆だなへかざり、盆むかえをする。(上箱田) 今でははしうどんをもつて、来てもらった家からは酒を出して接待したが、ぼたもちは必らずつて出した。今はビールで、サシミが出されるので歌が出るようは豪勢なお祭りのようなものもある。(上箱田)

新盆の家では、墓の石燈籠に火をつけ、新しい提灯を買って来て、それで迎える。近隣の者は、うどん三本ぐらい、粉ならばメツツギ(飯櫃)に入れて持って行ってアラボンミマイをし墓参りする。普通の盆の場合は「ケツコウナオボンダ、オメデトウゴザイマス。」というが、アラ盆の場合はそうは言えない。オ寂シェウゴザイマス」と挨拶する人もある。(箱田)

新盆の迎え盆には、お寺にソウリを納めた。墓場から家まで百八燈を立てた。

葬式に立会った人は、十四日に粉うどんを持って「新盆でおめでとろございます」とあいさつに行く。

葬式と同じように竹の箸でごちそうを出す。



盆棚の供えものはポタモチを一つの膳に、手前にわん三つと箸三ぜん向う側にも同じく並べて盛る。神棚にもポタモチを供えた。新盆中は墓場(小室)にチョウチンを下げあかしをつけた。(真壁)無縁仏、子供は盆棚へ上がれないので、小さい子の亡くなったものは、盆棚の下へ膳を出して供え物しておく。

また、家に縁もゆわりもない仏が軒先や庭に来ているので、盆様のお茶を庭へあけてやるので、そういった仏が飲めるといふ。

(小室)

送り盆(十六日) 百八灯は新盆の家です。家から墓地まで、割り竹を立て、ろうそくや付け木をつけて火をとます。

(小室)

送り盆には家の者はなるべく大

勢行く。ナスでヤセ馬を作り、茶を背中につけて、カドへ出す。里芋の葉にナスをさいの目に切ったものを乗せて、ヤセ馬の餌とする。

盆花をカドへ立てる。

送り火には麦わらをカドでたく。この火にあたると、でき物ができない、はれ物ができないという。

カド火で線香に火をつけて、たい松がわりにし、道々配りながら墓まで行く。

墓では水をあげ、線香を信ぜる。新盆の時は提灯を墓に置いてくる。

(小室)

下田氏は山の入口へいって火をもす。迎え盆にお寺からよこした茶を仏様のお土産として墓にお供えし、金剛杖を一本ずつ近くの仏様にそなえる。

金剛杖というのは、葬式の時用いるものと同じで、二〇〜三〇センチの割り竹を紙で包んだもの。

高橋氏は、夕方墓地へいって送る。供えものはキヌウリ、ナスなどのものをもっていく。このとき火をたいておく。この火をもすとき、「ネブツ・ハレモノデヤルナ」と唱えてお尻をあぶりながら四〜五回たたく。

諸田氏は、送り盆は進ぜたものは全部お墓へもっていく。墓の入口で火をたく、新盆のときは、百八灯をたてるので、うちうちの人が集って竹を割ったりして手伝う。(下南室)

送り盆は十五日で、朝、ぼたもち、昼、うどん、夜、めし。お盆のときは仏さんやご先祖さまがみんなお客に来ているから、食事は、家中が盆だの前でやる家が多い。送り盆の日は、夕めしを食べた後でお盆さんにお茶を進せて、家中が盆だの前で一諸にお茶をのんでから送り出す。十萬徳土という遠くへ行かねばならないので、仏さんは夜立ちだ。

そんなわけで、十六日の朝は、朝草刈りに行くといさまの足を切るから、この日だけは草刈りに行ってはいけない、といわれている。

送り盆には供えてあつた花や、くだもの、つくった馬など一切のものをもつてお墓にゆき、麦わらの束の火を燃して送る。麦わらの火の方へ尻を向けて「ネブツ、ハレモン、デヤルナ」といって尻を叩くと、できもんがでないという。(上箱田)

送り盆の場合は、迎え盆の逆にする。なお嫁、婿など親が死んでいゝものは墓参に行くが、そうでない場合はとくに里に帰ることはない。(箱田)

送り盆は十六日に送る。送り火をたく。(八崎、舟戸)

送り盆は夕食後、盆棚の供えものなどを持ってカイドウに出し、線香を立て来る。(真壁)

盆の食物、朝、おはぎ。昼、うどん、そば。夕、御飯。十四、五、六日とも同じ食事が多い。(小室)

十五日の晩は魚をおかずにして食べる。盆ざかなという。(小室)

朝、ばたもち。

昼、うどん、うどんのうでてないものを何本か、盆だなかざりなわにひっかけて進める。これは仏の乗りもの馬のタヅナになるものという。夜、めし。(上箱田)

盆の禁忌 七夕から盆まで、セミを取ったり生き物を殺してはいけない。肉を食べるなという。

盆のうちは水浴びもするな。(八崎)

盆の十四日に草刈りをしてはならない。仏様の足を刈る。仏様は赤城山からお盆の家へ帰ってくるが、足の遅い仏は十三日につかないでまだ山にいるから、草刈りするなという。(小室)

千匹げえ(十六日) 千匹粥は十六日にした。ツトッコから麦を煮て三本辻へおく。

(八崎、舟戸)



千匹ガユ 三本辻に出す
(撮影 今井善一郎)

の遠足で妙義にゆき旅館でこれをやったところが、女中さんだけが集まつた。たことがあつた。(上箱田)



送り盆の品々 送り火と一緒に地上に置かれるナス、キュウリの馬、盆花など
(撮影 今井善一郎)

十六日には必ずずこやし出し(既肥出し)をするもんだ。できないときは少しでも出すことをする。

この日には、豆と麦とをまぜて煮て、わらでツトッコをつくって辻へ出した。仏さんの乗る馬のえさになるという。(上箱田)

盆おどり 八木節おどりはやる前大正年間までは、盆おどりがときどきあつて、インナゲオドリという

のがさかんで、村中の誰もが入っておどれたので年寄りもやつた。そのころ小学校

九月

八朔の節供(一日)

タノモの節供は九月一日、赤飯をたく。嫁はシウガをのせて重箱をもつて里へ客にゆく。(八崎、舟戸)

一日はシウガの節供。強飯をふかして、嫁御は里帰りをする。その折、強飯の上にシウガをのせて持って行く。(分郷八崎)

タナモの節供、シウガの節供といい、嫁が赤飯とシウガをもつて里に帰る。昔は泊つたが、今は泊らない。お返しは思い思いの物をする。(小室)

八朔の節供は「頼母子の節供」ともいった。この日新郎新婦は揃って仲人の家に行った。このときシウガを土産に持っていったので、シウガの節供ともいった。(下南室)

八朔を「タナモの節供」という。(下南室)

八朔の節供はシウガの節供ともいわれ、おこわをふかして重箱に入れ、薬つきのシウガを重ねて実家にお客にゆく。女衆が、イタチの行列のようにいくたりでも子どもをつれて親のところへごきげんうかがいに行くわけで、幾年になつても行く。

仲人のところへは子どもができるまでは行くものといわれる。

「アサビができたからエンキリ」

「孫の祝いが仲人のエンキリ」ともいう。(上箱田)

タノボの節供は九月一日、シウガの節供ともいう。「家風に合ねえから、しょうがねえから」というので、里へシウガを持たせてやる。実家では、シウギ・メケイを持たせてやる。シウギ・メケイは手かずがきまつていないから、「手かずでも置いてくれ」というわけである。(上箱田)

シウガの節供ともいい、嫁はコワメシ(赤飯)の上にシウガを載せて里に帰る。(箱田)

タナマの節供は遊ぶ日。(真壁)

二百十日(一日)

二百十日や二百二十日は厄日。無事に過ぎるのを待つ。(小室)

別に何もしない。(上箱田)

道普請

春秋二回行なわれた。人足に出ないときは出不足として五十銭出すことになつていった。その夜はかならず一同夕食をすることになつていった。大正二、三年まで続いた。この時、出される酒をカンジウ酒といい、この費用も八幡様の酒代と同じに村から出された。「秋季道路修繕日待費帳」が昭和十二年まで続いていた。(真壁)

十五夜(旧八月十五日)

十五夜、十三夜、これは勿論旧暦である。八月と九月のその夜、だんご作る家、うどん作る家などある。(八崎、舟戸)

縁側に机を出し、ふかしまんじゅうまたはだんご十五箇、ススキ・栗・里芋・サツマイモなどの初物を奇数にして箕に入れて供える。箕ですくうほど取れるように箕に入れる。「おてまる突き」といって、近所の子供が供え物を突きに回ってくる。(小室)

十五夜、十三夜などは、クチャツリといつて自分の家だけで変りもんをして食うことをする。

オテマル(マルメモンのこと)をつくり、すすき十五本、さつまいも、さといも、柿などを、ミ(箕)に入れて進ぜる。さといもは赤いからと白いからをからごと進ぜる。

十五夜はくもるが当りまえのことといわれる。(上箱田)

旧八月十五日は十五夜で、オテマル(米の団子)をつくつて、十五こを月に供える。すすきや、野菜なども供える。子どもたちはオテマルつきに行った。竹の先にくぎなどつけたもので、突かれると縁起がいいと言つた。が、最近はその風がなくなつた。オテマルも、ふかしまんじゅうなどに代つた。(箱田)

供えものはオテマル(ゆでまんじゅう)クリ、カキを飾った。
オテマルは十五夜十五個、十三夜十三個作る。子どもが下げに来るが知らぬ間に下げられるほどよい。(真壁)

彼岸(二十四日)

おはぎを作って先祖祭をする。年忌の場合は坊さん呼んで拜んでもらい、供養塔を立てる。三年忌、七年忌、十三年忌、二十三年忌、三十三年忌とする。(小室)

初彼岸には近しい人が墓参りに行く。別に念仏などはしない。(小室)
春彼岸とは同じことやる。

お盆に行かなかったからお墓参りに行く。昔は親のお墓参りに出かけて行った。(分郷八崎、上箱田)

施餓鬼(九月彼岸)

天保年間より戦時中まで、下小室部落では各戸米一升ずつ持ち寄って観音堂で施餓鬼をした。世話役が前日に用意しておき、大釜で茶飯(しょうゆ飯)を煮て、半ギレに盛ってお昼の時にとろふ汁をつけて誰にでも食べさせた。膳碗は郷倉に蔵ってあったもので用意し、衆生に施しをした。(郷倉は売り払って、今は鍋藏氏の倉になっている)

家々からは持仏堂や新仏の位牌を持ちよって、お経をあげてもらう。色紙で五色(赤白黄青紫)の旗を立てるが、その旗はあとで破いて各戸に配る。盆棚の四隅に吊るした。あとで大根畑に立てると、虫が食わないという。

観音様には木魚や乳鉢もある。今は公会堂になっている。(下小室)

社日(日)

社日というだけで、別に何もしない。石の鳥居をくぐってお参りするものといひ、回ってくる人もいた。(小室)

社日にはシャニチザルといひ、蛋のザルを買うことになっていた。(真壁)

十月

神送り(旧十月一日)

神送りと神迎えは、十月一日と三十一日、昔は赤飯をたき産土神へあげた。(八崎、舟戸)

十月一日はお神送り。赤飯をして神社にお参りする。(分郷八崎)

神様が出雲へ行く日。おたきあげて供える。(小室)

旧十一月一日(新十二月一日)がお神迎えになるので、朝早く鎮守さまに迎えにゆき、帰ってから神だなに灯明を上げて拜んでから、おこわをふかす。あずきがゆるときもある。(上箱田)

旧曆十月一日がオカミオクリで、この日神様は出雲へ出かけるという。十一月一日がオカミムカエで、この日神様は、出雲からかえってくるという。

この間の留守居番は、エビスサマがした。十月二十日にエビスコウをして留守居のエビスサマにごちそうをするものだという。(上小室)

旧十月一日(新では十一月一日にする)がお神送りの日で、この朝暗いうちに鎮守さまにお参りし、おこわを供えてお願いと良縁がまるとまる。この日から神さまは出雲の方へ出かけて留守になるので、エビス、大黒がルスインギョウとして留守を守ってくれるので恵比須講をする。(上箱田)

今は余りやらないし、十一月一日をお神送りとしている。全国の神々が出雲へみん出かけるので、この朝暗いうちに鎮守さまにお参りし、おこわをふかして行って進んでお願いと、良縁がまるとまるといわれる。だからおそくなって頼んで、アリーヤ、アリーヤできまつた夫婦はこわれるという。この日からは神さまがいねえから火事に気をつける。エビス大黒は出雲に行かないのでルスインギョウとしているので、この時期にエビス講をするという。(上箱田)

一日はオカミ迎え。赤飯を氏神や観音様に供えた。(分郷八崎)

お神迎えは十二月一日にする。

朝早く鎮守さまにお迎えにゆき、家へ帰ってから神だなお灯明を上
げて拝み、おこわをふかす。おこわでなく、あずきがゆのとときもある。

(上箱田)

病氣祈願

これは石尊様、多賀神社等に御願をかける例が多い。

ボンドン

村中でボンドン立てて、おがむのは八幡様と十二様とがあった。境内
の高い木に立てた。(分郷八幡)

オクンチ・秋祭り

お九日、元は九月十九日であった。今は十月の九日。赤城神社の秋季
例祭。(八幡、舟戸)

十九日が中の九日で赤飯をする。(分郷八幡)

旧九月九日が初グンチ、十九日が中のグンチ、二十九日が末のグ
ンチ。

小室では社家さまの都合で十八日に秋祭りをする。また、今は十月に
ヨッコ(移動)した。(小室)

赤城神社秋祭は神主の都合でオクンチを九月十八日にする。前日、村
の人が総出で神社を掃除する。灯籠を一戸一本ずつ持ちより境内に飾
る。神社の灯籠も飾るので、宵祭りはきれいになる。

万灯の花作りは毎戸出る。祭りが終ると、その花を配る。(小室)

秋祭りをオクンチといひ、この日が神明さんのご縁日である。

おこわをふかし、近しい親せきを招んでお客をし、帰りには重箱でお
こわをもらってゆく。お客がおみやげでもって来るものは土産の品物を
もって来る。(上箱田)

九月十五日だったが、十月十五日になった。氏神木曾三柱神社。春祭
りは笙、ひちりきで賑やかだが、秋祭りは簡単。(箱田)

昔はオクンチといつた。そのころは晩秋蚤がなく、九月九日のハツグ

ンチ、九月十九日のナカノグンチ、九月二十九日のシメグンチをした。
また大字によつては九日のところと十九日の所とあつて、十九日が一番
多かった。対岸の群馬郡ではハググンチがなかった。いま十月九日にオ
クンチをやっている。

今は蚤が九月に忙しくなつたのでオクンチができなくなり、秋祭りは
十月十五日となつた。(上真壁)

九月九日が初グンチ、十九日が中ノグンチ、二十九日がシマイグン
チ。現在は十月十五日の秋の祭り日をオクンチという。(真壁)

九月十五日(十月九日か)が八幡様の祭日。初午の稻荷様のお祭りと
同じでノミホーデー、タイホーデーであつた。この日には、アライブカ
シの餅(もち米をほとぼしてつくのが普通だが、すぐふかしてつくこ
と)を四人づきでつき、固い餅を出した。これをアソコロモチといひハ
ンギリオケで出された。トローパンといふのがあつて青年が燈籠を
作つた。(真壁)

薬師様(八日)(四月・十月)
小玉の祭りで、目の悪い人がよくお参りに行つた。太鼓を叩き、灯ろ
うに火をつけた。めの字を書いてせに入れて進める。(上箱田)

秋葉待ち(十七日)(二月・十月)
上組、小玉で特にやるもので、講のようなのである。火伏のお祭りだ
が、食いくらになる。米は持ち寄り宿は順番になつてゐる。食い放だ
いの会になるので、こういふのをタイオマチといふ。(上箱田)

(注) 上箱田の中に三組あり、二月と十月に行なり。
十三夜(旧九月十三日)
十五夜と同じように供え物をして祭る。お手まるは十三箇。女衆の祭
で、女衆が余計に信仰する。十三夜にくもると小妻がはずれる。

サトイモヤツガシラを供える。(小室)
十三夜は十五夜と同じようにするが、すすきは十三木、栗のユガも進
める。

「十五夜がくもり、十三夜が晴れるのがあたりまえ、十三夜にくもるとがある」と世の中が乱れる」といわれる。

(上箱田)

十三夜は十五夜同様であるが、簡単にする。(箱田)

十二講 山仕事、草刈など続けた後は気の合った者が時々米一人三合ぐらい持ち寄り講を開いた。(真壁)

十一月

刈り上げ祝

稲刈りの終りの二株をカマドの神様に上げた。下げ穂という。これは何年でも上げておいた。魚の骨をのどにつかえた時この穂でなるといという。(分郷八崎)

釜神様にイネのよくてきた株を供える。サゲゴと言う。釜神はメシの神様。(真壁)

穴ツブサゲ

秋、畑の麦蒔きが終了すると、穴ツブサゲという餅をつく。今では十日夜と一箱にする所が多い。(分郷八崎)

畑の麦まきが終わった時に穴ツブサゲ餅をつけて祝う。十日夜の餅と同じころになる。田の麦まきよりも早いので、別々に祝う。(小室)

十一月も二十三日までの間に、アナツブサゲエといって、ネズミの穴をふさぐという意味をもったあずきかゆをつくり、さとうを入れて甘くしたものを食べる。(上箱田)

田麦力ユ(十一月十五日ごろ)

田の麦まきが終わった時に、アズキガユをたいて、手伝ってくれた人などを呼んで祝う。(小室)

ニワアガリ

麦まきも終るとニワアガリ(ニワアガリ)といって、手伝ってもらった人や、本家親せきを招んで大ふるめえをした。もし来られないような人

がいたときは、重箱につめてもって行った。(上箱田)

十日夜(旧十月十日、新十一月十日)

十日夜、これは昔は旧曆十月十日の夜であったが今は新曆の十一月十日の夜する。庭に稲わらの束をかざり、餅を五ヶ乃至十ヶ位供える。大根に芋なども上る。昔は十日夜に蚤の当る家の大根をぬすんで食えば蚤が当たるとさかんにぬすまれたものであった。子供はわら鉄砲を作って土地をたたき歩いたものである。(八崎、舟戸)

十日はトウカンヤ。餅を作ってトウカンヤに進げる。お供え餅は観音様にも上げた。ワラデッポウで地面をたたきながら、「アサソバ、キリニヒルダンゴ、ヨウモチクツチャ、ネエランネ。」と唱えた。(分郷八崎)穴ツブサゲの餅をつき、一つの大きなお供え餅を作って箕にのせ、大根を二本そえて縁側にそなえる。わらの束を庭に立てて、それに向けて供える。この餅は子供が食べると縁遠くなるという。大根の年取りで、大根の初ものを供える。また、できたての大根をおろして、カラミ餅を食へる。

子供はワラデッポウを作り、もぐらが掘らないように庭じゅうをたたき、近所を回る。十日夜は畑の麦まきを終すメドになる。(小室)

新米で真白な餅をつき、大根二本とサツマイモ二本を盆にのせて、縁側に供える。ワラは別に立てない。月祭りで、一番盛んにする。(小室)九日の晩に、昼を食べてから、歩いて、高崎の清水の観音様へお参りに行った。お籠り宿に泊り、朝早く、一番参りする。運の神様という。

十日夜には、ワラデッポウで、もぐらが掘らないように、さんざん叩いて廻った。ワラデッポウは、芋がらをしんにして、ワラで巻き、十日夜、十日夜、十日の晩は寝らんねえ、ようめし食つちや、ワラデッポウ」と唱えた。すめばワラデッポウは棄ててしまふ。(上箱田)

十日夜(旧十月十日)この日、久しぶりにもちをつく。「一年中ここのもちがいっとうらんめえ」といわれる。大根をとって来てカラミモチ

をつくるが、これもうんめえもので、カラミモチはあたらねえでいいし、食いすぎねえ。

子どもたちはワラデッポウをつくり地面を叩きながら次のようにうたう。

「十日夜、十日夜、

十日夜は寝られねえ

朝そばきりに、昼だんご

夕めし食っちゃあ、腹でえこ。(上箱田)

もぐらがおこさねえようにというので、親がつくってくれたワラデッポウを子どもたちが叩きまわった。タダイモ(さといも)のくきを芯に入れて、わらをつけ、なわでよく巻いてつくるが、

「十日夜、十日夜

十日の晩は寝られねえ

夕めし食っちゃあ

わらでっぽう」

と、うたいたい叩いて歩いて、それが終るとどこかへ放り出しちゃった。(上箱田)

だいたい十五夜に似ているが、この夜は餅をつく。

子どもたちはワラ鉄砲をつくって、それで地面を叩き歩く。その時の

唱え言。

「十日夜、ワラ鉄砲

朝そばきりに昼団子

夕飯くっちゃあ、はらでいこ。」

古くは餅のお供えは、三バニュー(ワラ束三ば)を庭に持って来て、

その上に供えた。百姓の祭りだという。(箱田)

トウカンヤに餅をつく。子どもは、もぐらが近よらないようにと、庭

をワラテッポウでたたいた。

「トウカンヤ トウカンヤ



講 八崎 (八崎)
比 須 惠 (都九十九)

朝そは切りに、昼だんご
夕めしくっちゃあ腹(又は
わら)でいこ。(真壁)

エビス講(二十日)

エビス様は男とも女とも
つかず、出雲へいかないの
で留守居をしている。旧曆
の頃は今は新曆になって十
一月二十日にエビス講をし
てエビス様を祭る。座敷へ
かざって御馳走を上る(八
崎、舟戸)

二十日はオイベス講。夜
オイベス様を出してかざり

ケンチン汁やテンブラを供えた。テンブラのことをこの辺ではツケアゲ
といい、それを供えることによつて身上をつけあげるといふ。また一升
マスに金を入れて供えた。(分郷八崎)

エビス講にはエビス・大黒を祭り、お頭付を供える。また、お金をま
すに入れて供える。供えた御飯を子供にやると縁遠くなるという。エビ
ス様はひとり者。この日は入るものは入れて、出すものは出さないよう
に、金を使わせない。エビス・大黒はふだん神棚でなくお勝手に祭っ
ておく。働き者。

正月は朝祝い。秋は夕方祝うのがよいという。(小室)

神送りの話の中にあるように、神さまがみんな留守になつた後を守つ
ているエビス大黒さんをお祭りするのでエビス講をする。

めしを煮て、魚を買つて来て食う。(上箱田)

秋のエビス講は夜する。サンマを供える。(真壁)

屋敷祭(二十三日)



稲荷のオカリヤ (八崎)
(撮影 都九十九一)



お釜神様と供えられた稲麦 (八崎谷津)
(撮影 都九十九一)

二十三日が屋敷祭。当日、オカリヤ(元はカヤで葺いた)を骨からすべて新しくする。三隣亡にぶつくと、前日に祭る。強飯、尾頭付き、豆腐を供える。供え物をしてから後を振り返ってはいけない。昔は子供たちが供え物を下げ歩いたものである。(分郷八崎)

勤労感謝の日に祭る。屋敷の稲荷様や若宮八幡様などのお飯屋を作り、赤飯、ケンチン汁、頭付のイワシかサンマなどを供える。魚の好きな神。トウワも好きな神。井上組の新宅ではトウワの隅を切ってそれをグシ餅として稲荷様の屋根に上げる。本家は正一位稲荷に頭付の魚を上げる。(小室)

新嘗祭に屋敷神のおカリ屋をふきかえて、秋の稔りのお祝いをする。祭るのは、屋敷内の稲荷、若宮八幡、その他四つも五つも作って祭る家もある。(小室)

三隣亡のつくときは、エボ結びをする日(結び目をつくる日)といっ
いやがってしない。
ペロペロ(百姓へえそく)をつくって台所、俵などに上げた。

おこわ、なまぐさ、とうふ、塩水を進ぜるが、進ぜて帰るときに「後を向くとトラウサンネ」といって注意された。供えたものを「そんなに欲しいならいらねえ」といって受けてくんねえから困るといった。翌朝になっても供えものが残っているときには、切石で火を切つてきよめた。(上箱田)

お稲荷祭りは十一月二十三日で、屋敷神の祭り。前日にオカリヤ(薬宮)をつくり朝祝う家(高梨イツケ)と、当日につくり、夜祝う家がある。赤飯。

この日釜神のシメをつくる。この下にオカマノホ、サゲホと称する初刈りの稲の穂を下げる。このシメははずさず上へ上へと重ねて張り、屋根替の折などに、屋根のグシに丸めこむ。

釜神に供えた正月のお松もはずさずにおく。初雷の時、これを庭で燃すと、雷に打たれないという。またのどに魚の骨のささった時に、のどをこの松でさすると、骨が下るといふ。(箱田)

二十三日がイナリサマ。新わらと竹でイナリサマを作る。お供え物にはイワシを使い、サンマは使わない。(真壁)

ツジウダゴ(三十日)

くず米の粉をこねてにぎったものをゆで、カヤの茎に二箇ずつさして、ツジウダゴを作り、神棚、稲荷様、井戸などへ供える。子供が下げて食べた。 (小室)

「むしろっぱたき」をしたときの足もとの砂まじりの米・ツジウダゴ粉にして、だんごのねじったのをつくって食った。(上箱田)

稲こぎのあと足も(に散った)の米をひいて団子をつくる。てのひらで握った。ツジウダゴといひ、こぶしの形。これをカヤにさして、トボー口その他に供えたが、今はしない。(箱田)

十二 月

川びたり餅(一日)

川浸り餅は（昔、今はない）餅をついて神社へ上げた。また、小川へ餅を流した。十一月一日の行事であった。（八崎、舟戸）

一日にカワビタリ餅をつく。利根川に行き、御供え餅を流す。昔、ある家の一人息子が川に遊びに行ったとき、川が氾濫して、竜巻きのようになつたが、助かった。それから餅を供えるようになったといわれている。（分郷八崎）

川ビタリ餅は、川に流れた人の供養だが、この辺は割合につかない。

（小室）

「子どもが川で死んだので、餅をつくようになった」というが、はっきりした伝承にならない。（箱田）

オコト八日（八日）

十二月八日はオコトシマイといって赤飯を夕飯にたいした。竹竿の先にメカイを立て庭に出した。天から鬼がのぞくと目の沢山あるものがあるので驚いて逃げるという。（八崎、舟戸）

オコトシマイで、メカイを竿の先に付けて庭に立てる。上から鬼が来る日なので鬼の目を見張る。鬼は目の大変あるものがあるので、おっかなくて来られない。春はメカイを上向けにし、秋には下向けにする。赤飯をふかすか、春は朝、秋は夜ふかす。（小室）

おことようかは、十二月の八日。唐からジャの目が来るので、庭にメカイ（目籠）をしんぞろという。

天から魔が来るから、メケーを庭に出す。メケーの目の数が多いからたまげる。（上箱田）

庭先に竹ざおの先にメケエをたてるだけ、唐、天竺から八百万の病気が来るので、これでおどして訪ぐという。（上箱田）

針供養（八日）

十二月の場合は、針を一年間使ったからとて、かけ針などを豆腐にさして土中に埋めた。ハリをシンゼルという。（箱田）

油餅（冬至の前ごろ）

油餅、これは冬至十日前に、「夫婦餅」といって作るとなよくなるという。寒さしのぎに油で揚げてたべた。（八崎、舟戸）

二十日に油餅をつく。その際粟と米の餅を一日ずつついて、御供えにして、神に供える。これを夫婦餅という。（分郷八崎）

油餅は夫婦祝いのので、十二月十八日から二十日などの丁日（トヨビ）に祝う。半日（寄敷日）はいけない。夫婦の祝い餅ですべっこく仲よく暮らすように油を食べる。タルミをすって餅につけて食べたります。一色餅はつかないで、ノリなど入れたたり、米、粟、キミなどの色々の餅をつく。夫婦揃わぬ家ではつかない。（小室）

油餅は「火伏せの餅」とも称し、十二月の冬至前ならいつでもよかつた。菜種油をしぼったお祝という。（下南室）

油もち十五日ごろつく、というのは、その日ごろ話し合つて日をきめるからで、夜、もちをついてタイムチをする。もちの中には、ゴマを少しいって入れる。（上箱田）

油餅は、十二月中旬。冬至前の十八日ごろ。

もより、もよりでサタを出してついた。火伏せの餅とも、夫婦餅ともいい、後家の家ではつかないものとされた。米と粟と二色つき、一白ではいけないとされた。（箱田）

冬 至（二十四日）

御幣束を上げ、御飯、ケンチン汁、トウナス、カボチャを食べる。ナスの木を燃して、冬至トウナスを煮て食べると中氣にならない。ユズ湯をたててはいる。

少神山の星祭りに行った。家中の者の年を書いて行き、オコモリをして祭つたが、最近泊れなくなったので行かない。（小室）

冬至だからといって特別に拜む人はいないが、神主さんにゴヘイを切つてもらつて来て、えんがわや、玄関などにかざる。神主さんのところへは重箱の中に米一升を入れ、金十銭を包んで行くと、おぜんでショウビキの切身で昼めしを出してくれられた。

家では米のめしを食う。

トウジンマチといってトウナスを食うと中気にならないという。
ユズをもちでユズユをつくり「ユーズウがきく」といわれた。

(上箱田)

冬至トウナス、ゆず湯に入った。こんにやくを食べると中気にかからないといひ、また一年中の砂はらいとも言った。

神社では冬至まつりをし、神主に拜んでもらう。(箱田)

大師ガユ(二十三日)

二十三日は大師粥といって、アズキ粥を作つて大師様に供える。粥が残っていると女衆があたためてまた供えた。大師様は気が短かいので、朝飯を早くたべてセチガイ(前橋など)に行き、正月モノを買う)に出かけた。(分郷八崎)

太子講は、職人が集まつて祭つたり、貨金の額などを申し合わせる。

(真壁)

八丁ジメ(冬至ごろ)

七月三十日と十二月二十五日の年二回、常使いが村の出入り口三か所を立てる。(小室)

冬至には、ハツチヨウジメをジョウヅカイが出て村の四方に立て、村に厄病など災難が入らないように祈る。

又紙で人形作り、息を三回吹きつけ鬼ヶ島、越後坂、坂東橋、小室境を立てた。(真壁)

暮かんじょう(暮)

一年の区しごとの経費のかんじょうを暮にする。六、七月のかんじょうと、暮のかんじょうと二回やつてすませる。(上箱田)

秋葉様(暮)

十二月になって火の番や夜警を始める時に、年番の宿に寄つて会食した。小屋はあるが、講はない。(小室)

年の市

暮の市は前橋へ出た。それより前には白井の市に行った。(上箱田)

すすはき(十三日以後)

すすはきは思い思いで定まつていないが、一、二定まっている家もある。坂上の大島六三郎氏は十二月十三日、田中松義氏は十二月二十七

日。(八崎、舟戸)

二十三日に煤はきをする。(分郷八崎)

大掃除は十三日にしたが、今では適当になった。このときはスス竹は新竹を用い、終ると川へ流した。シメ飾りをこの晩につくつた。

(上雨室)

すすはきは二十五日ごろ。スス竹は二本を一つにしばり、一対作る。

終つてからこの竹は川に流す。

神棚から掃き出す。終つた夜はススハキイワイをする。(箱田)

すすはきは十三日、この日からは、暦を見てよい日を定めなくてもよい。

ススハキボーキは二本作る。一本ボーキは作らない。(真壁)

すすはきは十三日にする。

すすはきをした後、オカイ(かゆ)をつくつた家もある。(上箱田)

歳暮

歳暮は二十日過ぎに、一年中働いてもらった人に贈る。(小室)

十五日をすぎればいつでもよい。アラマキを一匹、実家と仲人のところへもつて行つた。小作をしている人は地主さんのところへ、金を借りた人は貸した人のところへも持つて行つたが、地主さんのところなどは名札をつけて並べて下げておく家もあつて、後から小さいのをもつてゆくのは気がひけていやだった。(上箱田)

オセイボには、シオビキ一本ぐらいが普通。親元、仲人、本家その他

特別世話になつた人にする。(箱田)

盆、暮勘定、通い帳をもつていて、買物はすべてこれに記帳し、盆と

暮にまとめて支払った。この支払いにいったときは、商人は酒を出してくれた。かけとりには医者がよくまわった。小作料は七月と暮に納めた。肥料屋は農休み前と暮に主にかけて、盆勘定は割にゆるかった。

松 迎 え

(上南室)

お松は門先(門松)へ二本、庭へ六本位。これは家の方を向けて立てる。お墓へも立てる。(八崎、舟戸)

二十三日にお松迎えをする。三階の松を切ってきて、屋敷稲荷のところにおいた。一升マスにオサゴを入れ、タヅクリをそえてその枝の上に供える。

体を清めて、オシメをなう。(分郷八崎)

冬至過ぎに山へ松取りに行く。(小室)

松迎えはサンリンボウをきらい、この日をさけて二十八日頃とりにいった。(上南室)

二十八日ごろ、村の山から松迎えする。(箱田)

ふつうには「山じまい」は各戸できめるが、二十七日ころが多い。

(上箱田)

シメ飾り

二十五日過ぎのよい日に作る。「一夜飾りをするな」といい、三十日までで作って飾る。(小室)

お飾りは、ススライの夜つくったのを三十日に飾った。一夜かざりはよくないという。門松には、白松と赤松を男女になぞらえて組んでたてた家もあり財をなした。(上南室)

二十七日にはお正月さまに使うオシメナイをする。この日以後は正月二十日までではワラゼエクはやってはいけない。(上箱田)

シメないは二十八日ごろ。オカオカクシ(大の字)、ボウジメ、コジツコメ。(箱田)



シメ飾り(八崎) 部屋の内側へ張りめぐらす (撮影 今井善一郎)



シメ飾り(真壁) 居間の内側へはりめぐらす (撮影 今井善一郎)

正月棚とお札

正月棚は神棚とは別に作る家が多い。年徳神、産土神、天照皇大神のお札。お供え(餅)。お灯。煮たきしたものを。昔はテング、キネなどをのせた。

(八崎、舟戸)

二十五日に、区長が神官の所から正月のお札を受けてきて、各戸へ配った。伊勢天照大神・歳徳神・氏神・祓(ハライ)の四体。(小室)

二十五日ごろまでに、赤城様の神主が正月様のお札を持参してくれた。大晦日の夕飯から新しい木鉢で進せた。この晩は下げが、三元日は下げない。

(上南室)

キリカエ

御幣束を新しいのと取替えることをいう。年一回づつやる。元は講社の人が頼まれて行った。三宅荒神とかいろいろの神の幣束をキリカエでやった。今は弁天様に全部申込み、千本なり作って各戸に配る。

またタタリを除くときもキリカエをする。(中真壁)

正月を待つ歌

「お正月はくるくる、オラーぼろをずーるずる」など唱えた。(箱田)

餅つき



年神閉とシノ飾り(真壁)
(撮影 今井善一郎)



正月棚(真壁) 取りはずしのできる棚
(撮影 都九十九一)

十文字にわらを敷いて餅つきをし、終ってもこのわらはウマヤには入れない。臼を洗った水を馬にくれると、火事のときに馬が出ねえといわれる。馬が出ねえときにはウマヤに臼をころがしむと出るという。

(上箱田)

餅つきと門松立ては、たいがい三十日にする。(八崎、舟戸)

二十七日から三十日の間に、餅をついたり、お飾りをした。

ただ、二十九日には九(苦)餅といつてつかない。三十一日には一夜飾りといつてさけた。

(分郷八崎)

餅つきは三十日ごろつく。
(小室・箱田)

餅つきは二十九日はクモチといつてきらい、三十日についた。

小室の星野一家はこの餅つき
のとき、祖先が妻の頭をつけて
しまったというので一月おくら
かせてついた。

溝呂木の南雲一家は、やはり
頭をついたかどうかし、餅が血
で赤くなったので、正月の餅は
イモガラといっしよに食べたとい
う。(上南室)

三十日に餅つきをし、おそな
えなどもつくるが、臼の下には

餅がつけない家

星野イツケは冬至後、正月いっぱい餅がつけない。赤飯、ソバの家例である。冬至前の油餅をつく。(小室)

ミソカ(三十日)

ミソカソバを作る。(小室)

夕はんにミソカソバといつてソバをつくって食べる。この家は大晦日にはめしを食う。(上箱田)

大ミソカ(三十一日)

大ミソカには雙支寺の百八の鐘を聞いた。鐘は戦争中に出してしまつた。(分郷八崎)

大ミソカの夕食は御飯、魚、ケンチン汁を残らないように作る。女衆は夜遅くまで着物を縫って縫い上げたり、タビバソソ(タビの修理)をした。除夜の鐘を聞くために遅くまで起きている。「年取りの晩に早く寝るとシラガになる。年を取るのが嫌なら、橋の下でしゃがんでいろ」などという。(小室)

大ミソカには「年とりそば」といってソバをつくる。余り早く寝ない。

元日の朝ぶらの当番になっている家は除夜の鐘のころセエフロに火をつけはじめたので大変なことだった。(上箱田)

口頭伝承

解説

上野 勇

三十九年度の調査地鬼石町の下久保地区は、すでに水没し始め、水没する三波石の補償を庭石業者が要求し、新聞紙上をにぎわした。四十年の勢多郡東村は花崗岩の村だった。今年の北橋村には、石はほとんど見当らない。伝説を伴うものは「硯石」だけだった。その代りとは無論言えないが、雷に関する伝承が他と比べ多く集った。八月二日未明の地ひびきするほどの大雷雨を経験した調査員が話題にしたのか、それとも雷の話からいとぐちがほくれたか、これだけは今も名物の雷について、話し合われたに違いない。

隣の新潟県には、昔話を一人で百話以上も語る「百話クラス」の年よりの多いが、群馬県では、すでに共同調査を始めて十年になるが、良い伝承者には、今年もめぐりあわなかった。しかし、村の出来事、村の奇人の話と地名に関する伝説は豊富である。

「藤原覚書」に収めた「藤原話」の、蚊帳をとびこみぶくろといひ、切昆布をくるびゃっかんといったという話は、南室出身の小池いの人から聞いたものだが、上南室の出身か、下南室か判らず、たしかめることができなかった。

戦後、八崎の都丸十九一氏を訪ねた時、「こんなケンマクナところで」と、母堂がいわれた。剣幕などところかと、ちよつとびっくりした。すぐ

「とりちらしているさま」と判ったが、北橋で始めて聞いたことばとして印象深い。勢多郡全般の方言は、「勢多郡誌」に詳しい。今度の調査で、カゲツナ（黒幕）の語を加えた。

一、伝説

(一) 地名

光明塚 八崎の竹の原に光明塚という塚がある。一本松が立っていた。昔ここで光明という坊さんが石のカロウトを作ってその中に入り、念仏の鉢をたたいて七日七晩たたいて死んだという。いつの頃か、どこの人かわからない。

茂木佐重郎さんのお又さんの善吾さんがデッカイボンデンを立てて、おがんだ。(光明塚のいろいろの崇りについては妖異の項にかく)(八崎)カカン山 昔、坊さんが穴の中に入って青竹を地上に出して、念仏を唱えていた。鐘をたたいて、音のするうちは上から水などを入れてやったという伝説がある。(小室)

大蛇久保 昔、大蛇が今の田中磯五郎氏(専一郎氏)の蔵から抜け出して行ったので、こんな名が起きたという。その時利根川の向うに尾の先がいった所が大崎(渋川市)だという。(八崎)

姥子坂 昔々、おかあさん思いの子供があったとき。昔はおばあさんになると赤城山へ連れて行かれ、六道という辻の所を通過って姥子坂へはいると、そこに昔から建ててあるショウヅカノオバアサン・オジイサン

の前で子供と一緒に「親自在菩薩、行深船若波羅蜜多時、照見五蘊皆空の度一切苦厄、舍利子……」とお経をあげて姥子坂を登り、「雨無延命地蔵尊、証大菩薩成仏道、ソワカ」と云って、そこでおばあさんと子供は別れて帰るのだが、この子はどうしてもおばあさんを捨てて行くことができず、暗くなってきたからおばあさんを背負ってまた家へ戻って来て、裏の室穴の中に入れて毎日食べ物をやってかくして置いた。

すると、ある時、大名様から「灰で糞をなつて出せ」とのお布令が来た。子供はどうしたら灰で糞がなえるかと、灰をこねてやってみたができない。そこで穴の側に行つておばあさんに聞いてみた。おばあさんは「それはできないことだが、たらいの内側へ壁土をぬつてその中で糞を一房燃やして風に当てないようにしてそのまま大名様の所へ持つて行つて貰う」と教えた。

むすこはそのとおりにして大名様に出した。大名様が感心してその子をお呼び出してはめたうえ、「どうしてこんなにできたか」とたまただしたので、年寄りに教わつたことを申し上げたら、「ああ、年寄りは大切なものだ。これからは年寄りを捨てることは止める。」とお布令を出し、それからは年寄りを捨てることなくたとき。(以上、小室 五島文六氏より)

三田イワケ 源頼光の四天王、渡辺綱が先祖。綱は大江山の鬼をつかまえてきたが、狸根の破風から逃げられた。頼光に面目ないというのでオコト八日(十二月八日)にメカイを立てない。メカイが、破風のクミ方に似ているから。(小室)

左京塚 上田の萩原家の先祖左京という人が、前の田を五反ぐらい開いたので、左京塚という。(小室)

ボンデン田 堀入れの最後の所に大きなキリハギを埋けたものといひコサ(木影)のない水の便のいい田で、どここの村にもある。この田を作ると災難があるといひて嫌われた。馬が足を折るとか、病人ができたとかといひて軋々と持ち主がかわつた。現在は作っているが、別に何も

変りごとはない。(小室)

馬落ち場 その前を馬に乗つて通ると、必ず馬落ちになる所がある。

(下雨室)

ヒノエ畑 アサが原にあって思まれる。作る人にはいいことがないの一時作り手がなくなつた。(小室)

カミソリクボ 赤城南中のそばにあって、通る人がよく化かされる。夜通るときれいな娘がいてぐるぐる歩き回され、家に帰つてみると頭をすられた。(小室)

火の五 道祖神からの帰り途、山のそばで火の玉がばあつと明るくなつて消えた。(小室)

五輪棟 西洲のあたりに五輪棟という上杉憲影の墓があり、立派な方であつたので身分の低い百姓が馬に乗つたままその近くを通ると必らず落馬するといわれていた。(真壁)

こうがいやしき 上杉憲影の奥方が越後に帰る時、こうがいのある家敷に捨て行つた。

その家敷に住む人は百姓では位がよすぎて成功しないといわれている。(真壁)

ミタラセ 神明宮のところを旧沼田通りで山口の方へ少し下つたところの杉山の中に、一年中きれいな清水が出ていて、これをミタラセとよんでいる。年老りがこの水を死水にのんで死にたいといひていた。

(上箱田)

寺の跡 公民館のところはもとはお寺で、常楽寺という寺跡だといひう。経文を書いた石を納めて埋めた石が出た。坊さんの墓のカブ石が、七本ぐらいあつたが、今は隅の方に埋めてある。

お寺のあとへは、村で舞台をたてたので、それから後はこの地を舞台といひう。(上箱田)

せ二ガミ 昔は石塚があつたところで、畑になり、放つといひ山になり、更に開こんして今は畑になつてゐる。



神明宮東方の森 この中にミタラセの清水が湧いている
(撮影 阪本英一)



すずり石 親鸞和尚の伝説をもつ
(撮影 阪本英一)

りを眺めながら、はるか下の方に利根川の流れが岩をかんで流れるのを

たたる屋敷石 昔、北

条早雲が上杉氏を征めた時亡くなった人を埋けり、更に開こうして今は畑になつてゐる。

中江戸 上の原の前の

方で昔は郷倉があつて、大きなくんで大変な米が積まれたという。屋敷前というところがある。郷倉はこわされたが、マツモリさんの家の蔵がそれだという。(上箱田)

すずり石 山口から登つて来る道の松林の中にある独立した巨石のこと

をすずり石という。

昔、えら

い坊さんが

ここを通り

がかってこ

の石のこ

ろで休んだ

そです。

そこであた

見て一首うかんだのを字に書こうとしたところが水がなくて墨がすれず

困つたが、巨石の上の方、岩のくぼみにわずかにたまつた水を使って墨をすり、ようやく用がたせたという。このえらい坊さんとは、道後の国から常陸の国へと念仏の信仰をひろめようとして赤城山の麓に道をとつた親鸞聖人、のちの見真大師だつたといふ。

この伝説により赤城の七名石の一つになつたすずり石には、戦争前まで前橋の方の信者たちが大ぜいのぼつて来てはお参りしていたというのが最近では来る人もなくなつた。(上箱田)

硯石 日蓮様が字を書こうと思つたが、水はなし、弱つた。石の上に水があるので、それを硯にした。日蓮宗の衆が、埼玉県大里郡の方から一昨年も尋ねて来た。この硯石の水で目を洗うと、目がなおる。(上箱田)

ジャヌケ 虎持地内にジャヌケというところがある。大水の出た時に蛇が暴れて、ぬけたんだという。虎持へ行くと、大きな蛇がいるぞといわれた。(上箱田)

オハンギョウ 八崎角各戸にある地名。高札を立てた場所とも、板木をたたいて人よせをした場所とも云う。名主の権太夫(関口氏)人寄せした所ともいう。

立石(タツイシ) 街の十字路に石が立っているのさう。道祖神や庚申の碑が立っている。(八崎、谷津角各戸)

カジャクボ 昔、鍛冶屋がいたところといわれ、金タソが出る。今人家はないが、南西向の日当りのいい所で清水が出る。

筒場島(トウバ島) 利根川の鳥魚をとるド(致)をかけた処といふ。

鬼ヶ島 鬼石という鬼に似た石がある。今は桃太郎橋などもできた。押出山 山が突き出ている。

琵琶川

三五山、これらは地名の原因がわからない。(分郷八崎)

左京山

馬落(地名) 古い観音石像があり、そこを馬に乗って通ると落ちたので、石宮の中に封じこめた。それから馬から落ちなくなった。

(下南室)

川通し 昔の書きものを見ると、川通し上箱田村と書いてある。北橋は大がけというが、谷向うの富士見村の山口はちがう。(上箱田)

トウハチトウゲ トウハチという人の持った田へ行く寒い風の吹く小さな上り下り。

薬師坂 観音様の背戸、薬師様があったのだろう。

ガニ松 横道いになる。いくら植ても横道になる松。

尼が遣 鬼ヶ島橋の手前。桃太郎橋の南に滝があった。その滝を云った。

ソウメン滝 西曲輪の末端、栗崎川が城へ来る分れの所にあった。

薬師様の池(今はない) 目薬になると遠くから目のわるい人が水もらいに来た。近くに肥のさげをおいたらその後却って目がわるくなった。

鏡かくし田 百八枚あって、数えたら百七枚しかなかったので不思議に思ったら、鏡の下に一枚かくれていた。

お城の穴 これは今もある。誰も入った人がない。入口は一尺七八寸位あいている。

海老島 昔分郷八崎の青年が桑原を(三四反、地番で三つ位)作った。海老の形をしていた。

オカメ石 横町から延明寺の河原へ下りてゆくところにある石。

(分郷八崎)

(2) 先祖伝説

先祖伝説と禁忌 町田四三郎氏の先祖は、代々名主の家で、最近までキユウリ、トウモロコシをつくらなかった。伝染病が流行するからという。

もとは木曾義仲の四天王の一人楠六郎の子孫で、沼田の町田に土着するようになってから町田姓をのるようになった。この村の楠も町田ももとは同族であったという。現在町田姓約五十戸で家紋九曜の星、楠姓は約二十戸、これも九曜の星の家紋にしている。先祖祭りには別々で楯は二組、町田は何組にも分かれている。(上南室)

高橋氏 一族で四月十五日に聖観音をまつり、秋の彼岸の中日には念

仏供養をしている。また、古峯神社を三月十五日にまつる。また秋は九月一日にまつる。春のときはモチ米を出しあってモチをつき、ノシモチにして子供にくれた。先祖は藤原系と伝え、紋章は丸に笹陣笠を表紋とし、梅鉢を表紋としていて、約三十軒もあり、共有の山三畝、畑一反八畝ほどあり、その収入は祭りなどの費用にあてている。キユウリが禁忌で、畑に生えたのをおいても病人が出たことがある。(下南室)

斎藤氏と狩野氏 狩野一家と馬頭観音を春秋彼岸にまつる。十二棟も斎藤氏と斎藤氏十二軒、狩野氏四軒。斎藤氏は表紋三ツ柏、裏紋丸につる松。(下南室)

下田氏 二十八軒あり、楠木正成の家来であったと伝え、春秋二回に集って念仏をする。登坂も同族であったという。十月八日に薬師様をまつり、十日の日に薬師勘定といって勘定をする。紋章は表紋は丸に井桁に一本棒、裏紋はタチオモダカ、元禄十二年の十二様の石宮もまつっている。富士見の小沢、石井、時沢、持柏木、横室などの下田氏や、群馬郡箕郷町の下田も同族であったといわれ、七下田と称している。(下南室)

諸田氏 十八軒あり、九月の十五夜に一族で八幡様の石宮をまつる。旗をあげ、赤飯をふかした。目の悪いのによいという。また、阿弥陀様

の木像を出して春秋彼岸に先祖祭りをする。もとはお堂があったが、今は世話人の家で持廻りをして保管し、五目飯をつくってあげる。先祖は中箱田の根井氏と関係あり、木曾義仲の家来と伝えている。表紋は九に花木瓜。裏紋はダキオモダカを用いている。

金子姓も二軒あり、もとは同族、兵隊のがれで金子氏をついだため。禁忌作物は唐もろこし。(下雨室)

禁忌 萩原氏二軒ではトウモロコシを作ってはいけない。戦後、分家で作つたらよくないことがあったので、よして今でも作らない。(小室) マイ玉を作ってはいけない家がある。二月初午になると作つてもよい。(下雨室)

寿命の餅由来 昔一人のこじきがあつて、村の神社の縁の下に寝ていると、夜中に何か話しあう声がある。耳をそばたてると、一人が「今夜たれその家に子供が生まれた。その子供に十五歳まで寿命をくれてきた。」という。翌朝こじきは、村のたれその家に行つてみると、果して子供が生まれていたので、右の話をした。

子供の父母は、その子の十五歳までの命を大事にかわいがつて育てた。その子は、ふだんより川遊びがすきであつた。また餅を好んで食べた。いよいよ十五歳の十二月一日が来たので、餅をついて背負わせて川へ遊びにやつた。その子は、途中で坊さんに会つた。坊さんは、その子の持つていた餅をほしがるので、その子は、背負つたのをみんなおろして坊さんにみんな与えてしまった。すると坊さんは、「感心な子供だ。お前の命はもうないはずだが、もつと寿命をのぼしてやろう。」といつた。

十二月一日の川浸り餅のことを、別に寿命の餅というのは、こうして始まつたのである。(昭和二十一年、七十三才で死去した父よりの聞き書き、都丸)

三 怪 異

愛宕山十輪寺の天狗 昔寺で毎晩のように村人が集まつて、賭ごとが行われていた。その当時は寺のまわりには大木で昼でも暗いようであつたが、ある雨上りの晩いつものように丁半をしているとローソクの火が風もないのに細くなり消えかかつたと思つた瞬間、手前にあつた銭が天井に吸い上げられたので取返えそうとしている時に大木がごお音と共に倒れた。

これは天狗の仕業だと皆恐しがつて寺から出ることも出来ずじふるえていたが、一人が小便をもよおし思案のすえ戸の節穴から出ることにになり用は済ませたが、あとがぬけず、さわぎとなり、これも天狗の仕業と困りはてている中に東の空がいく分白くなつた頃ようやくやくぬけた。

その後しばらくしておそるおそる外へ出て見ると大木は少しも変わったところはなかつた。

その後はあまり賭けごとはしなかつたとか。(真壁)

天狗になつた男 ある雨の晩部落の男が、小室村の信者のところに用事で行き、ずぶぬれになつて帰つて来るなり、家の仏壇を乱しはじめ、位はいを投げるやら、割るやらするので近所の人をたのんで来て静めてもらおうとしたが少しも聞かず、ますますあばれ、ついに外へ飛び出しました。それを逃がすまいと追いかけたところ屋根のぐしに飛び上つたり、三間も高い木の枝に飛びついたりするのでつかまらず、思案のすえ三原田の幸善寺に行き坊主のけさを借りて来てかぶせてみたが少しの効きめもなかつた。よくその動きを見ると天狗に似ていることがわかり、天狗様だから真壁の先達ならばよいだろうと頼んだところ、次第に治り、その後は普通と少しも変らない人となりよく働いたとか。

(真壁)

オトーカ 朝草刈に馬に乗つて登つて行くときよく飛び出し、馬が驚いて走り出し、落馬(ウマタダリ)した。馬は人をふまないといわれてい

た。城山はオトーカの巣であった。よく化かされてその山を一晚中歩いたとの話がある。下箱田の今井幸平さんは取るのが上手でエゴの三又のある枝を穴の中に入れサグリコミをして、手ごたえがあったら、その木をねじって引き出すとそれにかままって取れた。(真壁)

狐に化された話 日露戦



古石(下真壁) 石に入った狐の伝説がある。古い稲荷は一時村社に合併し戦後又新設された。(撮影 今井善一郎)

争当時、出征兵士が無事に帰れるようにと村内の神社全部に、ウシの刻に拝み廻った。小室の赤城様を拜んでいるうちに、尻が持上って頭を畳につけるようになった。驚いて暫く下つてくると小室と真壁の境まできて漸く立止って、「おっかなかつたな」と狐にだまかされたこともあった。どうも不思議な事もあるものである。(中真壁)

三、村の出来事

村の喧嘩 昔は村と村の喧嘩があり、八崎、分郷はよく真壁と喧嘩した。最後の時は中沢先生という学校の先生が仲直りさせた。

御興あれ 加藤佐平さんの婿が医者で村の附合が悪く天王様をかつぎこまれた事がある。(分郷八崎)

万長大事 明治二十五年に万長さまという家が火元で元宿から大宮へ

火がうつり大火になった事がある。島村万五郎という人の家で、畑が沢山あるよい身代であった。この人の子が五藤太という名であった。或時「粟穂五藤もってこい」とどなっているのを他所の人が聞いて、粟穂を五年もつかうとはえらい大尽だと驚いたという。火事の原因は不明であった。元宿で数軒やけた。丸屋は残った。火はとんで赤城神社が燃えた。神社には杉の大木があってこの時燃えて枯れた。この木で今の神社が建った。お寺も火がとんだが小室の籠屋の清次さんという人(藤井宣次郎氏の父)が一人で消した。この人は高い処が強く、細引一本もってとんで行って、又玄寺の屋根に上り、火の子を一人で叩き消して、倒頭寺をもさなかつた。

お寺はその前に餅屋の火事というのがあり、その時燃えた。(この時期は田中喜義氏方文久三年生のおばあさんが十九才の時再建の建前をしたという)建前に清六様が七升の餅、餅屋が五升、上野屋が三升の供へ餅を上げたという。お寺の天井の絵は田中武七が画いた。清六様は田中清六、餅屋は田中乗右衛門、上野屋は狩野伝右衛門の家である。(八崎)

今天狗 白髪の小さいじいであつた。易をよくした。ソロバンで易をやつた。小さい時から利口でおかしなことばかりいう。親が雙玄寺にあづけた。ところが、朝二時頃拍子木の音がするといふ。和尚は、「その音が聞えるんでは、おれがにや使いきれない」といった。その後、どこかに行つて、帰ってきてから易をした。今天狗のおかみさんは劍の達人であつた。若い頃、肩がこつてこまるので、今天狗に両肩を切つてもらふ呪いをしてもらつたことがある。

自分(話者)の親父が、ある時山にボヤつけに行つた。ボヤの東をつんで、左右両端を結わえて背負うのであるが、片方を猿むすび(普通のことではとけない結び方)にして、もう一方をつけようとすると、もうはずれてしまつている。いくらやつてもつかないので、ブツブツいいな

がら帰ってしまった。後で今天狗がやってきて、「ニシヤ（お前は）ナ
ンダンベア（どうしたことか）チンバラカワカシテ（腹を立てて）、ツ
ケネエデキタンベア。オレガ、キサマノコンジエウラタメソウトシテ、
ヤツタンダ。コンダア（今度は）ツクダンベエカラヤツテミロ」といっ
た。そのとうりであった。（分郷八崎）

小室の人、都丸和九氏の義父、都丸今造氏。何でも知っていた。又何
でも見てくれた。一つの逸話。小室の某氏が馬のバンソウ（売買の仲
介）をしたがなかなか話が成立しない。買手に今天狗のところへ行っ
てみてもらえとすめておいて自分で先へ行つたのである。今天狗
は、買手が来た時売買の成立するようにうまい事云つてやった。こんな
工合に調子の上手な人であった。

えんばさん 一かたけに一升めしじや足らねえ、そばは三升食つて、
米俵をかついだ。十五俵ぼう積みにして、一番上のをかついだ。田の草
取りをしても、腰の痛いことをしらねえ。まむしにかまれたので、まむ
しを食つた。おたま（蝸牛）を食べた。（上箱田）

かせぎの平次 三反二畝の田圃を三日でうなつた。一升樽を、立ちっ
ばなして飲んで、まだせき（空席）があらいうと云つた。角平の石田
平次。（上箱田）

清六さまとスリ スリの名人が清六さまの金を盗んでやると決心した
が、清六さまは少しもすぎがなくてどうしてもとれない。スリは清六さ
まの家へ行って「わしはお前様の金をスロウとしてずい分苦労したがど
うしてもとれません。降参しました。お前様はどこへお金をおしまいで
すか」と白状した。清六さまは「おらが金は」と云つたがその時一寸庭
のツボ木の方を睨んでしまった。そしてその晩スリは清六様の庭へし
のびこんで庭木の根をほつて金の壺を盗んでいったという。（大蛇久保）
田中清六は幕末から明治初期に生きた豪商で、清六新道を利根川岸に
作り公益に尽したので有名である。

大食いの人 大尽の光平（田中四三氏方の雇人狩野光平という人）

は素木鉢のメンバに飯を二つ、ジリヤキを七つ位づつたべた。草刈の時
である。

この人鉄砲玉（黒砂糖で作ったあめ玉、大型であった）を五合（一立
弱）たべた。一日半位腹の中でザツクザツクと音がしていた。（八崎、
大蛇久保）

強力の人 片貝三吉氏、四十貫位のを差上た。

ホラシメさん 手拭を四つにお早かつ切つた。

早い人 狩野伝四郎氏、歩くのが早かつた。おだてると早くなる。か
かどが地につかなくつた。（八崎、北町、上宿）

伝久様 狩野伝久は豪農伝右衛門の息であったが、父は村役人などつ
とめた家柄の人であったが、伝久様は役人になる事が嫌いで、簀、笠を
着て一年中酒びたりになってふらふらして居り、酔つて浜川から人力な
どにのつて帰つて来たなりなどして居た。農業其の他仕事は何もしなかつ
た。家がいたんでも修繕はしないので漏ると家の中をあちこちと逃げま
わつて居た。杉山のいいのを持って居り、米を売つて酒にしていた。又
杉道を自分で割つて居た。剣道はして居たと見えて、ずい分酔つて居
ても道で馬など来てるとひとりと体をかわしたりなどした。蛇をつか
まえて壺に入れて遊んで居た。畑など荒れて畑昔よもぎが繁茂した。時
人はこの草を呼んで伝久草といつた。大正の始め迄生きて死んだ。

狩野伝右衛門が前橋候に許されて開拓した利根川原の開田は伝久様の
家の大きな財産であったが、利根の洪水の為に大半流され、あとは竹箴
となり、伝久様はその痛手の為にこの様な行跡をしたとも云われている。
しかし、関東水電の発電所ができる、この川原も買上られて伝久様は
ずい分先祖の利徳に浴したわけである。（八崎、北町）

強力の人 話 ガトウという人がいた。今の田中又二氏の屋敷の西に
銀造屋敷というのがあったそうだが、その人で、ガトウといふのはガ
ムシヤとか無暗とかいう意味である。溝呂木の太辰に奉公し旦那が草
刈の時、土用の草は石地蔵もくさるといふのでいいのだからせつと刈れ

と云った。そしたら本当に六地藏を一つ馬につけて来た。そして旦那がくさるといったからくさるだんべと云ったという。因業で旦那も使いづらかった。旦那がどうだ俺は湯へ行くべえと思うが駕籠かついで行ってくんねえかといったら、片方へ旦那を片方へ石を下げてかついで行き利根川の橋の上で川の上へ旦那の方を出して休んだ。ヤッコキエモンという名であった。

この善右衛門は田圃が所の面というところであり、その田をうらないながら今日は何でもこい、天狗でも来いとうなったら、大きな松の木があって天狗の子供が人間の子供にばけて出て来て角力とるべえと云うのでとつたら、そのヒョウナツ子が負け相になった。松の木にいた親天狗が怒って負るなしっかりしろとかけ声かけたらその子供が急に強くなってガトウはかつて投げ殺されてしまったという。(八崎)

實在の強力の人 八崎で力の強かったのは田中清作氏、上小室の観音様の力石四十貫位をかついだ。堀口七五三氏も強かった。赤城神社の社務所の所で二人でかついだ石は延命寺の河原から八人であつぎ上たのを二人であつた。かついだのはかついだが、どちらか先ともなくつぶれてしまった。七五三氏はレールなどもかついだ。

絵の上手な人 絵画きではなかつたが竹の原の武さん(田中武七)という人は絵が非常に上手であり、又手先が器用であつた。木で蛙をほつたら跳び出したなどいう。八崎又寺の天井の絵、薬師堂の天井の絵などもこの人が描いた。昔は祇園に組々で屋台を出したが道がわるいのでかつぎ屋台であつた。その飾り物の鷹の羽を刀で作った。そんな事を考えた人である。今でも大黒様とか淡島様の絵などが残っている。

武さんは余り絵が上手なのでニセ札を作った。それは印刷ではなく手描きであつたという。鍵竹の中へその札を作る道具をかくしておいたところ内儀さんが他人にその事を喋ってしまったので武さんは縛られて連れて行かれてしまった。その差入れの食物は長持に一杯入っていた絵紙を売ってみついだという。

中子の稲荷 この人は稲荷様をおがんで病人などを癒してくれた。虫クマさん 為谷熊五郎氏、虫歯などを拜んでなおしてくれた。算盤をやつた。シャクが起つたといつて押んでもらうと、何処其処の水をのめなど云つた。この人は本人が腹いたになつた事もあるという。(分郷八崎)

下南室の斎藤甚四郎という人が、赤城山にいったところ、松の太木が倒れていると思つたのが大蛇であつたという。家へ帰ってきて病氣になり間もなく死んだ。一昨年貯水池の下に大蛇が出るというので大騒ぎをしたことがある。村に蛇とりの名人がいたが、この人は赤城山にゆき穴を掘つておいて髪の毛をやって捕えた。髪の毛をやすと、蛇がその匂いのかいで八方から集まってくるという。またハギの枝を削つてつくれたもので蛇を刺すとよくとれる。(下南室)

蛇に化けた妻 真壁で夫婦喧嘩をしたあと、妻の方が「蛇になって化けて出てやる」といつていたが、間もなく死んだあとのアラ盆の日に、大きな青大將がちゃんと盆棚に現われた。つかまえて貯水池(関水)に放り込んだが二度三度まで出てきて困つたことがある。のこつた嫁さんも翌年死んだ。(下南室)

神かくし むかし下南室に影絵(幻燈のようなもの)があつて、出しものに「葛の葉の子別れ」をやつたことがある。この日女の子を連れ来たふた親が、マンジュウを買つていううちに、子供がいなくなり、二、三日見つからないことがあつた。溝呂木の木暮松三郎さんが見つけて連れ戻したことがあつたが、みんな神かくしにあつたといつたものである。(下南室)

四、雷のこと

雷の話 新井平三郎先生という医者がいたが、この先生が往診で患者の家へゆく途中、あんまりゴロゴロと雷が鳴るので何とかおだやかにな

るまで休ましてもらおうとして近くの家へ寄ったところ、寄った家へ雷が落ちて先生は死んじやった。

それだけではなくこの先生のお墓ができたところ、お墓にも雷が落ちた。(上箱田)

オカランダチ 夕立のことをオカランダチともいう。今でもそういうのが、年老りでも女の人の方がそういう。

雷様をみた話 村の人だが、ある夏の夕立の激しい日のこと、雷さまが家の中へ落ちて、一尺はなかったがなからの火の玉が家の中をころがりまわったという。あれが雷さまだといわれた。(上箱田)

水沢の三東雨 水沢の夕立は早いから出たなと思うと、麦を三東まるかないうちに来るぐら早い。

赤城のカラ鳴り 水沢の夕立は赤城より早い。赤城の雷はカラ鳴りであんまり降らない。

子持の夕立 子持の夕立はおつかねえ。大雨で大あばれをする。ひょうもここがちょうど通り道になっているらしくて多い。(上箱田)

雷よけ 家の中に麻カヤをつつておく。

お正月のとき、お勝手の釜神さまに上げたお松をとってしまっておいて、雷がさかんに鳴っているときにお松に火をつけて庭に放り出すと、雷さまがよけて通ってくれる、というので大正ころまでよくやったのをみた。

小室の拝みやに拜んでもらったが今はやらない。(上箱田)

麻敷帳に入る。お勝手の釜神様のお松に火をつけて放り出す。

電除け まないたを庖丁で叩く。(上箱田)

雷の降ったとき、まないたとほうちょうを持ち出して、庭へ出て、ほうちょうでまないたを叩いた。まじないことばがあったと思うが忘れてしまっと思ひ出せない。(上箱田)

雷さま 萩原保寿という人のことだが、野良へ行ってあんまりライサマが鳴るので、てんがとかまをもつて歩いてははおつかねえという

ので、家へ来て、イルリのところへ入って火を燃していたとかしていたら、カビ竹を伝って雷が落ちて来てその人に伝ったのだという。家の人たちが、すぐセフロへ入れるというのでセフロに入れたが間に合わずにダメになったという。(上箱田)

近頃の雷は行作が悪く、夜中に来たり朝来る。朝鳴っても夕立という。

赤城の雷は大きい。機名のしもから「小幡の三東雨」がくるが、これはとても速い。「妙義の三東雨」もくる。(下真壁)

雷のことを、ユウダチサマとか、カミナリサマといった。現在では、ライとかカミナリという。子供はゴゴロサマという。

この辺では、ひつじさる(西南)といぬい(西北)から来るカミナリは大きいという。この二つの方向からくるカミナリが合さると大きい。

カミナリの七、八割は機名の方向からくる。「水沢の三東雨」ということばがある。これは、機名の水沢山からくるカミナリは、麦を三東まるくうちにやってくるということ。

カミナリが鳴っているときには、「クワバラ、クワバラ」と唱えことをする。また、年とりの豆を初雷のときに食べるとおちないという。雷火事(落雷による火事)のときにはききたいもの(汚水)をぶっかければ消えるという。

初雷のときには、正月の松(かまかみさまの松だけは、おかざりをひくときにもひかずにかざっておく)に火をつけて雨の中にほうり出すとよいという。

田に落雷があったときには、なにもしていない。

土用に一週間カミナリが続けば、俵を編んでまわっているという。これは米がはずれることのないことをいう。ふつう、カミナリの多い年は豊作だといっている。

稲妻のことをイナビカリという。

雨の降らないときに鳴るのをカラナリという。

梅雨のときにカミナリが鳴ると、梅雨があけるといふ。
カミナリサマは、七つの太鼓をもって、それが色分けしてあるといふ。それで、大きい音を出したり、小さい音を出したりするのだということである。

カミナリサマをまつた神社は雷電神社。(上小室)

榛名山の雷は大きい。「船尾の三東雨」といって、船尾の滝の処まで雨が降つてくると、麦三東まるく間に雨が降ってくる。西からくる雷が多い。赤城山の雷は回数はいらないが、大きいのがくる。雨が多い。南からはほとんど来ない。(小室)
としとりの豆 としとりの豆は茶袋などに入れて神だなへつるしてとつておいて、雷の鳴るときに子どもにくれるもので、早く喰えといわれたものだ。(上箱田)

五、命 名

同一の文字を使う家 為谷茂平さんの家は子供に平の字をつけた。上から藤平、九平、八平、七平。(分郷八崎)

アダ名

①トトジイ これは鳥金さんという人、魚と鳥を商う老人についたあだ名である。

②差別のためのアダ名 平さんという人が四人いた為、区別の必要上村ではアダ名でよんだ。

スシ平 (寿司屋の平さん)

城平 (城に住む平さん)

横平 (横町に住む平さん)

長平 (背の高い平さん)

(分郷八崎)

弁慶 内弁慶のこと。家の中で威はって外へ出るといくじなしの子にいう。また、「名なしの弁慶」といって名のらない時にいう。

(小室)

和尚 人のいう通りになることを、「いうなり和尚」という。(小室)

名づけ 子供の命名がすまないうちに滄震があるとその子は育たないといわれる、命名のときは三つから五つぐらいの名を用意し神さまに決めてもらうといつて一つにしぼる。子供に「わぐり」という名をつけるのとあつた男の子が生まれる。「綱」の字をつけるのと丈夫に育つというので馬の綱の底をぐぐらせたりする。三十三歳の厄年のときの子は一人んじに捨てる真似をして他人に捨つてもらふといふ。これは、一人んじに捨つてその子は丈夫になると信じているからである。女の子でも男の名前をつけるのとよく育つといふので実際につけた。例えば女の子で高橋千三郎、下田光五郎などがそれである。(下雨室)
特別の文字をつける習慣のある家がある。須田氏に茂の字をつける家がある。(八崎、舟戸)
その他 頭の足らないものごとを、天保だ、八厘だといふ。かかあ天下の旦那のことを、べべずきんをかぶっているとか、かかあ のしたじきになっているといふ。(上小室)

六、方 言

テンデン めいめい、各々

チンゲ 後頭部

ショツベナシ 一風変わり者

フルカネヤ 古物屋

ムテッコオジ 強引な

オハツ 初もの

ライサマ 雷さま
 ペロペロ ごへいそく
 イルリ いろり
 テネゲエ てぬぐい
 ヤケツツリ やけど
 セキンソウ げんのしょうこ
 チョッパン 俵のさん
 ネズツケエシ ねずみのふん
 新ヅエ 新しい枝
 マ あんがい
 コンヤクダマ こんにやくの玉
 メケエゴ 竹の小さいかご
 ドジ 地面
 トロイモ やまいも
 タカンボウ 竹づつ
 ヘ シ やたら
 ムタジリコム 中へ入りこむ
 カリッパライ 借りたまま返さない
 タダイモ さとも
 スサマジイオタレル 大変おくれる
 トクセエ いっぱい、十分に
 ガ ワ 外側、まわり
 ウツチャツトク 放っておく
 クライヌケ 大食漢
 チョチョコナル かがみこむ
 スグジ 小路
 ショテ 最初
 アンジャカブ 兄貴分

カゲヅナ 黒幕
 ジンジク ふさわしい
 イブサクネエ 危なくない
 オダム おちついてくる
 トウテキ 命中、いっぺんにという意？

(上箱田)

北橋村の民家

始めに

矢島 胖

北橋村教委の田中教育長さんはじめ、今井善一郎氏・都九十九一氏などの御芳情によってお膳立てをすっかり整えて頂いた。また小学校の塩谷博先生に車でご案内をして下さった。こんなにして頂いたのに不十分な結果に終ってほんとに申し訳なく思う。

見せて頂いたのは（順序不同）

- 1 上南室 桶豊次家
- 2 同 所 町田照親家
- 3 下南室 諸田泰三家
- 4 下小室 萩原友次郎家
- 5 分郷八崎 為谷正三家
- 6 上箱田 森田彦太郎家
- 7 同 所 森田半三郎家
- 8 箱田 根井吉春家
- 9 同 所 今井一家
- 10 同 所 今井貞雄家
- 11 同 所 萩原文雄家
- 12 真壁 串淵弥家
- 13 真壁 木暮恒次郎家
- 14 同 所 奈良佐五平家

以上の十四家であった。蚤の殿中で忙しいなかをお邪魔したのに、どちらの家も気持よく調査させて頂き、ありがたいことであった。近頃前橋市内の民家を多少調査して気付いたのは、小屋組構造が地域によって幾分ちがっていることである。地域的な慣行のためか、江戸時代知行者のちがいが、従って継行する人々の出自などの相違から架構の様式にも差異を来すのか、あるいは、年代の遠近からくる技術の進歩によるものか、また、その一つだけの因由のみでなく二因三因の合成によるのかなど解決できぬままの疑点をかかえていたので、前橋市地域に近接する北橋村地域がどのような位相にあるかに、ひそかな興味を持っていた。

小屋組の傾向の一つは、小屋内部に柱、束を全然立てないもの、小屋組内部に多くの柱―通し柱の他、菅柱つまり梁上に柱を立て束を立てたものが地域別に見られるのである。

疑問とすること自体が広域に亘って存するか否かをまだつきとめていないので問題形成が怪しいのでもあるが利根川を境にして東部のうち、南方地区、旧上川淵、下川淵、上陽地区では前者―小屋組内に柱、束を立てないのがあり、西部では柱を立てている。また東部でも旧南橋では柱を立てている。その他に例外はもちろんあるが、そんな傾向が見られる。北橋村でもこの点例外があるが柱、束が見られたので、利根川境界の点は私の錯視に終りそうになった。この点を散見し得たことは今回の収穫であった。

平面図は実測数値をもとにせず、(実は実測の時間がなかった)柱と建具数で概略の位置を定めた。それで、図面の作製に当って細部に歪曲

の止むなきに終った箇所もある。一ばん苦になったのはダイコク柱列の柱位置であるが建具巾の広狭によって位置を仮りに定めた場合もあり、建物側面や背面もそれがある。トコ、タナの奥行も目測だけに終ったものもある。それにホンマ(本間、京間)の家が多くあり、内法にしても同一建物中でも区々であったりでなやまされた。

オシイタ(押板)といつてよいと思われるものを二例あげた。為谷家のヨジョウ(四帖)と、萩原文雄家のオトリである。絵巻にオシイタが見えるのは室町時代の寺院である。これと同巧異曲ともいうべきは、渋川市入沢柳太郎家のそれである。同家は天正年間前に遠祖新八郎が信州から移居して建てたと伝承する。その伊香保道に面する八幡宮(県指定)の宮と同木材で建てた(宮は慶長中といわれる)と称する門を遺している。母家もその頃かも知れない。そのオシイタである。オシイタは書院造や数寄屋造り、寺院や富商の客間などに伝播していつか村役などの民家にも及んだ。トコノマ、チガイダナ、ランマ、ナゲシ、ジョインなどがそれである。為谷、萩原一家のトコはオシイタからトコに進む頃の形を示している。類例の少い遺構である。

マドリはタイチガイマドリで、「田」字形マドリが少い。キリオトシ屋根が多い。イロリがとても多い。ダイトコロのヨリツキが広がっていい。

マドリの現状

調査ができた十四軒のうち、四室マドリは、上南室種豊次家、下南室萩原友次郎家、上箱田森田彦太郎家、同森田半三郎家、箱田根井春家、同萩原文雄家、同串淵弥家、同奈良佐五平家、同木暮恒次郎家、九家。六室マドリは下南室諸田泰三、分郷八崎為谷三三、上南室町田照親家、箱田今井一家、同今井貞雄家の五家であった。

また以上の十四家のうち、ダイドコロマドリが入口の左にある右ズマイ

の家は種豊次家、諸田泰三、萩原友次郎家、木暮恒次郎家の四家である。その他は右ドマ左ズマイであった。

マドリかたで整形「田」字型は少く、町田照親家、森田半三郎家、今井貞雄家、奈良佐五平家、木暮恒次郎家の五家を数えるにすぎなかった。他はザシキ(チャノマの呼び名の一)とその後ろがわのヘヤ(またサンジョウ、ヨジョウなど)境シキリとデエ、オトリの境シキリが田字形にならずに前後にタイガイのあるタイガイマドリであった。この場合ザシキが広がってヘヤを押しつめた形、今井一家のようにぎりぎりにつめて、三室と見られるほどになったものもあり、他の室に比べて広い型のマジキリなのでヒロマ型の呼び名でも呼ばれる。赤城山麓を南側にゆき、田桂堂、木瀬、下川淵、上川淵に下るとヒロマ型は非常に少なくなつて「田」字型マドリが多くなる。そして北上し利根郡方面に近づくと従つてわがタイチガイマドリが北橋村より比率が高くなる。

群馬県は関東平坦部の「田」字型マドリと新潟福島県以北のヒロマ型マドリの二つの地帯にはさまれた接触帯を形造る。

新しいズマイはこの慣習を変容させて来ているが、まだ徐々の威を出ない。(平面図2/16参照)

室の呼び名

室の呼び方は急速に消えて行くように思われる。また知つていても、何とはなしにひなびた呼び名のように思うのか客えに躊躇する。

参考図として表1に室の配置を一定に符号で表わしてみた。A・a室はイロリ、ダイコク柱、ヨリツキ(アガリハナ)ダイドコロに接した常居の場、日常住いの中心、B・bは常居に比べるとあらまつた場として、来客を請じ、重要な家庭行事を行う場として、(これも若い人の室や子どもの室に変容して来たが)、B'・b'はA・aの場が接客などのためにB・bにふくれて行く過渡的な室、後には家の格を示すために、ま

た養蚕などの稼業の必要からB・bの他にB'・b'室を作った。それが六室マドリであり、こんどの調査では見当らなかつたが九室マドリであ

る。
次の表1はこの室に対する呼び名である。

表1 室の名称 広さ(数字は畳数)

氏名(階級称)	A (帖)	a (帖)	B' (帖)	b' (帖)	B (帖)	b (帖)
1 次 豊	マツキ 10	マシウ 4	—	—	マ 8	オカノロシマウ 6
2 町 田 照 三	マツキ 8	— (6)当	—	—	マ 8	オカシマウ 6
3 萩 原 友 次 郎	マツキ 12	マシウ 2室2.2	ナカノマ 6	名不詳(6)	マノマ 8	オカノリノマ 6
4 為 谷 正 三	マツキ 14	マ 6	—	—	マ 10	オカノリノマ 8
5 森 田 彦 次 郎	マツキ 10	マシウ 4帖	ナカノマ 5	不 詳2帖	マ 8	オカノリノマ 8
6 森 田 半 三 郎	マツキ 8	マシウ 4帖	—	—	マ 8	マシウ 4
7 森 根 吉 春	マツキ 12	マシウ 4帖	—	—	マ 8	マシウ 4
8 今 井 貞 一 郎	マツキ 12	マシウ 2帖	(ナカノマ) 10	(不 詳)	マ 8	マシウ 4
9 今 井 貞 一 郎	マツキ 12	マシウ 6帖	—	マ 6	マ 10	マシウ 4
10 今 井 貞 一 郎	マツキ 10	マシウ 3帖	—	—	マ 8	マシウ 4
11 萩 原 友 次 郎	マツキ 10	マシウ 4帖	—	—	マ 8	マシウ 4
12 萩 原 友 次 郎	(マツキ) 10	マシウ 6帖	—	—	マ 8	マシウ 4
13 萩 原 友 次 郎	マツキ 8	マシウ 6帖	—	—	マ 8	マシウ 4
14 佐 佐 平 良 一 郎	マツキ 8	マシウ 6帖	—	—	マ 8	マシウ 4

室の現状

マツキAは8帖が二例、10帖五例、12帖三例、14帖一例である。とこ
ろで量が普通の家のは一七五・七四センチ(58寸)×八七・八七センチ

(29寸)であるが、この地の場合一八一・八センチ(60寸)×九〇・九
センチ(30寸)があった。(この小篇では以下仮りに寸・尺で記述する。
メートル法のミリ以下の数字は事実として古い家作には極めて意味が少
いし、切捨以上の扱いによっては、事実が歪曲するので。)五八寸量
柱真六〇寸に合せたものでいわる柱割制である。これに対して六〇

寸疊を敷きならべるに都合のいいように柱を配置したものは京間に似たり方である。京間が柱真六五寸なのに、この地域は真真六二〜三寸である。この方法は柱の面から面を六〇寸に測るから柱巾の広さだけ木割制より広くなる。柱内法によるから内法制とも疊を基準にするから疊割りともいう。当初疊割りよつたのであろうが、疊シンや表てが六〇寸もの入手が関東地方では困難なためと、疊を10〜14帖と並べるとシキイざわに隙間ができるので、おいおい少くなるマドリといえよう。しかし現実には3寸4寸とすきまがあくので室の一边に板をはさむ。この例が多く見られた。

室の広さの問題からそれが、A・a部分の広さには関連が深い。aの（ハヤの二帖のもの（語田家は二帖が二室）、ヨジウという桶家にしてても六帖の広さの多くの他家でも、A室の広さに押しされて、後ろ壁面の柱の位置が一軒ごとくに区々としてゐる。現在は畳敷にしてあるのが普通であるが、板敷のままのものもあり、この方が建物当初の古さの原形を残したと見られる。壁つき柱が区々だとはいうもののハヤ・室の中間に柱を残した例も二三を散見する。もとの室の限界を示したが、その柱からの奥行がゲヤであるためか、その何れかであろう。桁行の梁の位置が多くはその真上に当る。

a部分の室には畳敷の名称が幾例もあり、他は名称が消えているようである。また室名が当初からなくてAaは実は二室でなくて一室である。そのためにAはチャノマと常居の意味を示す言葉で遣つたがaはAと一つのものだから室名が無いのが当然であつたのかもしれない。各家の図に当つてみるとそう思える。またそう思う方がいいようなのに気づく。Aaのマジキリは古い場合には無かつたのを後の改修によつたものまた経過年数の若い方は、当初からマジキリをつけたが、他の古い家の称呼慣習にならつて呼び名をつけなかつた。そんなふうに見える。室を呼ぶないのは不便だからニジウ、ヨジウ、ロクジウなどの疊を置いてからこのかたの名ができたのではないか。仏壇・神棚のおきかた

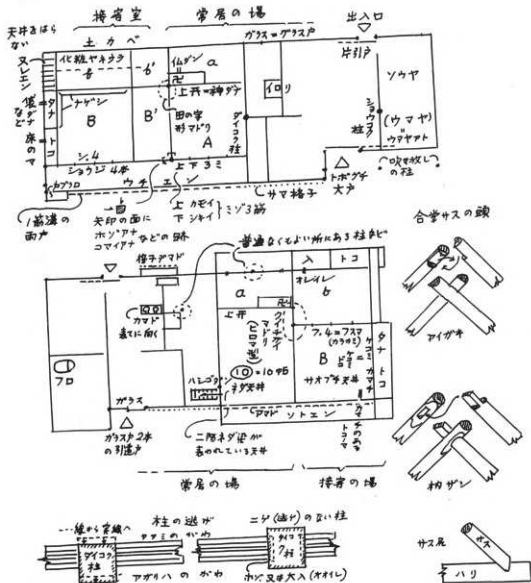
からも、なお考えてよいと思う。

Bb二室は室の分化からは後のものである。しかし本村で見たのはAa室ができ、その後Bb室を建て増したという痕跡がほとんどない。Aaが見える。住文化の点では古い形から既に一步進んだ形である。といつても古くないというのでは古い形が、さらに古い形より進歩した形なのである。それに資料を提供された各家とも村生活上の階層がほとんどそろつて高位に属した家々であつたようである。この点から、一段の進歩が村内で早期に行われたと見られる。ヤシキのようすや広さ、ヤシキの背後の太木など、それを物語る。

Bbの接客室部分が必要な度合が多いことが考えられる。B室がデエの名で言われることにも室の成立に常居だけですまされない接客要素が濃く、bの名もオトリ・オトリノマなどの名は、ヨリツキ、ハシジカ（端近）チャノマに対応して上座の響きがある。接客室の意味から、シイ（書院）作りの流れを汲んでトコノマ・トコワキ（フクロダナ・タナ）が附属するのが多い。タナはフクロダナでそれもテンブトロ（天袋）が普通に見られ、なかにはタナにフスマを入れてオシイレにしたものもあつた。それはフスマのシキイをみるとトコガマチ（床櫃）とほとんど同高にケコミ（蹴込）をつけたタナ板にシキイを入れていることである。トコ・タナがあるとかモイ上にナゲシをつけるようになる。江戸時代の「百姓」の家作は身分相応にとあつてトコ・タナ・ナゲシ・ランシは法度とされた。禁制の故かも知れないがB室のトコは一般に新らしい。家作当初でなくて後補によるからである。これに比べるとオタ・オトリ・オトリノマ・オトリノデエなどと呼ばれる。b室のトコ・タナの奥行が浅くて遠慮深く作られている。目立たぬような配慮と思われる。村役についたか、または禁制のかげにかくれて作られたか、禁制がなくなつた明治に入つてから作られた初期のものだからでもある。

Bb室で特異なのが二家にある。為谷正三家のBヨジウにあるトコは非常に浅いトコで10寸に充たない。オシイからトコノマに至る過渡

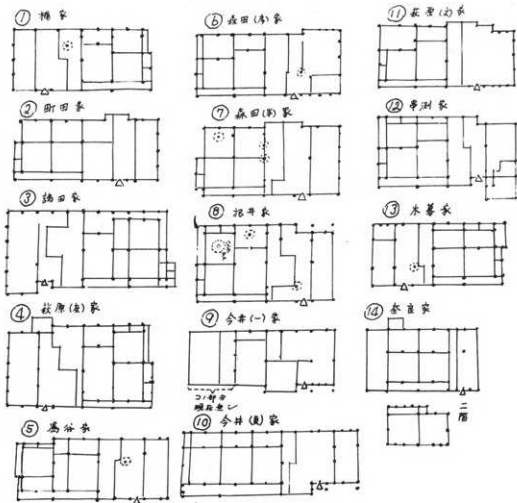
図1



的のものである。室町時代絵巻のなかの寺院に描かれるオシイタ、机よりの板に花瓶と香炉などを載せ壁ぎわに掛軸をかける。これがオシイタ初期で武家造・書院造に取り入れられ、トコ、タナ、シロインの形が成立して永年温存されるうちにいつか庶民の住居に入りこんだ。江戸時代農家では中頃より末で特殊の場合として見られた。トコの奥行きの高さも浅くて20〜25寸ほどのが多い。為谷家の10寸は異下では極めて特例に属する。なお一例は萩原文雄家のBオクリ8帖のトコであり、これも極めて浅ドコでありオシイタの部類である。為谷家に伝えるところでは淡川市に同じ作りの家があるとなつて、淡川市の入沢家を採訪して、ここでは天正十三年かの家作伝承とオシイタを見る事ができた。

b室をヘヤ・オクノなどと呼ぶ家が森田半三郎家、今井貞雄家、森田彦太郎家、横豊治家がある。この四家のb室にはトコ・タナを設けていない。何れ

図2



柱の配置

マジキリに関連して柱の位置や数、そのふとさは古いスマイの新古を決める手掛りとなる。そこで柱の位置について、今回見た点をあげてみよう。

A・Bの各室を見ると萩原(友)家と今井(貞)家などはエンガワに面して一間おきに柱があり、A・Bの各境のマジキリにも一間おきの柱がある。萩原家にはダイコト柱の表て後ろに一間半おきと半間に、Bb室境には一間半を中央に表てがわに一間め後ろがわに一間ごとニヶ所の部に柱がたててある。他の家々よりも柱数が

も古様漂う家である。この四家の場合接客室的要素がなくて当初からヘヤ(ナンド)の性格の室として作られた。四ヶ六室をもつが、階層上からも注意される。それに室自体の開口部を後補した痕跡もあり、ナンドの本来の閉鎖性が著しい。

室名称の固執は大へん固いがそれが機能的な面の動きに伴って、わりあい名称変更もあり得るのかも知れない。このような曲折を経て定着した表である。

そしてすでに述べたようにAaとBb、またBbの四室六室はヒロマ型から改修されたのが多いことを再び述べておきたい。

多い。実際の柱のあいだは六尺一間でないが、本村と赤城山を中にへだたせた東村でも見たところと似ている。マグチ(間口)に平行する室では奈良家も一間ごとだし、A a境の中間だけでは楯、諸田、森田(彦)、根井の各家も一間ごとである。B b室の境には森田(彦)、木暮の二家も同様である。第二図は家の構造柱を主として、調査させて頂いた各家の柱の位置の概要である。図中では妻のわや家の背面の壁付の部分のマ(間)柱を入れてあるが、構造柱はできるだけ採った。前記した他の諸家も柱の数は多い方である。

一般に古いスマイでは柱の数が多いたるが常と考えられる。なお、考えられることは、家を建てた当初には柱があったのだが、その後の修理によつてある柱を取り去つたり、これを他のところに転用したりしたことであつたと思われがある。柱の一本ずつの四面を上から下まで見ると矩形のホヅ(柄)穴が通つていたり、後から埋木してふさいでいたりと跡が多くの家で見られた。それらは第三図以下の各家ごとに見わけがついたのを「」印で示しておいた。これは見落ちしたのがまだあるかもしれない。向いあつて互いに同じ高さや位置が分る場所は、その柱の間につながりがあつたらうと思われし、向い合つて跡があつても高さが違ふとか形が別とかいうのは、その柱の一方か両方とも柱位置を動かしたう、柱の向きを変えたりしたのである。一本の柱だけにしか仕口跡がないのも同じである。

柱に因んで補足すべきはシウコク柱とそれに並ぶ構造柱が石場建てのことである。

礎石の上に柱根を据えつける。この柱根まで見えるところは皆石場建てであつた。ダイコク柱の場合も皆そうであると思われが見えないので記述をさし控える。その他の構造柱も同様である。

根井家のドウシン柱の名称は意味が不明であるがトリイ(鳥居)建てと呼ぶ建て方の一つである。なお同家ダイコク柱のアガリハナ上バから二尺ほどに小孔が刻んであつたが、そこは小銭を幾つか入れておいて、

托鉢や物乞ひに来た者へ、喜捨するのに立たなくもできて便利だつたと年寄りから聞いたと根井氏は語つておられた。ドウシン柱は道心柱で、その柱近く立つ人者への心やりと思えばダイコク柱に刻んだ小銭置の孔と関連がありそうである。

ダイコク柱の列

トボグチに面する方を表と呼びイロリがわの方を後ろと呼ぶことにする。第二図はその配置、柱数の概要であるが、ダイコク柱より表でいむには2本が3本の柱がある。この柱数はエンガワの外の柱も数えていむから家の内部でみると1本か2本で、稀に3本のものもある。(森田(半)家)ダイコク柱の後ろがわでは、表でと同数か。一本少いかで、2本の場合が多い。やはり後ろの外壁の場所を入れて数えたのだから、内部に立つのは1本か2本で、稀に無い(町田家・串淵家)こともあるし、3本もある森田(半)家の例もある。表でに多いのは、エンガワがあるからである。各家の家作当初にエンガワを設けなかつた頃の家では、既に改造されたものであり、初めからのエンガワを備えた家は時期が新しくなつてからと思われる。しかしこのような柱数からだけで家作の新古は決して定められはしない。

ダイコク柱の位置は、各家を訪問した時には、奥行(梁間)の中央より表でがわにかたよつたのことが多いと思つたことであるが、後にかたよつたのが割合に多くあるの意外に考へている。柱マ(間)を詳しく実測する必要があるわけだが、実測の余裕がなかつたことで、将来民家研究の方に修正して頂きたい。梁間の中央には必しもダイコク柱はないが、奥行長さのほぼ中央が三家(諸田・根井・今井貞各家)もあつた。諸田家は建築年代が明かで比較的新しく、根井・今井(貞)家は古い方である。何れもゲヤ(下屋)構造からの偶然であるが14戸の家の中では高い比例のようである。

柱間構造

第2表ダイコト柱前後の建具に表示したが、ダイコト柱の表でがわに建具がほとんどみな入れてあった。ただ二軒特例に接した。その一は萩原(友)家で、ダイコト柱から表で第一の柱の間のサシモノ(差物)にカモイ状の戸溝を刻んだ差物があったがシキイが入れてない。シキイ仕口もなかったで、非常にいい資料だと思ったが、十月末に再訪したらいつのまにか板戸が入れてあった。ザシキの冬を思えば当り前なのであるが、夏向きに古様を残したものだ。この第1柱と第2柱の半間ほどの小屋二階ハシゴ段のところはカモイ溝、シキイ溝がなく、家作当初の柱間構造を明らかに示していた。その二例は木暮家で、同じくダイコト柱表でがわ第1・2柱間にタテダがなかった。他の各家はそれぞれカモイ、シキイを柱間に差し込みシキイ溝をいつの年かに入れた。その年代は既に記憶の影が消えていた。

この第1・2柱間で異色のあったのは、森田(半)家の板戸一本ハメコロシに入れたもの、根井家のこを土壁としたもの、森田(彦)家ではダイコト柱表でがわ第一(マ)間と第二マを本マ(間)のために建具巾の不足分をシキイ半分たらずの巾ホウタテ(方立)の板を各一枚ずつ入れていた。しかしこと同じような柱マが広いためにシキイを巾広に特製したのが何軒もあった。各家の図面にできるだけ記入しておいたが、もし落ちがあったら粗漏をおわびしたい。

ダイコト柱の後ろがわにも、前記ようなタテダがあり、また省略されたのがあったが頷を避けて図面に譲りたい。

シキイ・カモイ

ダイゴト柱の表で後ろがわのタテダをはめるためにサシモノ(差物)を柱の上方とユカ上に入れる。当初からのサシモノはセイ(成イ・背)の高い材が使われる。オウイレ(大人)するか納入である。カモイは

その下に取付けたのと取付けでなく同材とある。ほとんど本村では同材に接した。これはダイコト柱を中心にした梁間方向が皆それであり、さらにAa境、Bb境、AB・ab境、エンガワとA・B境、bの後ろ裏に面して、まbの外ニワに面した開口部にそれぞれ使われる場合が多い(?)ように思われる。カモイをこの差物の下バに張りつけるようにしたのも箇所によってはできる。これらカモイ・シキイでマジキリをし、マドリを決する。従って多くの場合シキイ・カモイの両端は柱によって限られる。ところがシキイ・カモイの端に柱の置かれていない場合が多される。この場合あるべき柱が省略されたと考ええる。本村の場合にも数例に違った。

楯家のAザシキbヨウ境は中の一ケン目にヨキハツリの柱がありながらカモイ・シキイの両端には柱がない。萩原(友)家のAザシキのダイコト柱からカモイがBデエ境に架されているがB境のそこは柱がない。為谷家のAチャノマからB'ナカノマにダイコト柱からカモイ、シキイが出てB'境の柱のないシキイ・カモイに交叉する。同じくB'b境もb室の壁付に架される。森田(彦)家のAに架されたもの、森田(半)家のAにはダイコト柱と僅か一尺たらずのズレがある。串淵家のA室も同じく柱を省略している。このカモイ・シキイの場合の多くは養蚕のために10帖12帖などの不便さを8帖などの臨時マドリにかえて、養蚕が終つて秋の終末にはとりはずされることになる。

柱のニゲ(逃げ)

当初ダイコト柱は他の主要な構造材と太さの差がなかった。それが追々太って来る傾向があつていつかダイコト柱の太さは富と権力のシンボルと見られるようになった。しかもまだ畳敷きの普及が少かつたためか、太いダイコト柱の上下に巾の狭い4寸43寸のカモイ・シキイが使われて、柱の中心にカモイ・シキイの中心も一致した六寸八寸一尺とダイコト柱が太っても差物は広くとれない。柱の巾が広いだけ左右にはみ出

す結果となった。そこへ疊が入ってくると柱のはみ出しだけ疊をきりつめなければ敷きこめない。ホシマ(本間)の場合も同様であるがダイコク柱がもっとも美しい。柱きりつめはできないので、柱を疊がわと反対

がわに片よせるという技術が大工の工夫によって生れた。技術的には柱をそのままのマジキリで動かすことは大へんむずかしい。技術の発達には時間がかかった。柱のニゲは住居の新旧を定める指標として重要であ

表Ⅱ ダイコク柱の家と後ろ

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14	棟 町 諸 野 為 谷 森 森 森 森 谷 今 今 萩 木 茶	建物の 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右	ダイコク柱と並ぶ柱の数				ダイコク柱より 後の柱かん 付柱まで入れる	ダイコク柱前後の道具	ヨリツキ (ツガリハナ)
			ダイコク柱より前 の柱数	ダイコク柱の中心より 前後にある	ダイコク柱の中心より 前後にある	ダイコク柱より 後の柱かん 付柱まで入れる			
			2本	前	—	後	2本	有 巾広のツムウジ	古い小エンあと1.5尺
1	橋	建物の 左右	2本	前	—	後	1	有 ツムウジ	板2尺2Kもとツガリハナ不明
2	町	建物の 左右	3	—	—	—	2	有 ツムウジ	板2尺1.5〜2.5尺の中
3	諸	建物の 左右	2	—	中央	—	2	有 中ガラス	3尺の小エン、1尺、1尺、1.5寸板
4	野	建物の 左右	3	—	—	—	2	有 前半ツムウジ、中キイ、カセイなし、1 間半板、後ツムウジ、ワシ、フスマ	コエン1尺
5	為	建物の 左右	2	—	—	後	2	有 ツムウジ	ヨリツキ1尺2尺
6	谷	建物の 左右	2	—	—	—	2	有 ツムウジ	板1尺巾内約2尺もとツガリハナ
7	森	建物の 左右	4	—	—	—	4	有 板2尺、脚ハコロツ1 前後ツムウジ	ヨリツキ2尺
8	森	建物の 左右	4	—	—	—	3	有 前半ツムウジ、中キイ、ワシ、4 後、高ツムウジ	コエン1.5尺
9	森	建物の 左右	3	—	中央	—	2	有 ツムウジ	約3尺の小エン
10	谷	建物の 左右	3	—	中央	—	2	有 ツムウジ	ヨリツキ1尺巾
11	今	建物の 左右	2	—	—	—	3	有 前 腰高ツムウジ	ヨリツキ1尺半
12	今	建物の 左右	2	—	—	—	1	有 ツムウジ	1尺〜1尺ほど板ジキ
13	萩	建物の 左右	3	—	—	—	2	有 前1間巾広ツムウジ 約4尺は とダツラなし	3尺コエン
14	木	建物の 左右	3	—	—	—	2	有 ツムウジ	

る。萩原(友)家のダイコク柱は逃げなし。

為谷家ダイコク柱逃げあり。

根井家ダイコク柱逃げあり。

今井(一)家ダイコク柱逃げなし。

調査の時期が養蚕時で、シヨウジの類は柱に紙バリで密封されていた。ヨリツキ側からは測れないし見られなかった。わかったのは4例だけであった。

常居のマ(間) A aとダイドコロ

A室はチャノマと呼ぶ例外的な為谷、今井(一)家の他はザシキという。14帖が一、12帖が三、10帖が六、8帖が四で10帖が一ばん多い。ただしこれはa室と関連させると様相は十分に違ってくる。いまはそれを考えに入れずに、A室を概観したい。天井ネダ(根太)が大小あるが、天井自体に構造性が見られる。

常居のマでは畳が8尺×1.9尺の普通のもので、8、10、12帖となると柱室の二辺に隙間ができる。ホンマ(本間、京間)が多いためである。

A室とヨリツキ(又アガリハナ)の境にダイコク柱とその表で後ろがわに柱が列をなす。下ダイコク柱、シヨウコト柱というダイドコロの馬屋柱の列と鏡うりに平行するが、本村ではシヨウコト柱列が非常に目立たず、このヨリツキ境のダイコク柱列が目につく。

ダイコク柱と連る柱のあいだは、ほとんど建具が入っている。普通形のシヨウジ、少し古様のある腰高シヨウジ、イタドなどでヨリツキとザシキを各独立させる。これにも例外があって建具をはめるカモイ・シキイのない柱マ(間)のある家(萩原友、木暮家)がある。また森田(半)家はハメコロン(シヨウジ一枚で左右に動かさない)としたもの根井家では壁にしているものもある。農家建の古いところでは、建具を入れない例が各地にあるところから、シキイがないのや、カモイだけのものは、

建てた時代が古いか、何かの事情で故意にシキイ・カモイを省略したものであろう。また、現在は建具があり、カモイ・シキイがあるが、建て初めからのでなく、後の修理、特に養蚕関係など室温を保つための必要からシキイ・カモイを柱側面から入れた形跡が残ったものもあった。柱面をカモイなどの成だけ欠き取って横からおし込んだ跡が見られるので分る。柱の面とカモイの側面が一平面になっていないことや材質の違いもある。それ故に建具があっても一がいに新しいとばかりは言えない。

A室とエンガワの間の柱は一間毎の柱があり、二間又は二間半の間に柱を置かないのがある。中には初め柱があったのはカモイの上バ、ユカのネダの束として残して切り取った場合もあろう。ユカ下に柱の根が残っている家もあるが、外見でできないしするのでこの点は疑点をもった家もあったが尋ねても東(ツカ)との区別なども考えて尋ねなかった。

A室Bデエとの間はみんなオビドで統一されていた。地域的の住居の常形である。

a室との境の中で、シヨウジ・イタドでシキリしたもの、その半分だけか全部をトダナをおいてシキリとしたものとする。トダナは作り付けのもあり、柱が間にあたりしたが、その境目から半間、一間はなれた天井に桁行の梁があり、A室寄りには天井があり、後ろ奥には天井を張らずに屋根裏の見えるのがある。

この梁の位置と、A室境目の柱(中の柱、隅になる柱)などに注意したい。特に注意すべきは、ダイドコロ境のがわの隅にあたる場所に柱のない家が(橋家)があり、b室の境目にも橋家それに串瀬家でない。修理に際して取去ったのかも知れない。

臨時にA a二室を広さの加減した森田(彦)家、串瀬家のは神ダナのあるカモイが本来の境目なのは明らかである。ただ橋家、木暮家などb室奥壁に仏ダンなどを置いてあるのは、現在のA a室シキリは後補によった結果で、もとは両室は一つであったとも考えられる。

これは仮定であるが、本村の常居の場は一室であった。その時期と平

行してかあるいは後に二室に分化した、と考えて見た。今回訪れた多くの家は二室分化後のものに接したのと言えそうな気がしている。(表Ⅱ参照)

b 室

b室の呼び名が不明なのが多い。ヨジヨウ、オシイレ、イタノマサンジヨウ、コベヤなどの名があり、中でヘヤが三家、その他は不明であった。本村ではヘヤの呼び名が多く行われていたのではない。

ヘヤa室は後ろがわ(多くは北になる)は二間の場合一間は土カベ、一間はガラス戸などの開口部があるが二間とも土カベもある。室の左右は一様でない。b室オクリノデエに接するシキリは土カベ、板カベが多く通路になるのは境いの長さの半分より多いのは少い。串瀬家が戸ダナとカーテン、木暮家がオビド、奈良家は細子のシヨウジ、その他は開口部が小さい。ダイドコロがわは、半間ほどをカベ、残りを建具としている。Aa境は戸ダナが立ち並んでヘヤは暗い室である。それでオシイレの名も出て来たのかも知れない。b室をこのように暗くすることは室の成立が寝所でありナンドであった名残を残したと思える。

この室に残りた戸ダナは、a室からは背中向きで、A室から明け閉てする。二段作りで上の段を仏ダンとする。隅寄りが多い。桶家、今井二家、木暮家などについては前項に一応触れておいた。神ダナはA室のa室シキリ上のカモイ上一間、一間半、二間などの棚を設けて小宮にそれぞれの神を祭祀する。

この位置の関係からか神ダナ仏ダンの下に表て庭に直面される。神の護りの中に、祖先の靈魂の愛護の下に營々と家の基盤を堅持して来た世代を重ねてその生活の拠所としたのが常居の場である。

(表Ⅱ参照)

表Ⅱ ザシキA概観

	室名と数	天井	ザシキとヨリツキの境	ザシキとエンガワの境	Bデエの境	後ろがわとの境	神ダナ	仏ダン
1	楠 シ10キ	ネダ天井	シ2 シ2	シ4上下3ミ ※	イタ4 2	タテグ2 2	—	a右手の カベキワ
2	町田 シ8キ	—	シ2 シ2	シ4	オビト4	シ4	—	—
3	語田 シ12キ	ネダ	イタド4 #2	シ4	オビト4 2	トダナ2	A室の北 サカイ	aトダナ 右
4	萩原友 シ14キ	ネダ	上下なし 0.5 下なし 1.5	シ2 シ2	オビト4 #4 2	オトダナ 2	—	右
5	為谷 チャノマ シ10キ	ネダ	シ4上下3ミ	シ4上下3 ※	—	トダナ2	—	—
6	森田彦 シ10キ	ネダ	シ3 シ3	シ4 シ4	—	移動タテ ダ	—	左
7	森田半 8	ネダ	シ1ハコ シ3	シ4	オビト4	シ4	—	—
8	根井 12	ネダ	シ4カベ 0.5シ4	シ4	オビト4 #2	イタダナ 2	Aの北サ カイ	aトダナ 左
9	今井一 チャノマ シ10キ	ネダ	オシビ2 シ4	シ4上下3ミ シ4	現カベ	マイラド 4	マイラド 上	aトダナ 右
10	今井貞 シ10キ	ネダ	シ4 シ2	シ2上下3ミ ※	—	シ2 シ2	—	—
11	萩原文 シ10キ	ネダ	シ2 シ2	シ4上下3ミ	オビト4 1	シ2 シ2	Aサカイ	aの中 後ろの左
12	串瀬 シ10キ	ネダ	シ2 シ2	シ4	オビト4 オなし 0.5	シ2 シ3	—	aカベキワ 左
13	木暮 シ8キ	ネダ	上下なし 0.5	シ4	—	シ4	—	—
14	奈良 シ8キ	—	シ4	シ2 シ2	—	シ2 シ2	—	aトダナ 左

備考 ダイコク柱の表てと後ろを柱マ毎に表てがわから ※ソケヒバタ 雨戸 トダナはAを前にしてBにある ザシキAが裏裏切で見られないのが多い

表N 室概観

		室のよび 名広又は 敷タ相当	北がわ	左右のシキリの 中カベ	室中に 神ダナあ るもの	室中A室 境に仏ダン あるもの	室中の後ろ がわ、板マ などにあるもの
1	橋	ヨジウ 4	シ2 カベ1K	半K 半K	—	—	室右オク
2	町田	オシイ 6	カベ2K	—	—	—	—
3	諸田	イヘヤ 2	フスマ4	—	—	右手トダ ナ上段	—
4	萩原友 為谷	ヘヤ 5	シ2 カベ1K	サカイ板 半K 西74	—	—	—
5	為谷	—4 2ほど	間口有	—	—	—	—
6	森田彦	—4 ほど	カベ2K	bサカイ 右カテ	—	左手トダ ナ上段	—
7	森田半	—8 ほど	—	カテ各半 右カテ	—	—	—
8	根井	ヘヤ 5	—	カベ各半 右カベ	—	左手トダ ナ上段	—
9	今井一	—3 尺×2K	—	カベ各半 右カベ	—	—	マイラド 3尺巾の 後ろ 右手
10	今井貞	—4 ほど	ガラス2 カベ1K	—	—	—	—
11	萩原文	サンジョ 3	カベ2K	—	—	室右ト ダナ上段	—
12	串淵	—4 ほど	シ2 カベ1K	左トダ ナ上段	—	—	室右ト ダナ上段
13	木暮	コベヤ 6	カベ2K	シ2 右カベ	—	—	室右ト ダナ上段
14	奈良	—3 3	—	カベ各半 右カベ	—	—	室右ト ダナ上段

ダイドコロ、ウマヤ、ソウヤ

ダイドコロはトボグチからセドグチまでの間の土間になっているところ全部を指すようである。ウチウマヤとソウヤははずしているのだと思うがソウヤが消えかかった家ではそもそも何となくはなしにダイドコロの延長のように呼ぶのではなからうか。ウマヤも畜舎がオモヤから外に出て行った現在では、ユドノの場になった家もあり、農具の小物を置いたり、畑から掘ってきたジャガイモを転がしておいたりした家もある。この場合も、もはや呼び名としてウマヤは亡びてダイドコロに名乗りを譲っているようでもある。ダイドコロの概念は明瞭のようである。こぼやとしていえる。

ウマヤの馬の出入れをダイドコロに向けてマセボウを挿した跡のある家もあり、そのあとが不明になったものもある。ウマヤがまだ生きていたのは森田(彦)のウチウマヤと串淵家のマガリ(曲り)のウマヤの二つ、しかし馬は既にこの家から消えて牛が入っていた。

アガリハナ(ヨリツキ)のダイコク柱からシウコク柱がわにシキリがあつてシウウジ(特例もあるが)二本ほどをおき、なおその先に半間又は一間のシキリをおき、その下へ下駄箱などを置く。木暮家のゲタ箱は五十年前に物故された祖父の兄弟が手作りしたという時代物であった。

ダイドコロに広く出たヨリツキは当初のものでなく、みな後補で当初は1.5尺ほど(楯家など)から三尺ほどであった。萩原(友)家のもそのくらいであるが、ダイコク柱から表にかけてカモイ溝があるがシキリがないので、当初アガリハナを作つてなくて、その建具を入れない柱に来訪者は腰を下ろして休み、室へ上り降りをしたのであろうか。ヨリツキはサマドの内側に三尺の土間を仕切つたものもあり、明治の中頃にはそこで承取りをした名残りであろう。

ダイドコロの中仕切から後ろにはヨリツキに続いた板敷にイロリを切っている。イロリはこんなに残っているとは思わなかったのに大部分の家でいまでも使われている。鉄線のカギになってカギ竹や魚形の木の支えはほとんどない。ナガシとナガシの上の出マドはどの家もあり、簡易水道ができたので、水ガメがなくなり、井戸もセドのナガシの向いあたりに残骸だけが残っていた。ナガシの傍に食器ダナを特設する慣習があり、幾例かにつかつた。カマドはイロリのカドから直角におかれてナガシに後ろを向ける。この先のソウヤの口にカマド柱の名を残したのが楯家で、カマド神の神札を祀っている。カマド神はナガシの上方にシメナワを張って祀る家も幾例もあり、細部写真に一二を入れた。ソウヤはミソや漬物樽の在り場。この口の手前にセドへ出るセドグチがあり、トボグチと対向の位置になる。

コヤ、屋根、軒廻り

コヤ（小屋）

コヤはサス（又首）組の小屋である。二本の丸太材を山形に交又させて上方の交点から脚端を45°の傾斜に開いて梁木に載せて三角形にする。この梁をジョウヤ（上屋）梁という。棟木の両端とその中間に幾組かを加えて、縄からげに棟木にとめる。両端のサスの頂点に近い所から四隅へ隅棟を降して屋根の骨組にする。これにモヤ（母屋）、モヤ竹を棟木と平行に幾段か渡す。初めの頃のサス組の小屋はこん形を柱の上部の上梁屋と桁にすっぽり被せたものであろう。小さいいわゆるコヤ（組ではなく）のなかにこんな素朴な形がある。住居の屋根の内部をコヤとい、その構造をコヤ組と呼ぶのは類似の形によって基本的な構築とするからであらう。

コヤ組の中にはこれとそっくり同じのがある。前橋市の新市域、それ

も勢多郡内部の地域に多い。本村で見たコヤ組内部はこれより複雑になる。サスを載せたジョウヤ梁にダイコト柱の頂点、ザシキとアエのシキリの柱、キリオトシ屋根の部の隅の柱などがその下バに接して梁を支え、また天井の上の梁から立ち上った柱なども加ってジョウヤ梁支えの役をする。これらの通し柱とコヤ内だけの柱は胴貫で固められている。なおその他に棟木を平行に、柱の上のジョウヤ梁の上バを二三筋の桁行梁が渡る。これらの高さ、コヤ内の二階のユカ（床）から六尺内外の高さが多かったが、本村14軒の家々は皆、コヤ内に柱と貫などが多く見られて、既にのべたも勢多郡部に属した上川淵、下川淵、木瀬などで柱も貫もない広々としたコヤ内とは対照的に異なる景観をなす。旧南橋村仁王ガイドでは柱が出ていたから、一般にジョウヤ梁は古い家では低く新しくなるにつれて高くなるといわれている。（これは工法の進歩を意味する。）がこんな二つのコヤ内の違いに多少地域性がありそうである。

さて、サスの合掌部は丸太のままで交又したのは一つもなく、大部分はサス木の頂部を半わりにしてそこを90°ほどに縄でくくっていた。相下きである。棟木はX形の上に載つたのが全部で、中にその他にX形の下にも棟木と平行に化粧棟木というべきものが見えたのがあり、これに垂直ではないが東が隅に見えたのが一つあった。一種の棟東である。しかし県下ではこの東をウダツ東などとは言わない。サスがジョウヤ梁に脚を降した所の形のおかたのは諸田家の場合で（参考図）外の手をさしこんだだけでは分明でなかった（写真35・37）

モヤは数段に適當の間隔で梁材に次ぐ太い材のサス上バに縄でからげつけられる。サスからみれば細い材である。中には二三本を束にしてモヤにしたところもある。棟木上方から幾段ものモヤへ上から軒際の方へ竹タシを当ててモヤとの交点を緊縛する。間隔に定りはないようであるが、七八寸内外が多い。竹タルキの上バへ竹の棧を棟木と平行に渡して、竹タルキに緊く縛りつける。これら竹材の上バの平面が葺地である。葺地に竹の棧の上バごく一部に板を載せた一軒があった。茅場

表V 屋根の表情 一外形の概観一

	葺材料	屋根形	棟おさえ	棟飾り(鳥トマリ)	煙抜きヤグラ
1	稲 ワラ	四注 (寄棟)	竹(平行)お さえ	背にシノギや持たせた舟 形を棟端の板の山形にの せる	小棟一つトボの内柱の上 方からザシキ1Kまでの 中央に約2Kほどの大き さ(以下トボ内柱上方か らはどの家も同じ)
2	町 田	" (〃)	箱ムネ形	"	無し
3	諸 田	" (〃)	"	"	ヤグラ小棟一つ キリオ ドン屋根部分の中央辺2 Kほど
4	萩原友 トタン着セ	" (〃)	"	X字形の角木形をのせる (タラカケキ丈)	ヤグラ一つ キリオトシ上方の点前に 同じ約2Kほど
5	為 谷 ワラ	"(東ヒラ 少し落る)	竹おさえ	グシの山形の頂部の竹を 長くしたもの (現下評)	ヤグラ一つ小形で1Kほ ど
6	森田彦	" (寄棟)	箱ムネ形	箱の山形を二重にしてそ の棟に反りのある又シノ ギある角棒をのせる	無し
7	森田半	" (〃)	ハコムネ形	舟形状(前出と同様)	無し
8	根 井 ワラビキ (トタン着セ)	入母屋	棟瓦おさえ (トタン着セ)	" (〃)	無し
9	今井一	四注 (トタン着セ)	" (〃)	棟端山形の下から角棒を 出す	無し
10	今井貞	" (寄棟)	"	舟形状 化粧棟を通しにしてその 端をシノギのあるキリダ シ小刀状に反りをもたせ る	小棟一つ1K半ほど
11	萩原文	" (〃)	"	"	無し
12	串 淵	四注 (〃)	"	棟頂の竹を少し長く出す	小棟一つ
13	良 木	" (〃)	一	一	無し
14	奈 良	"(西ヒラ カブト形)	箱棟形	箱ムネ形の末端	小棟一つ半Kほどか

キリオトシ屋根

本村には表で屋根のキリオ落しが多い。キリオトシの多いのは入母屋造りが少いので養蚕盛行に伴って通風、採光、蚕室拡張の一石幾鳥の利をねらったものであろう。この屋根形改造に際して、コヤ内の柱、束、貫が増大した。家の経過の古様さに比べて繁多である。他の町村でも稀にみることであるが、今井(一)、萩原(文)一家のキリオトシ部の軒先切口の扱い方が、なかなかいい。楯家には後ろがわヒラに突きあげがあり、木暮、奈良家などの、妻の軒落シがあった。妻

は、ないが茅はある。人手がなくて茅は手に入れにくい。妻ワラで代用するが、葺地へ軒先から順次上方へ葺きあげる。キリオトシの半マドの部分のサスの梁から半マド柱に架け、貫で柱とつながれる。一尺ほどの高さにシキイをおき、丈の低いシウウジを入れる。キリオトシ部分の小軒はヤネ平(ヒラ)の大軒からは上方で後退しているからコヤ内二階の部分からヒサシを出す。このヒサシの下方がエンガワなどの内がわになり、ここだけはモヤから先へ下した部分でゲヤになる。

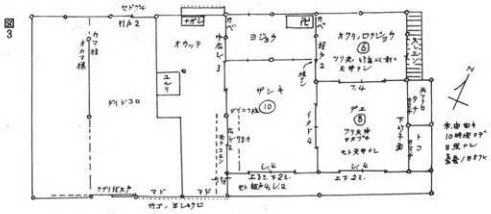
竹タルキの上に棟木と平行の竹を渡して交点は一つ一つ縄で縛ってここを葺地とする。竹は軒先にまで出して行くので、多くの家では軒マワリにこの竹タルキが軒下から見上げられる。化粧軒マワリ(或は軒裏)となっている。

桁から軒先へ梁の端を水平に出す、この上バに小軒板を張ったセガイ造りとしたのが諸田家である。キリオトシ部には一種のスガルハフ(鍵破風)をうけて大軒の区切りとしていた。キリオトシの小軒もサス梁の端でセガイとしたので、軒セガイとしては中高の二段セガイとなっていた。

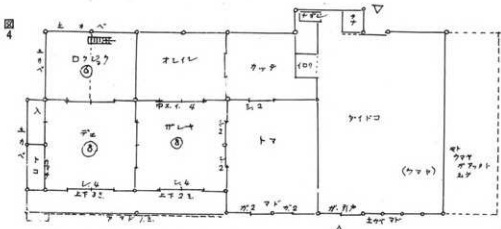
北地域に近いことが思われる。

ヤシキ

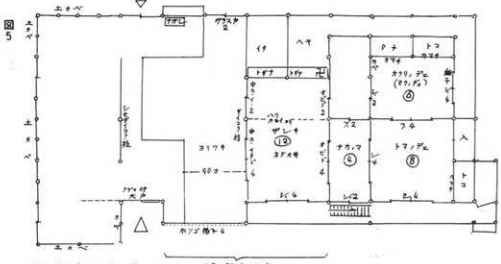
北橋村はやはり山麓地である。利根川の河成段丘上は緩斜面であるが小さな谷が多くてヤシキは谷木の便のよい所からできたのであろう。矩形のヤシキよりも不規則なヤシキどりをしている。その中にオモヤをおきBも側にオモヤと矩の手位置にザシキと物置兼用のような小棟を置いた家、オモヤの庭を距ててカイドの片側に蚕室をおく。ドノウは家によつて区々としているようであるが諸田家では東よりの前手にウハヤ（上屋）のあるドノウを設けた。道路からの入口は南前の蚕室などの前を廻つて、家のカイドにする。家の後ろがわは斜面を削平して前がわに盛土してヤシキを造成している。その削った場に藪があり、ヤシキ森がある。今井善一郎家などのはその最たるものであろう。桶家では裏の木がはびこつて（東がわ寄り）藪が一日ちがうというほどのもあつた。



上南室
標 兼 浴室

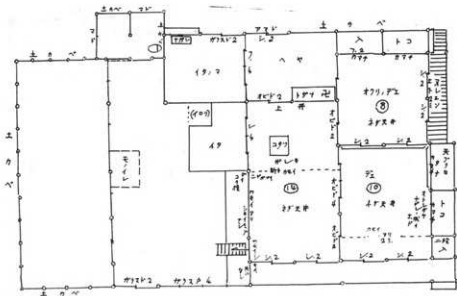


上南室 - 町田 屋 跡 表



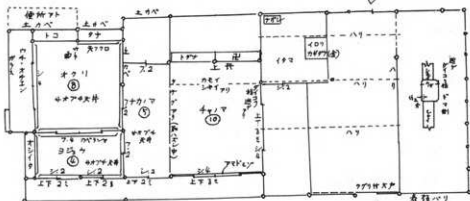
下南室 - 跡 田 等 二 示
小屋二階 半ト部分

6



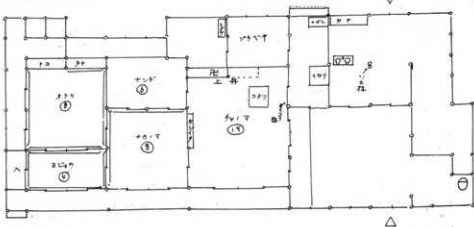
新着各段部図

7



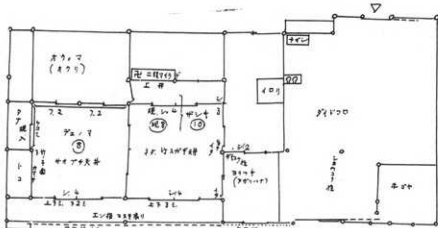
全館小坪・各各正二床

8



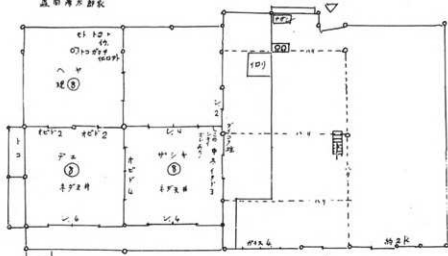
波川入沢家付

9



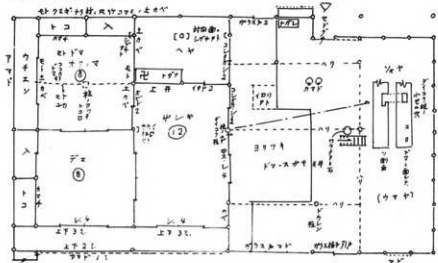
森田厚太郎家

10



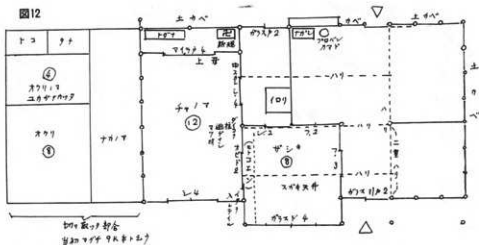
上野田 森田幸三郎家

11



藤田・藤井 昌雄家

図12



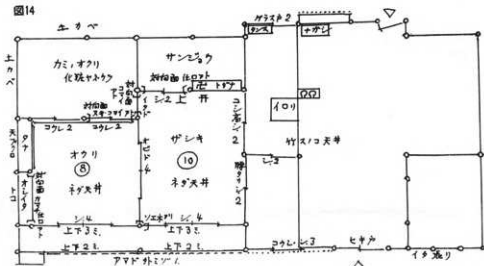
箱田 今井一家

図13



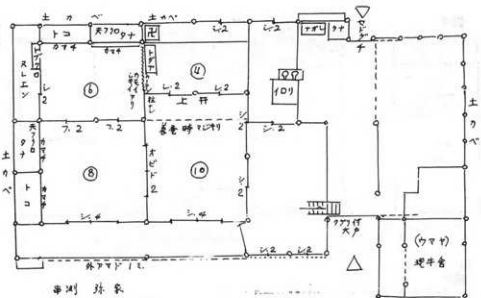
箱田-今井直理家

図14



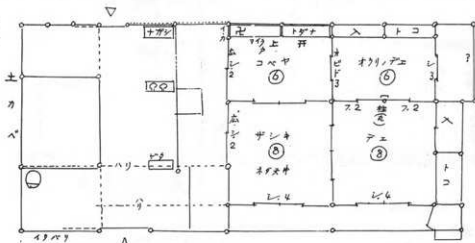
箱田・萩原 文雄家

図15



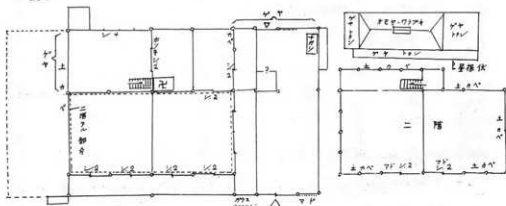
車測 外家

図16



直型 木骨垣次郎家 (ニワ全部 右子側面 鉄筋コンクリート張 巻替中)

図17



直型・全高住五平家

① 沼田幸三家 二階カベの化粧ヌキと白カベ



② 町田照親家 ビニールパラツタの骨ダシ



③ 萩原友次郎家 ワラズヤにトタンを着せたヤリオトシ屋根はこの形が一般に見られる



④ 二階建ての奈良佐五平家



⑤ 串瀬弥家 クグリ戸付の大戸の左のヤマ(ホツゴの格子) そ



⑥ 今貝屋家 池と橋、イキな燈籠



⑦ 木暮恒吉郎家 ニワのパラツタ



⑧ 同上家のパラツタの裏



⑨ 奈良佐五平家 トボグチ



⑩ 町田照親家 トボグチ





⑥ 市川一家のマガリのリマヤ・そこのかどがトボタチ



⑦ 諸田泰三家の軒セガイ・化粧ヌキと白カベ・エンガワにハシゴダン



⑧ 森原太次郎家オクリノエのヌレエン



⑨ 森原文雄家エンガワ・坊やたちの脚の長さエンガワ高さをみよ



⑩ 今井一家トボグチがガラス戸に



⑪ 森原文雄家山形・秋田県などのシンドグチみたいな切りあげ



⑫ 今井一家シンドグチふうの半戸とヤネの切り口



⑬ 森田半三郎家スズメオドリは舟形



⑭ 右手にワグチコロ その左からガラス戸の部分がヨリツキ(イタマ)



◎ 森田三郎家 ナガシ・木ガメ・イロリ



◎ 諸田善三 家 ザシキ・ナカノマ・デユ根太天井



◎ 為谷正三 家 アガリハナからザシキ・サカノマ



◎ 萩原友次郎 家 カミダナ・仏ダン 右端のトダナの上段



◎ 為谷正三 家 ヒラシヨイン・細ア子の小シウウジ・ランマ



◎ 根井元春 家 スガキ(ハ竹スノコ) 天井 ハリと柱の取り合せ



◎ 根井元春 家 トリイ建ともいうべきドウシン柱



◎ 今井一家 ショウコク住蓮の前のワラタキ石 帽子と比べるとよい



◎ 森田彦太郎 家 中がショウコク柱 右端がウマサメの柱



◎ 根井元春 家 イロリカヤ竹(ハ鉄) ナガシ・タナ・カマド

◎ 為右正三家のロジエウのオシイタ
(トコ)



◎ 森田屋太左衛門家 カマチドコロエケコ
ミタナ(現オシイレ)



◎ 為右正三家 次園のカモイ



◎ 同上家 シキイ二本ミゾ中がわ
の雨ミソ



◎ 根井元春家ダイコク柱裏の腰ダカ
障子



◎ 森田平三郎家 相イ欠キのサスタ



◎ 今井一家 アイ欠キのサスタ



◎ 橋巻次家 ホソ差しのサスタ



◎ 橋巻次家 コヤタミの中(ヤネウ
ラ)はまだ生きて使われている



資

料

北橋村民俗関係資料

北橋村民俗関係文獻

- 1 西勢多村銘細帳集成 昭二九、一一 横野中学校社会科研究部編 この中に上南室村、下南室村、上箱田村、中箱田村、箱田村、下箱田村等の銘細帳が集録されている。
 - 2 西勢多村方文書摘要 昭二九、一一 横野中学校社会科研究部編 水帳、宗門改帳、五人組帳の抜粋
 - 3 北橋村の水帳 昭三三、一 北橋村郷土研究会編
 - 4 北橋村内明治十年村誌集成 昭三四、九 北橋中学校社会科研究部編
 - 5 北橋村郷土誌 昭三五、九 北橋村郷土研究会発行 明治四十二年ごろ編集されたもの。
- 以上は村を研究する基本的なものとして掲げた。
- 6 根井行雄伝 昭三三、九 今井善一郎著
 - 7 田中清六伝 昭三〇、七 今井善一郎著
 - 右二著、村の成立、伝承と史実等民俗研究上にも価値が高い。
 - 8 伊豆郷談 昭三六、八 今井善一郎著 北橋村を中心とした地域短篇聞き書き集。
 - 9 橋除郷十説本Ⅱ郷土かるたの解説Ⅱ 昭三

六、九

- 10 北橋村の寺小屋 昭三八、七 柳井久雄著
 - 11 習俗歳時記 今井善一郎著 昭一六 煥乎堂発行 今井家を中心とした村の年中行事。勢多郡誌資料として執筆されたもの。
 - 12 巫祝見聞記 今井善一郎著 昭二五、八 上毛民俗学会発行 本報告中にもある真壁の山伏を中心とした詳細な報告。
- 以下今井善一郎氏が雑談に発表せられた北橋村関係の報告、論文を掲げる。脱漏があるかも知れぬ。
- | | | |
|-------------|------|------|
| 青年と結婚式 | 民間伝承 | 七一四※ |
| 箱田のイッヶ | 同 | 八一五※ |
| 串立つ神 | 同 | 八一八※ |
| 稲荷小考 | 上毛民俗 | 第四号 |
| 背負はれた神 | 同 | 五 |
| 鍛冶神信仰の破片 | 同 | 十四 |
| ボンデン田小考 | 同 | 十五※ |
| 村持地と共に消えるもの | 同 | 十九※ |
| 地震と草鞋 | 同 | 二十 |
| 昔話発生過程の一例 | 同 | 二十二 |
| 実名敬遊俗の残跡 | 同 | 三十一 |
| 弁天小考 | 同 | 三十三 |

オサキ小考

同 三十六

(※は再録)

以上各種文獻のうち基本的なものは除き、民俗関係の中から数篇を選んで左に掲出する。「習俗歳時記」「巫祝見聞記」は非常に優れた報告であるが、単行本であり長文であるので割愛するとして、直接に北橋村民俗を扱ったものの中から選んだ。本報告書中のものとダブる点もあるが、採録時が古く、また筆者の独自の見解も披露されているので、あえて再録した次第。責任は再録者にある。(都九十九一)

青年と結婚式

今井善一郎

赤城山西南麓では、結婚式は青年が司会する。北橋村では、昭和十六年から村極めで新体制により神前結婚と変へた。その理由は繁雑な形式と、青年座敷といふ酒宴の弊害をのぞく為と云はれたが、実際は工業の地方発展による青年層の不足によって、最早この方法は不可能の期となつていたのである。

結婚の日取が決定すると、その家の主人は部落内の青年を一軒々々訪問して、世話になり度き旨の挨拶をする。当日青年は揃って手拭一ヒズに祝ひ金若干(最近は五十銭位)をそへて早朝からよばれてゆく。

午前中に新郎とその近族の男子が「男一元」と云つて、先方へ初客にゆく。この時結婚品を車などに曳かせてゆく。結婚は単筒や衣類等可成り大きな荷物となる。その後で青年は式の準備を始める。座敷飾りの島台は三宝の上にする。牛男入参等を用ひて鶴亀などの形を作る。鏡子につける男蝶女蝶を折り之を結へる。蝶を結へるコヨリの数なども青年の記憶すべき技術に属する。

午過ぎに男一元が帰って来ると、先方からの男一元が嫁と共に来る。この時は先に持参した結婚品は嫁の荷として持参される。荷物は先に到着するが、一行は中宿といふ近隣の家を借りたに休み、身仕度を整へる。

夕刻になると、青年は揃って中宿に嫁迎へにゆき、中宿から行列を作つて来る。先頭に定紋のついた提灯を二ヶつけて来る。嫁の後は先方の見届がついてくる。婚家のカドから謡が始まる。足並にそろへてうたい乍ら進む。ニハの中頃に竹竿を一本横たえてその両側に男蝶女蝶をつぐ少年少女が一人づゝいて学殻の松明を燃やす。嫁は竹竿をまたいで、縁先へ着く。縁側には青年を上つた程の年頃の人がいてカド謡の

文句を受けて謡ふ。謡は高砂である。「高砂やこの浦舟に」といふ文句で最後の「はや住の江につきにけり」の一句だけ歌つて中年組がうたうのである。この為庭中で謡が終らない様にうたひ初めに注意せねばならない。この前に「旅衣」といふ謡を一つ歩き乍らうたう場合もある。

嫁が縁先に到着すると「待ち女房」といふ近隣で依頼された女が二人黒の紋服で出迎へ、その中一人が普笠を嫁の頭上にかざす。嫁は縮帽子を用ひず、角かくしといふのを用ひて、嫁座敷へ上る前に縁先で家の母と初対面し、嫁が立ったまゝ母子の盃をする例もある。

座敷に入るとオチツキを出す。これは茶と菓子の後に雑煮餅とか寿司とか簡単な食事である。これがすむと一元客は別座に去る。手狭な家ではオチツキも一元の休憩も中宿でして嫁だけ入って取り結び後に一元が来る例もある。

座敷が改まるとトリムスの式になる。床の間を背にして向つて右へ嫁、左へ女仲人が坐る。見届けの親戚と仲人は別座に坐る。向つて右に折れて待ち女房二人が坐り他は全部青年が四角に並んで坐る。新郎は一番下座に嫁に正対して坐る。大抵二部屋を通じて用ひる。座の中央には島台、三つ組盃一对男蝶女蝶の鏡子台一对と之をつぐ男女の子供が二人坐る。世話番の青年は中頃に坐り開式の寿詞を述べる。それから蝶合せをする。即ち男蝶の鏡子の口から女蝶

の口へ酒を注ぎ、鏡子を相対して前におき、双方の手で柄をもつて底を置につけたまゝクルリとまわりさせる。次に女蝶から男蝶の口へ注ぎ、又、まわりして今度は男蝶から女蝶へ酒をまざる。男蝶を少年女蝶を少女がもつて坐る。謡「所は高砂」がうたわれる。これがすむと、男蝶は嫁に女蝶は婿に進める。盃に注ぐ時、三回づゝ軽く鏡子と盃をあてゝ注ぐ、双方はして男蝶女蝶が各左まわりして婿と嫁の前に坐り、二重ね目の盃に酒をつぐ、今後はすぐ呑まないで下へ置く。謡「四海波静かにて」が揃つてうたわれる。謡終つてはす。男蝶女蝶が又かわる。

一番下の大盃で注ぐ盃事終つて一同正座。庭の砂は金銀の「がうたわれ」。この謡の途中、婿は中座させられる。その時期は青年の中で指示する者があるのである。しかも青年の中に婿がないとて婿の近くに坐つた者をなじる。之に對して謡に身が入つて迷見失つたなど答へる。これを取り結び終り、仲人は青年に手拭一ヒズづゝ配つて挨拶する。嫁は別座に去り、この一番の座敷が青年座敷になって、充分飲み且つ唱ふ。その始め、中及び終りにやはり謡が入る。それは各種各様であるが最後のだけは「千秋菜」を唱ふといふまじひして帰る。晩近く迄飲む事が昔はあつた相だが、今はそんな酒豪も、酒そのものもない。

嫁は別座敷で家内中のチカズキの盃をし、又土産といつて持参した大袋の菓子を出して近隣

の女衆と一緒に茶を呑む。これは大変にぎやか
なよい習慣と思ふ。

先方の嫁をくれる方でも青年がよって、やは
り嫁を送り出す。仲人は青年にやはり手拭を
配って、挨拶して嫁をもらって来るのである。
嫁が出たあとで青年座敷が始まるのである。

翌日嫁の里帰りの時、女一元が一箱に初客に
ゆく。嫁だけ一泊し、その翌日嫁を送って里方
の女一元が来る。

青年は結婚式に呼ばれる日も羽織は着るが袴
ははかない。半天着は禁物である。此の頃の様
に青調服しか表着がなくたっては青年司裁の結
婚式がなくするのは当然である。村ではこの一
方法しか結婚法を知らなかったから、新しい神
前結婚は今はまだむづかしいと云はれている。
村の青年は正月の二日がこの日を「語ひ初め」
と云って吉例の練習をするのである。

(民間伝承八の四)

箱田のイツケ

今 井 善一郎

赤城山西麓の箱田(勢多郡北橋村)は、木
曾氏遺臣の子孫の開いた村で、県社木曾三社神
社(大字下箱田鎮座)を中心として発展したが
こゝには木曾の党ばかりでなく一般に一家の結
合が著しい。

今その中、大字箱田に於ける事例を述べる。

箱田には村社木曾三柱神社(前記県社の分社)
を中心として木曾党では木曾、根井、今井、萩
原、高梨の諸氏が、其他の諸代氏の氏には松
井、梶間等の諸氏が、其の他の富岡氏戸部氏等が
是等の諸氏は皆氏毎の墓地と之に附属する
共有地を所有して居って、一家は一家として、
各戸の財政以外に別箇の経済を行つて居る。共
有地は古は山林であったが、現在は開墾されて
畑となり、一家内の或は他組の者に小作させ、
その収入は一家の年番が管理する。

各一家の氏神は木曾の党は木曾神社で、其の
他鈴木氏は深田神社(この地の古名は深田郷と
云つたといふ説がある。鈴木氏は今はない)。
富岡氏の十二神社(これは山神である)。戸部
氏(元木曾党の小野沢氏)の八幡宮等があ
る。しかし之等の小社は皆明治の合併に木曾神
社に合祀されたので現在祭典は共同して村社で
行ふ。右の外に維新以後焼失した山口氏外の小
氏族は、氏のみ結合して、バラバラ、一家な
る一団を形作つて居る。これは墓地は共有であ
り、資産はないけれども一家待或は先祖祭りは
同様に舉行しているのである。

一家待は各氏によって日が異なるが、最近は一
月二十一日木曾党の先祖祭の日に行ふのが多く
なつて来た。一家待の前日各戸では一名づゝ出
て墓地を清掃する。当日は早朝当番の家へ集つ
て会食をし、其の後鎮守に詣りて祭典を行ひ、

菓参をして解散する。一家によつては会食を夜
にして酒飯の所もある。又或る家には神社の祭
典なしに今一回秋の彼岸頃先祖祭りをする家も
ある。一月二十一日は木曾公の命日と信ぜられ
ている日である。勿論村社の法定の祭典はこの
以外に存するのである。

人数の多い一家では従つて共有地も多く、そ
の収入が可成見られる。その使途は一樣でない
が、主に一家中の数人が交代で旅行するのに用
ひられる。木曾党の諸氏は古く信州の先祖の発
生地を訪れるのを唯一の目的としていた。主に
木曾谷の史蹟廻りである。近年に至つて比較的
安易に旅ができる様になると、同一の所を見る
よりといふので、他の地方へ旅行する道がひら
けた。人氣のあつたのは伊勢参宮で、これは毎
年交代で費用を使った。又一家によつては数年
乃至数十年貯蓄して、一家全体の大団体旅行を
する事もある。先年伊豆の大島へ旅行した萩原
一家の者が、暴風の為ひどい目にあつた話などは
土地の一つ話である。一家の財産の使途にはこ
の外、神社墓地の改修寄附や、無尽庫の配布制
や、只の一家待の会食費のみによつて各種の差がある。
県社の木曾神社のある隣の大字下箱田では、
やはり高橋氏なども先祖祭をして居るが、どの
氏も共有財といふものがなく、従つて一家の結
合は箱田より弱い。これは村の古城跡などが物
語つて居る様に、ある時代に、一家の様な村落

の平等的な結合よりも、刀と鎌とを交互に腰にせねばならぬ必要から生じた家惣、譜代等の百姓の存在の爲、むしろ村の結合が上下依存的なものが強かつた爲かと思はれる。従つてこゝでは地縁団体たる「曲輪」の団結が強く、部落神は氏神といふより曲輪の神である。尤も主勢力はやはり木曾の党に存したから、鎮守の木曾神社は各段階を通じての總氏神では勿論あつた。

曲輪の団結の紐帯にはやはり共有地のある例がある。それは城山の「下曲輪」であるが、その曲輪の人達の大切な土地であつた城山の領を半ば木曾神社有とし、半は、曲輪有として居るのである。この収入は備荒貯蓄とされる。

しかしこの大字でも一家の結合がないのではなく、飯田、今井等の諸氏は、隣保班の結合を一家でなしている例も存する。其の他家の禁食は一家に共通して、高橋氏の瓜、奈良氏の玉蜀黍、狩野氏の鹿等種々のものがあり、其の他正月の門松、餅、諸飾り等に至る迄氏の共通生活条件の名残は猶少なくないのである。

一家の事は此の地方では「マキ、上一マキ等も云ふが一家が一番の通称である。用得多い博徒連の「何々一家」はこの語の転用であるが、實際の一家はかゝる親分子分の関係は含まない（たとへ家惣の如きでも）。本家以外には純粹に平等的氣分の同族結合である。大体この地方は各村毎に「何村幾苗」といふ工合にこの一家

の結合は猶残存している所が多い。そして現在でも一家の多い所程村柄が安定しているらしく感じられるのである。

(民間伝承八の五)

串立つ神

今井善一郎

群馬県では一般に、旧時代の村は今の大字になつて居る。村を通ずるやゝ主要な道路には、一つの大字と、次の大字との境に斎串が立つて居て、各々の村へ、外からの邪惡の入つてくるのを防いでいる。これは、県下全般の風習ではないが勢多群馬等の郡では、可成に普及して行はれている風習である。吾妻郡や、北甘楽郡などの例には、串の代りに、道を横切つて高く注連縄を張る所もあると云ふ。

赤城山の西南麓地方では、この村境の斎串の事を一般に「八丁注連」と云ふ。八丁注連は、枝付きの竹の幹の一部に縦の切り込みを穿つて、そこに巾二寸長サ七寸程の塞神三神の札を挟み、白幣をつけるのが普通の形で、その串様の竹を路傍に立てるのである。勿論、村境であるから、原則的に隣村の斎串と向ひ合つて立てられているのが多く、境に岐路の遇合した所であれば一本立ちの八丁注連は少ない。串の形にして立てられるのは神の札であつて

表には、「塞神三神御守護」「塞神三柱大神守護」など記され、赤い神靈印と、神主印とが捺されている。風雨にさらされて表紙の破れたものゝ内を拝見すると、「八雲彦命、久那土神、八雲姫命」と三つの神名が三行に記されている。即ち「サヘノカミ」である。私の村（勢多郡北橋村）では、「八丁注連」は、夏冬の二季の大祓式の後に、村の鎮守の拝殿に於て（つまり村中の罪穢を祓ひ去つて）氏子共は各々小さな櫛にヌサのついた玉串で自分の身を左右に戴つたものを、利根川にまどめて流した（後に）この塞神祭（これは祭主が塞櫛祝詞を上げるのみの事であるが）をして、この札を作り、村の各道の端に配布するのである。

私共の地方は、神葬祭なども多く、非常に神社神道（これは嚴密の意味でないかもしれぬ）の盛な所であるが、この串の形にしたものを村境に立て、善惡を防ぐ風習は明治頃からの習俗ではないらしい。本年七十九歳になる神職生方一磨氏も、その起源は明治期ではないと申して居られる。それは又公の神の道に属しない別種の八丁注連の存する事と知られ。この地方には、普通「御嶽講」といふ山嶽信仰の先達が、沢山住んで居て、専ら上州の武尊山を信仰の対象として、講社を形作つているが、この人達は今猶荒行をして、火渡り剣渡り等の外、種々の秘術を行ふのであるが、この派の神道の人達が又一種の八丁注連を作る。それは一部落全部御嶽

講の聚落では、やはり部落全戸集まって、当番の家で春秋に、祭りを行ひ、その時に、その聚落の四方の道傍及び大凡聚落の中央に、この八丁注連を立てるのである。この斎串も村のそれと殆ど形式が同じであるが、いくらか巾広く、縦短かである。札の内容はまだ覗つたことがない(私は、御嶽僧徒でないが、何でか恐くて破つて見る勇氣がないのである)故不明であるが、表には、中央に立てるのは「中央御守護」、東方の聚落のはずれに立てるのは「東方御守護」といふ様に、書かれてゐる。これらの点からみて、串立ちの形で村を守る形式は古いものと、私は考へている。

八丁注連に関しては、今日一般には余り関心されてゐないらしい。私がこの件について質問しても、事實存在し乍ら、存在を知らない人が可成り多いのである。しかし一方諺の中には未だ生きているものがあつて、昨年、藪の仲買商が喧嘩している時の言葉に「俺も八丁注連を越へて商売して居る者だ」と云つてゐるのを聞いた。この外「八丁注連の外は仇だと思へ」、「八丁注連の外へ出たら氣をつけて喋れ」、「などはれてゐる。要するに八丁注連が、一種、村の親和力の限界を示したものであつた時代が、余り遠くなく存した事は事実であらう。

八丁注連の注連といふのは、この斎串の性質を表現しているが、今夏(昭和十七年八月)隣村横野村で見た一例は、神札の斎串の下に、棒

注連と移の小枝が挿しあつたのがある。串刺の形式は、柳田先生の地名考説中、矢立峠の御説にもある通り注連と等しく一種の占有を示すものから、次第にその中に対する排他性、神聖性を確立して行つたものの様に思ふ。八丁の意味は氣持ではわかる様に感ずるが、説明するには力が足りない。

之を要するに、八丁注連は境を守り、内を安らかにする斎串で、現在の神職先達は、串の内容に神格を与えて居るものであるが、串そのものにも、充分の規範力のあつた事もあると思ふのである。全国的にこの種の習俗を知り得れば幸甚と思ふ。(民間伝承八八)

ボンデン田小考

今井善一郎

民俗関係の考察も他方の小事だけで之をまとめる事は不可能な事なので、結局は中央の先輩のまとまつた考へに基いて地方の事実を見直し始めてその意義を悟るような次第なのであるが、ボンデン田に関するその小例をこゝに報告する。

農地委員をしてゐると面白い事に出会はず。勢多郡北橋村大字八崎字麻千場(オホシバ)のある畑は不在地主の所有であつた為当然開放の對象となつた。しかるにその小作人は過小農家

であつた故に自作農として不適格とされてその畑の買受けを果て認めてくれなかつた。この農地委員会では誰か適当な人をとさがつたが、その農地人以外には誰もその畑の持主となる希望者がない。それはその畑を通称ボンデン畑といつてその持主や耕作者に崇るといふのである。耕作者はとかく病人や死者が出るといふ。そこで土地台帳で調べてみると最近は、皆他町村の人の所有を転々としてゐるが一番古い持主は関口といふこの村の一番古い名主の家のものである事が知れた。この関口氏は古い地持で定名主といつて附近の村に大概入札制の名主であるにかかわらず、定の家柄で世襲した名主の家であつた。

北橋村で一番有名なボンデン田は大字小室字両坂脇にある。これは耕作者に崇る事最も熾で屢々荒地として放棄され又特殊家が出て耕しては親が死んだり馬が死んだりなどいふ事をくり返してゐる。これも台帳で調べると明治以来八人の人に転売されて居りその終りの六人は皆他市町村の人である。尤もこの地の古い所有関係は特殊な人と思はれる点は見出せなかつた。苗代の為田に水をはるとその水にボンデンの形が影をうつすといはれてゐる。一番終りの物語は戦争中に産業組合に勤めていた戸部さんといふ曹洞宗の僧侶が率先して迷宮私ひをやつて田植をしたのであつたがその時用いた下田氏(現農協組合長)の馬が死に戸部師も又病率した。猶最近聞いた話には其頃私の母も病没したので

あったが当時の噂には村長であった私の父がこの事に力を入れた故だと噂されていたといふ。これには私も一驚した次第である。しかしこの田は所有関係からその始原を極める事は今のところ不可能である。

大字下南室にあるボンデン田は字馬落といふ所にありこれは乗馬とかゝをする観音で有名なところであるが、この田は格別崇りの話をきかない。従つて所有関係も二、三変遷はあるが、格別遠隔の人に無理にモテセタ様な形はない。たゞ古い所有者の本家は今没落して無いがこれが又昔時苗字御免の家でありこの村での旧家であった事は考慮の必要があらうと思はれる。此村の口碑にボンデン田といふのは古い時代に田畑の測量が行はれた事がありその時用ひたボンデンを納めた所だといふ。この場合のボンデンといふのは現在の測量のポールに当る。古い絵によると卒の先にボンデン様の紙の目印をつけた標を用ひて測量している図がある。余談であるがこれと似た話がこの地方のシャタジといふ神について云はれている。これは測量の繩を納めた社だといふ口碑であるがこの尺可も各村(大字)にあつたりし形跡がうかがわれる。その一、

二はやはり激しい祟をなす神である。
大字真壁字水泉寺のボンデン田は同地の桂昌寺の所有であつたが、これも古くは萩原某といふ家農の所有地であつたといふ。やはり不幸の事があつて寺に納めたと云はれている。これは

村の鎮守の前の良田で、畦畔にも藁の小祠がある。

大字真壁には今一つ崇り畑がある。これは字太夫谷戸(ガイド)といふ所の太夫様と通称する畑で今は柔畑になつて居り小さな塚の上に石宮が一つ立っている。これは何か不慮の死をとげた太夫様の怨霊を祀るといふは、その太夫といふのは旅の神主のような人であつたといふ。太夫谷戸には家は一軒もないが近くの字には人家が多い所である。最近の持主も病人が脱出して何処かで見てもらつたとかの事でこの石宮迄道をつけよと云はれてその通りしたら病人が癒つたといふ。この畑も持主が五軒ほど變つたがやはり古い台帳で調べてみるとこの村の名主木暮長太夫家の持物である事実が知れた。

以上で私は自村内の忌み田、忌み畑の例をあげた。数は多くはないけれど大体斯様な田畑がその源は相当重要視された土地であることを知り得ると思ふ。
而してその位置から云つても、おそらく村の神事に用ふる土地であり、之を村の主要な家で管理して居たものであらう事も大凡察せられる。崇りは勿論後の変化であつた事も一応解説せられるであらう。水鏡にうつつたといふボンデンはやはり昔の神を招き降ろした霊代の心から心に伝承された幻影であつた事と思ふ。何より手がかゝりとなる事は、ボンデン田、ボンデン

畑といふその名前にあらう。今も村の行者(武尊山講社の人達)は屢々ボンデンを立て、神を招き之に祈つて居る。それが神の下り給ふ田畑でなかつたらこの名のありようはないと思ふ。且つ一つの村に一つづつボンデン田があつたといふ云ひ伝へは、まして村毎の神祭りや農事との関係を考えさせないではおかぬのである。

柳田先生のお話にイミ田は村の氏神に供へる米を作るための村で最初に種を下ろす苗代であつたらうとの事である。私の村のボンデン田やボンデン畑は、おそらく先生の御言葉に近いもの解釈されるのである。この小考はそのさゝやかなししかし楽しい跡づけである。

(二四)一、一六(上毛民俗 15)

村持地と共に消えるもの

今 井 善 一郎

今次の農地解放は戦後行はれた改革の大きなもの一つであるが、その主義精神については私も賛同するがその実施の面に於ては、一、二遺憾に堪えぬものがある。その中こゝに記して置きたい一つは村持ちの土地の処分についてである。勿論之は純粹な民俗学の問題ではないがこの種村落社会学或は社会経済学方面の興味から民俗学に入った私はこの問題をやはり民俗学に

関連したものとて採り上げて見たい。

問題を明白にするため具体例をあげる。それも私自身の関与した村(勢多郡北橋村)内の実例から拾ってみる。私の住む大字下箱田の氏神木曾神社といふのは私共木曾氏遺臣の裔孫と称する連中が長く血食し来った神社であるが、この神社に社有の山林と農地があった。之は名義は神社有であるが僅少な収入(年百四十圓位)は祭典費等に用ひたが土地の利用は氏子である村人の共同してなす所に委ねられていた。山林は大体村民の燃料源となつて数年毎に平等利用されたが、農地の方は二町歩足らずの土地であり勿論平等利用と言ふ訳にいかないから村人の一人負担(戸数等級割が全村の平均の人)以下の人に低廉(一反当金五圓位)な小作料で貸しあつた。この農地は四年毎に貸換えが行はれ一人負担以上に資産の増加した人は借地権を他の平均以下の人に譲つたのである。耕地は平均四五畝位に小分されていたら可成多数の家がこの土地を借りる事が出来た。

之が今度の農地法により社有地は全部開放される事となり現耕作者に売り渡される事となる。村民も(勿論私も)県の役人に交渉して良俗の維持を図つたが規則というだけで受入れられないのである。その経過はこゝでは必要ない故記さないが、ただ日本村落の旧い民俗の中には斯様な村落内の自救作用、今日の言葉でいう民生事業の内容をもつたものがあつた、それが今

度の法令で失はれたという事を明記しておきたいのである。成程現在の耕作者も充分法の保護を享受す可き資格があるかもしれないが、将来の村民の保護をこの法律は含んでいないのである。村の旧慣は常に新しい貧農の発生を予想し将来の小農の生きる手段を給してゐたと云えるのである。

次の例は大字小室の大小室部落のもつていた通称「孫左衛門」と云う土地についてである。之はその字の一溪谷の水源にある「大谷の堤」という貯水池とその水域を含む相当広い田を交えた農地で、昔この貯水池の番人であり兼ねてその土地の所有者であつた孫左衛門なる人物が切支丹か何かの疑で欠所になつた為生じたと伝説される村持の土地である。

こゝも大小室の住民が比較的安い小作料で耕作しその小作料は村の郷倉に納めて之を売却し、その収入は全部村の費用に当てゝいたのである。道路橋梁の修理、警火消防の設備等は尽くこの収入で支弁され又時には孫左衛門の供養と称して村民相会して飲食する等大小室の部落はこの土地の存在によつて他から羨望されてゐたのである。この部落有地も法律上共同農地であつたが当然開放された村の費用は村民の各自支出する所となつた。

第三例は大字箱田にあつた一家持の土地である。之は所有者が地域的団体でなく同族団体である点が他と異つていた。(箱田の一家に就て

は「民間伝承」(八ノ五)に報告してあつた)

此の地の同族団体が最近迄やゝ強固な結合を保つてゐた理由はこの一家持の土地が重大な原因をなしてゐる。こゝでは苗字毎に共同の墓地と共に墓地に附属する(昔は山林)農地を共有してみたのである。この土地をやはり安い小作料で適當な借手に委ねて耕作させその収入によつて一家持と称する先祖祭りを毎年行ひ來つたのである。之は同苗相会して墓地掃除と展墓の後当番の家へ酒食を持って一日の飲を尽す仕組であつたが、農地からの収入はこの費途では勿論余つたので従來の例では之をもつて交番に伊勢参宮をしたり、祖先の発祥地である木曾谷の社寺を訪れたりする等、とに角信心と他郷の見学とに使用されてゐるのである。普通の講組織よりも各人の負担は軽かつたのである。この土地も当然開放され之に伴ふ旧慣もこゝで終止符を打たれる事と思はれる。

第四例は農地でなく山林であるが私共の村の東北端は全体傾斜した村の最高部に當るが赤城の山麓地帯に属しこゝに村内各大字の共有山林が細長い傘割になつて整然として存在してゐる。大体赤城山麓の植林は幕末から明治にかけて地方の先覚者が命がけの仕事として之を図つた所であるが後に赤城興組が發生し肥料地の拝借と私下げに成功し、その間山麓の各村は各自の割当地帯に一面の植林をなした來つたのである。私の村の大字赤城山という地帯もその一部

であるが、こゝが開墾適地として興農地委員会の買上る所となる事になった。県で適地と称するのは全くの自然的条件に於ける適地で、しかもそれは入植者にとってのみの自然的条件で林下に谷頭の泉數ヶ占有しこの水によって灌漑している下流村民の水不足や又洪水時の（現実その例は激甚なるものがあるのだが）被害の如きものは治ど無視して立案されていて、この泉のみでも立派に不適地と言ひ得るのであるが、この文の目的はそこない故今之以上記さない。扱てこの赤城山麓の大字別所有地は当然其の分割所有の当初には旧時の村落の共同所有、法的には能有の形と共同利用即ち入会の性質を予想して分割されたものである。現在では其の所有關係は普通通りの大字共有（法律的には數人の個人共有名義となる）、大字内の曲輪（小單位の部落）持、或は個人持に分割されているが、その利用形態は關係住民の入会採草地として實際は使用されているものであり、又各大字としては今日之以上に広い大きな秣場はないのである。換言すればこの土地の利用者は法的には數百名にすぎないが實際には旧來の入会地採草の慣習をこゝに見るのみであるが、その慣習の底には立派に「山林を持たざる者」に与えられたる山林利用の實際權が保有されているのである。私は農地解放は一種の社会主義的政策と思つてゐるのであるが、十數戸乃至二十戸位の

新農家をこゝに入植させて三町もの不成算耕地を与ふる事と、この旧慣をそのまま存置し或は助成する事とその社会的意義の差如何と質ねたものである。

以上は方一里にも満たざる私の村に起つた村持（及びその類似の）土地の解放の現状である。この様に村持の土地には種々の形式があり、その発生原因も又区々である。しかしその利用状況は大體にして自然発生的でありその運用は民俗字の眼から見て非常に興味のある伝承性を帯びている。成程私のあげた諸例はいづれも保守的であり懷古趣味のあるように思はれよう。しかしこの様な共同連帯的な平等主義が日本の村落にはあり、それが経済生活の面に迄存在して居つたといふ事は充分考察されてよい事と思ふ。民主主義の世界に仲間入りするに當り私達も平等の生活を企圖していた民族である事を実証しておきたいのである。村落に於ける親分子分の關係はボス的な面より、より相互扶助的な面が多かつたのである。それをしも猶上下的關係で不可なりとするならば、右述の如き平等關係の相互共存の制度の我に有した事は私は民俗字徒の一人として告げたいと思ふのである。社会主義的政策が単に外國の直訳的方法でのみ採用すべきものと私にはどうしても考えられない。（二四、一、二三）（土宅民俗 十九号）

索引

アールヒューボ	一八	アツセアゼ	一五
巫船舞	三	栗もち	三
赤城型の民家	三	栗もち	三
赤城講	三	安産祈願	四
赤城興業組合	三	あんどん銅い	四
赤城神社	九	イイナズケ	三
赤城登山	三三	いい夢	三
赤ナス	三三	家の経済	三
赤谷の十二様	三三	家の紋所	三
アガリハナ	三三	生き盆	三
アキアゲ	三三	イキボンブルマイ	三
アキゴ(巻)	三三	イギリス巻	三
アキナイ	三三	育児	三
秋葉講	三三	胃けいれん	三
秋祭り	三三	池田イッケ	三
アゲイワイ	三三	石かつぎ	三
アゲガイ	三三	石出し	三
アゲシタ	三三	石田姓	三
麻	三三	石田地蔵	三
朝イチゲン	三三	イジメ	三
アサウラ	三三	石原の庚申さん	三
アサグイモン	三三	衣生活の禁忌	三
アサヅクリ	三三	伊勢講	三
朝湯	三三	イタノマ	三
足	三三	板屋根	三
		イチマキ・イチマケ	三
		一人前の仕事	一五
		一人前の食量	一五
		イチノフ	一五
		一番草	一五
		胃腸	一六
		一里塚	一六
		イッケ(一家)	一六
		イッケタミアイ	一六
		一家結合	一六
		一家待	一六
		イツチヨウメイ	一六
		いつつけおび	一六
		イツツメ	一六
		一本バリ	一六
		イツベイモン	一六
		井戸	一六
		糸綱売り	一六
		井戸神様	一六
		糸とり	一六
		糸ひき	一六
		糸南市	一六
		稲荷様(神社)	一六
		犬ツバシキ	一六
		戌の日	一六
		稲刈り	一六
		井上姓	一六
		イハイヅラ(馬)	一六

胃病	三六
いぶしがいい	三三、三六、三六
イボ	六〇、〇〇
今井イッテ	三〇
今天狗	二〇
芋がら	二〇
イモ田楽	二〇
いもめし	二〇
忌明け	二七
忌田	二八
衣類行商	二八
イロリ	二八
岩戸のくずしの舞	二八
岩戸の舞	二八
隠居	二八
隠居免	二八
請負い	二八
ウシ(漁)	二八
牛	二八
氏子総代	二八
丑の刻まいる	二八
丑の日	二八
ウシロソウモン(馬)	二八
細女の舞	二八
失せもの	二八
謡初め	二八
ウチシゴト	二八
打身	二八
うつ木	二八

卯月八日	三三
ウデマンジユウ	三三
うどん	三三
うどんぶるまい	三三
鱧	三三
ウナギド	三三
ウブアケ	三三
生力姓	三三
産着	三三
初生毛	三三
徳子坂	三三
馬	三三
馬落ち場	三三
馬についての禁忌	三三
馬のくせ	三三
馬の相	三三
馬の食べすぎ	三三
馬の病氣	三三
ウマヤ	三三
うまやばしら	三三
生れかわり	三三
うるか	三三
ウルシかぶれ	三三
運送	三三
運搬具	三三
ウンマンノリ	三三
絵売り	三三
エニ(絶) エニッコ	三三
エニゲーション	三三
エニ仕事	三三

エニバサミ	三三
越後笠	三三
越中	三三
覆の薬師	三三
絵の上手な人	三三
海老島	三三
えびすさま(講)	三三
エボ神	三三
エンガワ	三三
縁切り	三三
えんばさん(人)	三三
オオサン	三三
オオガマ	三三
大食いの人	三三
オオグライ	三三
オオザル	三三
オオトウパン	三三
オオナ	三三
大野	三三
オオタケレー	三三
大ミソカ	三三
大谷の堤	三三
オカ	三三
オカオカタシ	三三
オカツテ	三三
お願果し	三三
オカビエ	三三
オガミ講	三三
オカメ石	三三

お飯屋	三三
オカランダチ	三三
御高僧頭巾	三三
オカマノホ	三三
オキカシカ	三三
オキバリ	三三
オクリ	三三
オク(リ)ノデイ	三三
送り火	三三
送り盆	三三
送り待ち	三三
オクンチ	三三
オコアゲイワイ	三三
オコエ(食)	三三
オコチャン(食)	三三
オコトシマイ	三三
オコト八日	三三
おこもち	三三
オコモリ	三三
おこわに汁	三三
オコンマヤ	三三
オサキ	三三
オサナブリ	三三
おさんじよさま	三三
押板	三三
押し麦	三三
和尚	三三
おしらさま	三三
オシラマチ	三三
おそうぜんさま	三三

オタキアゲ	三〇、一〇一
オダテノモツコ	一〇五
オダナ	三〇
オダナサガシ	三三
お標参り	三三
オタバコ	三六
オタマ	三六
オチカツキ	三六
オチツキ(の膳)	三六、三七
オチャゴト	三六
男縁女縁	三六
オツカサンカブリ	三七
オツキリコミ	三七
おつけねじ	三七
おつみ	三七
おでき	三七
おてっこもり	三七
おてのこぼ	三六、三七
オチマル	三六、三七
男イチゲン	三六、三七
オトウカ	三六、三七
オトウカツビ	三六
お仲間	三六
オトナ	三六
鬼ヶ島	三六
おぼあさんかぶり	三六
オハダロ	三六
オハダロツボ	三六
オバコ	三六
オハリツコ	三六

オハンギョウ(地)	三三
オビトキ	三六
オヒマチ	三七
お日待講	三七
お百度まいり	三七
オビヤツコサマ	三七
オホンバ	三七
オボタテの飯	三七
オボの神	三七
オボの泣声	三七
おぼやけ	三七
オミタマサマ	三七
オヤブツ	三七
オヤマツキ	三七
折目切目	三七
大蛇退治の舞	三七
御嶽講(意)	三七
女イチゲン	三七
女仲人	三七
女の朝口	三七
女の市げえり	三七

【か行】

葎の祝	三六
葎の神	三六
葎の禁忌	三六
葎の種	三六
葎日履	三六
返し針	三六

かかあ天下	三六
家格	三六
カカリツト	三六
カギ竹	三六
カギバナ	三六
かくおび	三六
カタシゼニ	三六
かくね芝居	三六
神楽	三六
カゲエ	三六
かけぎれ	三六
カゲメエリ	三六
カゲメエリ	三六
カサノツユ	三六
飾りかえ	三六
カジ	三六
カジカ	三六
カシヤタボ	三六
観音屋の舞	三六
火事よけ	三六
ガスジヨウリ	三六
カズトリ	三六
かせぎの平次	三六
かせ	三六
風の名物	三六
河川地形	三六
家族の私財	三六
かたあげ	三六
かたぐい	三六
カタケ	三六

カタゾウモン	三六
カツギ石	三六
カツケ	三六
カツ(ヘガズ)草履	三六
カツチキ	三六
カツバシキ	三六
カテメン	三六
門入れ	三六
門留い	三六
門松	三六
カナシバリ	三六
金物屋	三六
ガニ松	三六
カネゴエ	三六
カネツツ祝い	三六
狩野氏	三六
歌舞伎	三六
カマガケ	三六
釜神様	三六
カマド	三六
カマド神	三六
釜の口あき	三六
髪洗い粉	三六
神送り	三六
神オロシ	三六
神かくし	三六
カミソリツボ	三六
神だな	三六
雷の話	三六

カタゾウモン	三六
カツギ石	三六
カツケ	三六
カツ(ヘガズ)草履	三六
カツチキ	三六
カツバシキ	三六
カテメン	三六
門入れ	三六
門留い	三六
門松	三六
カナシバリ	三六
金物屋	三六
ガニ松	三六
カネゴエ	三六
カネツツ祝い	三六
狩野氏	三六
歌舞伎	三六
カマガケ	三六
釜神様	三六
カマド	三六
カマド神	三六
釜の口あき	三六
髪洗い粉	三六
神送り	三六
神オロシ	三六
神かくし	三六
カミソリツボ	三六
神だな	三六
雷の話	三六

雷よけ	三三、三四
神迎え	二六、三三
神モドン	二四
紙屋	二六
カモイ講	二五
茅刈り	二五
カヤの正月	二五
萱屋根	二五
粥	二六
カユカキ棒	二五
かゆをたく日	二五
からすどまり	二五
鳥鳴き	二九
カラミ餅	三三
からむぎ	二六
かりあげ祝い	三三、三五
カリシメク	二七
振り分	二五
家例	二五
川木	二六
川セガキ	二六
川通し	二五
川流れ	二五
カワビタリ餅	二六、二七、三三
カンカン山	二五
元日	二六
肝蔵	二五
官地ひき戻し	二五
観音講	二五
観音さま	二二、二五、三五

願果し	二六、二八
眼病	二五
祇園	二五
祇園荒れ	二五
ヤキン	二五、二六
着こぎ	二五、二七
キシリ	二五
ヤシヤゴ	二五
傷口	二五
木曾姓	二五
木曾道臣	二七、二八、二九
木出し	二九
義太夫	二六
忌中	二六
切ってはならない木	二六
キツネツキ	二五
狐に化かされた話	二五
狐火	二五
嗣笠さま	二六
きび	二五
キベ(鹿)	二五
キヤ(カ)シャ	二五
行	二五
因免食物	二五
行商人	二六
兄弟分	二六
共有財産(山)	二六
共有林	二六
清水のおこもり	二五

キヨメ	二六、二八
キラズ	二五
キリオトシ屋根	二五
キリカエ	二五
キリコミ	二五
義理の兄弟	二五
キリブ	二五
切乾草	二五
禁忌作物	二五
グアイ	二五
食い試し	二五
タイソメ	二五
タイチガイ間ドリ	二五
区会議員	二五
タキ	二五
草刈り	二五、二六、二七
タサガエン	二五
草もち	二五
九十九才の祝い	二六
グシモチ	二五
クシヤゴ	二五
くずまゆ	二五
クス屋根屋	二五
業屋	二五
クダリド	二五
ロキキ	二五
クチサダメの酒	二五
クチダチ	二五
クチビラキ	二五
口まつり	二五、二六

区長	二五
区費	二五
組	二五
組立式舞台	二五
組長	二五
組費	二五
組役	二五
クライヌケ	二五
倉開き	二五
グリッポー	二五
曲輪	二五
くれおさえ	二五
暮かんじょう	二五
桑市	二五
麻立て	二五
桑つみ	二五
タワデ	二五
桑とり	二五
桑畑うない	二五
クンタン肥料	二五
ケイアン	二五
けえど	二五
芸人	二五
ケイヤク	二五
敬老会	二五
ゲゴウ祝い	二五
化粧陳木	二五
結婚式	二五
ケバリ	二五
家抱	二五

ゲムギ	天
ゲヤ	二六
下痢(止め)	三六
ケンチョン汁	三六
劍幕弥次右衛門	三六
元禄袖	二七
こうで	二九、三〇、三二
コイエ	三三
講	三三
こうがいやしき	三三
郷倉	三三
江州屋	三三
講社	三三
庚申講	三三
庚申塔	三三
庚申待	三三
荒神さま	三三、三三
香奠	三三
こうど青	三三
光明塚	三三、三三
紺屋	三三
公殺	三三
強力の人	三三
水餅	三三
コガイガハマ	三三
葦影さま	三三
コカゲ神社	三三
コクサイトリ	三三
ゴクダチ	三三
五合餅	三三

五合ヤキモチ	三三
小作慣行	三三
小作料	三三
コシアゲ	三三
こしぬけのする田	三三
コシハン(コシユハン)	三三
コシマキ	三三
コジョウハン	三三
ゴジョウホウ	三三
伍助じいさん	三三
ゴセ	三三
コセクリ	三三
子育地蔵	三三
葦笠様	三三
伍長	三三
コデ	三三
コデ仕事	三三
コデ祭り	三三
コトウバン	三三
コト始め	三三
コト八日	三三
子供の手暮	三三
コナベダテ	三三
コナマキ	三三
コノハヤマメ	三三
木挽き	三三
コブガ原	三三
コベヤ	三三
古峯講	三三
小夏	三三

子守歌	三五
小屋	三五
御用生州	三五
コヤシバ	三五
子安観音	三五
コヤナ	三五
コリトリ	三五
御料地	三五
御料地払い下げ	三五
五輪さま	三五
ゴロンビキ	三五
コワイ	三五
コワケーン	三五
婚姻圈	三五
金剛杖	三五
コンシユウロウ	三五
献立	三五
琴平祭	三五
婚札と禁忌	三五
【さ行】	
さいそくまげ	三五
斎藤氏	三五
サイの神・サエノカミ	三五
財布ジツボ	三五
財布	三五
裁縫(箱)	三五
サイモンカタリ	三五
蓋ごと	三五
作業衣	三五

左京權	三五
さく切り	三五
サク立て	三五
ザゴエ	三五
笹引き	三五
ザシキ	三五
サシモノ	三五
さつまいも	三五
砂糖めし	三五
サナ打	三五
サナガシ	三五
サゲホ	三五
サヤトリ	三五
ザラ	三五
サルゴマ	三五
申の日	三五
サルマタ	三五
サルマリン	三五
三三九度	三五
葦室	三五
サンジヤク	三五
三十三軒ヨセ	三五
産婆さま	三五
産で死んだ人	三五
産の忌	三五
山王さまの屋敷	三五
三番草	三五
産婦の食事	三五
三方荒神	三五
ザンマ	三五

産見舞	七
三夜待	七
三隅亡	七
じおらまつり	七
塩谷姓	八
シオダチ	八
シオビキ	九
自家用酒	九
四月八日	九
シキイ満	九
ジギョウ	九
嗜好食	九
仕事始め	九
四十九日	九
獅子舞	九
シジ休み	九
死者の着物	九
地神さま	九
四神の舞	九
地震のまじない	九
私生児	九
自然暦	九
地蔵様の申し子	九
地掘き歌	九
シチイン(引印)	九
七五三	九
七十七才の祝	九
七社まいり	九

七夜	七
鞍	七
死の子兆	七
芝居	七
シビトン	七
しびれ	七
渋川市に結び付く	七
ジフテリヤ	七
四方固	七
ジマツリ	七
しまい正月	七
しまい節供	七
シメ飾り	七
下田氏	七
下田薬師	七
下南室の神楽	七
下南室六笛	七
シモワカレモチ	七
シモヨチモチ	七
蛇カゴ	七
シヤクジン	七
シヤクジン	七
社交	七
社日	七
ジャヌケ	七
ジャンギリ	七
舟運	七
十王祭り	七
祝儀の料理	七
十五夜	七

十三夜	七
十三夜	七
シユウト念仏	七
十二	七
十二講	七
十二さま	七
十二神	七
十二符	七
十八がゆ	七
十六	七
十六のかきばな	七
修験	七
主食	七
主食代用	七
出棺	七
出欠席札	七
主婦權	七
寿命の餅由来	七
シヨイダイ	七
正月棚	七
シヨウガの節供	七
シヨウコト柱	七
常食	七
正善寺	七
定使い	七
酒防	七
消防団	七
シヨウヤ樂	七

醬油	七
少林山の講	七
食物の禁忌	七
食用野草、茸	七
処女会	七
初潮	七
シヨツパネジ	七
女郎屋	七
シラメン	七
尻バンテン	七
ジリヤキ	七
汁かけめし	七
シロ	七
次郎の一日	七
白井の市	七
城曲輪	七
シロザケ	七
シンカイ	七
神式結婚	七
神社維持	七
しんしょう渡し	七
神葬祭	七
シンタク	七
新宅ジンショウ	七
新年会	七
神明宮	七
水死人	七
水利慣行	七
水神様	七

水神待	三
スイノウアミ	三
スクトメ	三
スキカケ	三
スケ・スケット	三
助け郷	一六、一七、一八、一九
スシ	三
鈴ヶ岳七人ごもり	三
すずはき	三
すずり石	三
スガルハフ	三
須田一家	三
頭痛	三
スッポンが御年貢あげ	三
捨子	三
住吉様の舞	三
青年会	三
歳暮	三
青面金剛	三
清六新道	三
清六さま	三
セガイ造り	三
施銀鬼	三
セヤザラエ	三
石尊様	三
嘆止め	三
堰普請	三
せち買いもの	三
せちぎもん	三

せち下駄	三
せちもち	三
節供	三
節供節間	三
セツタ	三
せつちん神	三
せつちん参り	三
節分	三
セツブタのマキ	三
ゼニガミ	三
せりつみ	三
仙石の種荷さま	三
先祖日待	三
ゼンメンマキ	三
先祖祭り	三
千匹がゆ	三
總會	三
葬式の相互扶助	三
葬式の料理	三
そうぜん・そうぜんさま、(〇豆)	三
葬送の俗信	三
贈答	三
ソウメン滝	三
ソウモン	三
ソウヤ	三
草履	三
ソウリョウ	三
葬列	三
底ぬけビシヤタ	三

ソングライ	三
そば	三
ソバマキトンボ	三
反町業師	三
村法	三
【た行】	
大工の舞	三
大黒さま	三
大黒柱	三
大根の年取り	三
代参	三
大師ガユ	三
大師様	三
大蛇久保	三
大神宮さま	三
鯛釣の舞	三
ダイドコロ	三
ダイドコロドマ	三
ダイバ	三
大般若講	三
代用食	三
代理者	三
田植	三
田植歌	三
田うない	三
高尾山の講	三
田カキ	三
高梨イッケ	三

高橋姓	三
タキ	三
竹馬	三
田下駄	三
竹ダルク	三
タケイモ	三
たたき出し	三
立石	三
辰の日	三
タチブルマイ	三
機置蒸講	三
たてまゑ祝い	三
田中一家	三
七夕	三
種子俵	三
種子の保存法	三
種子まき	三
田の草取り	三
田の字型間どり	三
タノモノ節供	三
田畑の単位	三
田ビエ	三
旅芸人	三
魂呼び	三
玉取の舞	三
田麦がゆ	三
タメクミ	三
太夫様	三
樽立て	三

ダルマ	空
ダルマ籠	四
タワゴトの十六日	二五
俵編み	五
俵かつぎ	一五
誕生餅	一五
丹毒下し	二五
ダンナザシキ	三
チカツキ	二五
力試し	五、二六
力わざ	五
乳	三三
血止め	三三
乳ばれ物	三三
チャノマ	三、五、三三
チャボ	元
中気	一七、三三
中年会	三三
中年組	三三
中風の薬	一五、三三
中宿	一五、三三
チヨイチヨイ着	五、六
チヨウ	二六
蝶合せ	一六、三三
朝鮮びえ	三、五
チヨウナダテ	元
チヨウバコ	三
丁半ぶち	一五
貯水池	元
チヨッポ	六

チョコボクレ	五
チンゲ	一六、三三、二五
チンビキ	五
ツキアイナン	三、五
ツキアゲ(食)	三六
ツキモノ	三三
告げ	一六
ツケ七日	一七
ツジエウダゴ・ネジ	一六、三三、七、元
ツツボウ	一六
ツトメアゲ	七
ツブシニンソク	五
つぶれ屋敷	五
つぶ庭	三
ツマジリパン	三
ツミツコ	三
通夜	一五
釣	三
つり橋	五
剣の舞	三六
フルギ渡り	二六
デーロコバナシ	五
出かぎ	五
てから	一六
デキモノ	三三
道船期	一五
手甲	元
テラコモリ	七
デハのメン	一五
出不足	三

テラダ	七
寺人足	三
寺の跡	三三
寺詣り	一七
寺詣り	一七
天石	三
天ガイのマ	五
てんかん	三六
天気祭り	三三
伝久様	一六
天狐子輩	三三
天狗	三三
テンサタワリ	一六
電車	五
天井ネダ	五
天神持	三三
天道柱	三
天とう念仏	二二、元
天王祭り、廻し	三三、五、一六
天文たて	三
ド(数)	一六
トウゲイ	三三、三三
トウガツ子	三三、三三
十日夜	三三、三三
ドウギ	一六
トウザンブロシキ	元
冬歪・冬歪とうなす	三六、二七
ドウシン柱	三三
道祖神	一五、三三
とうなす	二七
トウナスカブリ	七

筒場島	三三
トウハチトウゲ	三三
トウリョウ	元
燈籠つけ	五
ドタナガシ	四
トホヤク	一六
床入り	一六
年祝い	一六
年男	一六
年神様	元
年神棚	元
年とりそば	三三
としとりの豆	三三
年の市	三三
ドジョウド	元
ドソウ	一六
ドクケン売り	一六、六
ドトゲ	三三
ドブ	三三
ドブガイ	一六
ドブブケ	三三
戸部イッケ	三三
トボグチ	一六
トモノデイ	三三、三三
都丸イッケ	一六
富岡イッケ	一六
土室育	三三
トモブリ	一六
土用もち	三三、元、一六
トリアゲマゴ	一六

トリアゲジイサン	一〇
トリアゲバアサン	一〇
トリの日	一〇
トリムスピ	一七、三〇
トロロアオイ	三〇
ドンドン小屋	一〇、三〇
ドンドン焼き	一〇
間屋	一〇
香籠坊主	一〇
【な行】	
苗代祝い	三三
苗取り	五、三三
中郷の諏訪様	一〇七
ナカノマ	三三
ナガレボシ	三三
なきつたれ	三三
仲人	一七、三三
仲人礼	一七
中通り	五
長バンテン	一六
ナカフ(神体)	一〇
名づけ	一〇
七草がゆ	一〇
七つ坊主	一〇
浪花節	一〇
ナビロメ	一〇
ナミ木植え	一〇
ナミキリ石	一〇
ナミノハナ	一〇

成木責め	三〇
難ない	三〇
難産	三〇
ニアゲ	三〇
ニガ	三〇
にこわめし	三〇
二十一夜供養	三〇
二十三夜様	三〇
二十三夜待	三〇
新田万次郎の祭文	三〇
一番草	三〇
ニボウトウ	三〇
入家式	三〇
ニワアガリ	三〇
ニワ休み	三〇
姪娘中の禁忌	三〇
ヌットブウコオ	三〇
沼田街道	三〇
ねえさんかぶり	三〇
ねこのしつぽ	三〇
ネジッコ	三〇
ネジリツボウ	三〇
寝小便	三〇
ねずみ	三〇
ねつさまし	三〇
根井イッケ	三〇
年忌	三〇
年始回り	三〇
念仏	三〇
念仏組	三〇

念仏講	三〇
納棺	三〇
農事組合	三〇
農休み	三〇
ノベの送り	三〇
ノボリド	三〇
ノミの夫婦	三〇
のらぎ	三〇
ノリ	三〇
呪	三〇
【は行】	
歯	三〇
肺病	三〇
区焼き	三〇
バカド	三〇
墓直し	三〇
ハカリヤシ	三〇
萩原イッケ	三〇
白山様	三〇
ばくち	三〇
柏葉	三〇
箱ぜん	三〇
箱田伝説	三〇
箱田同志クラブ	三〇
はしか	三〇
柱のニゲ	三〇
ハタオリ	三〇
ハタオリ	三〇
ハタベリ	三〇

ハチゴロボチ	三〇
八十八才の祝い	三〇
八十八夜	三〇
はちにさされた時	三〇
ハチブセ	三〇
八幡講	三〇
八幡ま	三〇
八幡様の舞	三〇
初市	三〇
初午	三〇
初買	三〇
初外出	三〇
二十日正月	三〇
ハツキノトウバ	三〇
パツコン下駄	三〇
八崎の市	三〇
八崎六苗	三〇
八幡供	三〇
初集會	三〇
初節供	三〇
初ため出し	三〇
八丁じめ	三〇
ハツナ引き	三〇
初彼岸	三〇
初詣り	三〇
初湯	三〇
馬頭観音	三〇
花入れ	三〇
花かき	三〇

ハナカジリ(馬)	五
鼻血	二四
鼻づまり	二四
ハナバタキ(馬)	五
花ムスビ	元
ハバキ	元
ハメコロシ	二五
ハモドシ	二六
早い人	二六
ハヤドウダ	二六
流汗眼	二七
腹帯	二七
ハラゴ	二七
ハラミバシ	二八、二九、三〇
針供養	二八、二九
染出しセガイ作り	二九
春契約	二九
ハルゴ	二九
春駒	二九
ハルタ	二九
春祭り	二九
晴着	二九
ハレの食物	二九
半夏	二七、二八
晩秋蛋	二八
ばんぞう(仲だち)	二八
パンダ	二八
半田の市	二八
パンチョウウイタ	二八

ハンテン	六
香水	六
ビインヤラ	八五
ビイポリ	八
東棟に西びさし	八
光り物	八
彼岸	二六、二九、三〇
ヒキカエシ	七
引き立て	二二
ヒキズリ	二二
ひきわり	二二
干草	二二
ひこおび	元
ヒゲナオシ	二七
びしやもん講	二七
ビションマユ	二七
ヒナハイブタロ	二七
ひと魂	二七
人を批評することは	二七
ヒトカタケ	二七
ヒトケ	二七
一人古屋根の舞	二七
ヒトマチ	二七
ヒトリシゴト	二七
一人返拜	二七
ドヒロッ田	二七、二八
ヒナ飾り	二八
ヒネミン	二八
ヒノエ畑	二八
火の神道具土命の舞	二八

火玉	二五
干葉	二
火伏地藏	二二
ヒモタビ	元
ヒモドシ	二四
百姓山伏	九
百日ぜき	二五
ヒヤメシゾウリ	二五
病氣見舞	二五
日儲取り	二五
電除け	二五
ヒラ講	二五
拾い親	二五
広間型	二五
火渡り	二五
フウコロ	二七
夫婦げんか	二七
フカシマンジュウ	二七
フキゴモリ	二七
副食品	二七
藤井イツケ	二七
フジクラ	二七
藤の節供	二七
ふすまつつえ	二七
譜代	二七
舞台	二七
フタケ	二七
二又の堤	二七
二人古屋根の舞	二七

二人弓矢の舞	二八
ふだん着	六
フチ	二七
ブツツケ	二七
不動塚	二七
フナカツギ	二七
舟戸	二七
舟橋	二七
舟渡し	二七
フナ休み	二七
フレパン	二七
分家	二七
分郷五苗	二七
粉食	二七
フンドシ	二七
フンドシカツギ	二七
ぶんなぐり仕事	二七
ヘギ	二七
榎木笠	二七
ヘこおび	二七
ヘソノオ	二七
蛇	二七
蛇に化けた妻	二七
ヘビノコシカケ	二七
ヘヤ	二七
舟鹿	二七
便所神	二七
便所の禁忌	二七
便所廻り	二七
舟天様	二七

返折	三六
奉實	三三
ホウキ	三三
坊さんの年始日	一五
ホウズキ	三六
ホウソウ	三七
抱番送り	二六、三三
ホータルメン	三三
ホーナゴ	三三
ホカイ	三三
ホダイ	三三、三六、六六
ホケー	三三、三六、三六
ボタたて	一六
乾大根	二
星野姓	八六
ぼたもち	三三、三三
ボタモチ青年会	三三
ホッコカブリ	三七
ほどがみさま	三三
ほどきよめ	三三、三六
ホド分け	三三
ホマチ	三三
ボヤ切り	三三
ホラシメさん	三三
堀の内	三七
ぼろぞうり	三七
盆	三三
盆踊り	二二、三三、三三
盆勘定	三三
本家	三三、三三、三三

盆棚	三七
ボンデン	三三、三三、三三
ボンデン田	二六、三三、三三
ボンデン畑	二六
盆花	三七
ホンパン	三三
【ま行】	
埋葬	一五
マニエ	三三
前橋の市	三三
真壁の新田	三三
……マキ	三三
マキセン	元
マキモチ	元
マキ山	三三
枕団子	一八
まくらなおし	一八
マクリ	一八
孫左衛門(の土地)	三三、三三、三三
マユダマ	三三
孫の祝	三七
鯛	三三
マスド	三三
マチアミ	三三
町田イツケ	三三
待ち女房	二七、三七
松下げ	一七
マツタリ	一六

松迎え	三三
間引絵	三三、三三、三三
まぶし	三三、三三、三三
マブシアゲ	三三
まぶり	三三
豆まき	三三
まゆだま(かき)	三三、三三、三三
マユ商人	三三
藪の出荷	三三
マルオビ	三三
マリつき歌	三三
マワリブチ	三三
マンガ洗い	三三
まんじゅうがさ	三三
ミカド	三三
右ズマイ	三三
御輿あれ	三三
三島講	三三、三三、三三
水鼓みの舞	三三
味噌	三三
味噌カ	三三
ミソソル	三三
味噌玉	三三
ミソマンジュウ	三三
三田イツケ	三三
ミタマ組	三三
ミタマ祭り	三三
ミタラセ	三三
道音請	三三

ミツタイ	三三
ミツツメ、ミツメ	三三
三峯講	三三
三峯様	三三
糞	三三
糞かくし田	三三
己の日	三三
三柱神社	三三
耳だれ	三三
耳フサギ	三三
宮戸の提	三三
深山のおチンダサン	三三
民間医療	三三
六日年	三三
無縁仏	三三
迎え盆	三三
迎え待ち	三三
麦打ち	三三
麦打ち歌	三三
餅イチゲン	三三
餅じやらし	三三
餅造がし	三三
餅の引き物	三三
虫クマサン	三三
ムシ曲	三三
虫封じ	三三
無尽講	三三
村入り	三三
村共育	三三

村仕事	三
村総会	六
村つきあい	五
村に入ってくる人	七
村人足	七、六、七
村の神	六
村の気風	五
村の休日	五
村の経済	五
村の喧嘩	七
村の交際	五
村の集会	五
村の不文律	六
村の紋	五、五
村八分	一、六
村回り	一、六
村路細帳	三、五
村持地	三、五
村役	五、七
命名	一、六
メカイ	一、六
めかけ	一、六
メカゴ	一、六、三、五
メケージ	一、六
目薬	三、七
メグリ	三、七
メシブルマイ	三、七
メド削い	三、七
モウロク頭巾	三、七
もがり	三、七
モノ作り	一、六

物の単位	三、五
股引き	六
木綿・木綿服	二
モヤ(母屋)	五
モヤイ仕事	五
森田イツケ	六、九、三
守つ子	一、五
諸田イツケ	六
モロミダル	五
【や 行】	
ヤエンゴマ	三
屋うつり	三
ヤカガン	三、六
夜字会	三、五
ヤキモチ	三、五、三、五
ヤキモチ地蔵	六
厄落し	一、六
やくざ	五
薬師坂	三、五
薬師様(の池)	一、一〇、三、五、三、五
薬草	三、七
厄年	一、五
厄年子	一、五
厄はらい	三、五
厄病	三、五
役ゆすり	三、五
厄除け観音	三、五
やけど	三、四、三、五、三、七
屋号	六、七

屋敷	三、七
屋敷種荷	六、五
屋敷神	三、三、五
屋敷祭り	三、六
屋敷森	三、七
ヤシヤビシヤ	六、五
ヤシヤビシヤ	一、六
屋印	六
築打	三
築替	三
屋根ふき	三
屋根葺職人	三
ヤマ	一、五
山しごと	三
山の境	三
山始め	一、五
山開き	三、二
山女	三
山師	三
やんめ	三、三、七
結納	三、七
ユウガ燈	三
湯灌	三、三
雷代ヤマメ	三
ユタン	三
ユナガン	三
ユワイダル	三、五
夜あそび	三、六
良い縁	三

ヨイ節供	三
糞虫講	三
糞虫神社	三
糞虫の禁忌	三、七
糞虫の舞	三、六
八日だめ	三、七
ヨコツチコカブリ	七
夜爪	二
ヨドシ	九
夜なき	三、四、六
夜なき	三、四、六
夜なべ	五、六
ヨバイ	三、四
四間間取り	三、四
ヨメゴサマ(ねずみ)	三、七
縁迎え	一、五
縁のお茶	一、五
縁のこ年貢	一、五
縁の支度	一、五
縁の条件	一、七
縁の年始日	一、五
縁の本膳	一、五
寄合	三、七
寄居	七
ヨリツキ	三、四、五
夜の人(ねずみ)	三、七
ヨロク	六
【ら 行】	
雷電講	三
理趣分	一、六

寮

兩人の舞

ルスンギョウ

レイフヤマ

六算除け

六尺

六道銭

六部

六兵衛田

六辺返し

炬燵の作法

【わ行】

わかししゅう

若い衆座敷

若衆組

若水

ワカメ売り

若者組

わかれ塔婆

ワタシ

ワタマン

わたりげえ

わら細工

草鞋

わらじをぬぐ

わらじがけ

ワラジヌギ

わら鉄砲

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

ワラモノ
悪口

101

北橘村の民俗

昭和四十三年三月二十八日印刷
昭和四十三年三月三十日発行
非売品

編集兼発行者

群馬県教育委員会

発行所

前橋市大手町一丁目一一
群馬県教育委員会事務局

印刷所

前橋市元総社町六七
朝日印刷工業株式会社
電話四四三六七

